

# 琉球大学学術リポジトリ

## 琉球国王家・尚家文書の総合的研究

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 豊見山和行</p> <p>公開日: 2019-01-23</p> <p>キーワード (Ja): 琉球王国, 尚家文書, マイクロフィルム撮影, 紙焼き複製, 尚家文書目録(撮影複製), 対清貿易, 江戸幕府への琉球使節, 琉球処分関係, 尚家文書日録(撮影複製), 量地法式集, 琉球史, 首里王府, 個人貿易, 雨乞い儀礼, 琉球藩, 外交関係史料, 内政史料, 東京琉球館, 大阪琉球館, 鹿児島琉球館, 撮影・紙焼き, 雨乞日記, 在勤中日記, 対日本関係隠蔽, 冠船芸能, 琉球処分</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者: 豊見山, 和行, 赤嶺, 守, 高良, 倉吉, 山里, 純一, 上原, 兼善, 真栄平, 房昭, 田名, 真之, 安里, 進, 池宮, 正治, 西里, 喜行, Tomiyama, Kazuyuki, Akamine, Mamoru, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Jyuniti, Uehara, Kenzen, Maehira, Fusaaki, Asato, Susumu, Ikemiya, Masaharu, Nishizato, Kiko</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43245">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43245</a>

## 第Ⅱ部 史料解説・紹介篇

# 「宮古島八重山島江富川親方御檢使之時日記」第 487 号について

豊見山 和行

【表題】「宮古島八重山島江富川親方御檢使之時日記／渡海前 共六冊」

【年代】1872 年～73 年、同治 11 年申～同治 12 年酉。

【書誌及び関連情報】

表題では「共六冊」とあるが現存するのは 2 冊のみである。第 1 冊目は、同治 11 年申（1872 年）8 月 13 日の檢使任命から翌同治 12 年酉（1873 年）5 月 3 日まで、第 2 冊目は同治 12 年酉（1873 年）4 月から同年 9 月までである。

本日記の富川親方について「球陽」では、檢使・毛鳳来富川親方盛奎は 1872 年に任命され、翌年（1873 年）9 月に両先島へ赴き、その翌年（1874 年）5 月に回国と記す。ちなみに、富川親方の関与した規模帳類の作成年は、同治 13 年（1874 年）12 月で、発布は同治 14 年（1875）3 月付けである。

【内容】

本日記について、以下、特徴的な点を原文史料を交えて列挙（抄録）すると次のようになる。

## 一、伊地知小十郎による宮古・八重山島政への改革提言問題

大まかな経緯を示すと次のようになる。『球陽』（附巻 230 号）尚泰 25 年壬申（同治 11 年、明治 5、1872 年）の項に、「甌島県庁伝事伊地知壯之丞・奈良原幸五郎・書記伊地知小十郎等の官を遣差し、本国に駕臨す」とある。

伊地知らが鹿児島から派遣された目的は、同じく『球陽』（附巻 232 号）、同年（1872 年）の項に、「翁氏安谷屋親雲上盛記、伊地知小十郎殿に跟随して、前みて宮古・八重両島に赴き、諸務を弁理す。此の年、伊地知小十郎、土地の広狭を酌察し、百姓の逸労を考査する事の為に、前みて宮古・八重両島に赴く。故に諸務を料理し、併びに全島の情状を察する事の為に、盛記を遣差し該殿に跟随して、前みて両島に赴かしむ。五月に至り帰国す」とある。

「琉球藩」の通告は明治 5（1875）年 9 月 14 日であることから、その直前に鹿児島県庁役人が琉球国内を視察し、さらに具体的に改革提言を行ったのである。薩摩藩時代において、同藩役人が直接琉球国内を視察し、かつ改革を提言していた史実は現在のところ知られていないと思われる。時代の転換を象徴するできごとだと言えよう。

本日記、同治 11 年八月廿五日条に、「且当春伊地知小十郎殿、八重山島渡海被致、別冊之通島中之地形、人民活計之次第、榮勞旁見分之上、存寄之事件被申出趣も有之、彼是精細為取調部達 上聞、其方（富川親方）江御檢使被仰付被差渡候」とあり、伊地知は視察後、「存慮取調之条件 草稿」全 27 ヶ条の詳細な島政改革案を王府へ提起した。

さて、その提案は「存慮取調之条件草稿」「此節先島江渡海いたし八重山島中之地形、人民活計之次第、榮勞篤与致見分、此涯御手相附度存寄之条件、左条之通二候」と冒頭で触れ、以下、27 ヶ条で詳細に展開している。意識すると次のようになる。

第 1 から第 7 条は、「旧弊を除キ官員を減し、窮民を撫育する要条二候間、是非共御評議之上、御手を被相付度候」とあるように、百姓と役人間の矛盾を取りあげ、島役人の人

員削減を提起したものである。

第1条、西表島の士民は取り分け疲弊していること、困窮の士民救助を吟味して頂きたい。石垣四ヶ村（4500人程で、士は3600人、百姓は900人）は、百姓の臨時の奉公が多く、他村より特に疲労（疲弊）が甚だしいこと。

第2条、西表島も疲弊しており、多人数の廻島（親廻り）はかえって百姓の迷惑となっていること。

第3条、百姓からの年貢・夫役徴収における奉公人（士族層）による私欲を指弾し、奉公人には「陰に勝手筋」を行い、百姓の迷惑となっていること。

第4条、頭役から筆者まで俸禄以外に、供夫・民夫（免夫）の徴収権があるが、現夫は使用せず、夫役で作地させて豊凶に関係なく出来高で徴収したり、あるいは（夫）賃米＝米粟を交えて夫1人につき6俵づつを徴収している。これは「過当の割付」で百姓どもは迷惑している。今後は供夫・免夫を廃止し、それに相当する扶持米を蔵米から支給すべきこと（奉公人の夫遣いが流弊となりやすいことを指弾していること）。

第5条、官員の削減を提起したこと。官員の削減がなくては百姓の夫遣いの減少は困難である。5人を3人へ、4人を3人ないし2人へ減少すること。廃官人へ俸禄は従前どおりの支給とすること。

第6条、頭役の子孫は五代まで、与人・目差・筆者役の子孫は三代まで夫米の免除規定があるが、夫米免除士族が増大している。一世のみの夫米免除と嫡子の親の現役中は夫米免除と改正すべきこと。

第7条、石垣島の盛山・桃里村の戸数は各村6、7軒と少ない。ゆえに白保村への統合し、平得・真栄里村も役員を削減すべきこと。登野城・大川は人家続きゆえ、相応の官員を削減すべきこと。

次の第8条から第11条は、「是非得失ニ相懸要条ニ付、御評議有之、此涯早々御手被相附度候」として、風土病の改善予防策、海運問題、農業問題を提起している。

第8条、村の立地によって「風氣所」（風土病の土地）は他村からは「恐怖」の的となっている。先年の疫病の伝染で人戸は減少している。海ぎわらら山上まで樹木が繁茂し、山嵐の瘴気が強く、気候の変化も激しく住民は粗末な衣類である。（王府からの派遣の）詰め医者のみゆえ、病気の際に一服の丸薬の使用もなく、劣悪な医療状況の改善策として、詰め医者を2、3人増員し、島人を順次医道の稽古をさせられたい。従来、僅かの薬代にも窮迫して服用できない。今後は、官から薬品を支給し、医者へは相応の扶持を支給して島内を廻勤されたい。これは人々の人命にかかわる重大な事案ゆえ、早々に御吟味されたいこと。

第9条、島内の運送船の状況（3から～6反帆規模）では、重量のある運送は困難で不自由である。八重山諸島地域に慶良間船を1艘づつ造船させ、支給する吟味筋はないものか。

第10条、山中の樹木を伐採し、用木として宮古島まで運送させてはどうか。

第11条、島内の農耕地は広大ゆえ、地面の手入れが届き兼ねる傾向がある。荒れ地の開拓を奨励されたいこと。

次の第12条から第27条は、農地・肥料・煙草栽培の提起（第12条）、塵芥・悪水の肥料化（第13条）、鉄砲供与を許可し猪対策用とすることの提起（第14条）、漁業振興策（第

15条)、養豚・養山羊の奨励策(第16条)、製塩業の振興策(第17条)、製紙用の楮仕立て方法(第18条)、桑木と養蚕(第19条)、屋敷跡地や適切な土地に松杉竹桐等の有用木を仕立てること(第20条)、農具・鎌・包丁類の不所持で不自由につき鍛冶細工人の派遣の提起(第21条)、桶類が無く壺で代用しているため桶結い細工人の派遣提起(第22条)、早魃対策用の溜め池地造成の提起(第23条)、暖地(八重山)相応の薬種栽培の提起(第24条)、菜種子・棉・藍・真苧等の栽培奨励(第25条)、石垣・西表島の学校所運用の件(第26条)、80歳以上の老人・孤独・困窮者を調査済みゆえその祝儀と救助方の要請(第27条)、という内容であった。

〔史料本文〕

1

一島中村々奉公人百姓、入交居住いたし候処、百姓共別而勞甚敷、次ニ者無役之奉公人至極勞居候も相見得、就中西表島者士民共勞弥増、今形被召置候而者島中連々勞相増、人戸茂相減可申、実ニ歎ヶ敷次第筆紙難尽候、此涯困窮之士民救助筋屹与御吟味有之度事、但、石垣島在番詰居之所殿城・大川・石垣・新川之四ヶ村有之、平常四ヶ与相唱、奉公人・百姓男女四千五百人程罷在、其内百姓者纔九百人罷居候付、大概五分一二相当、全躰百姓戸数相少、臨時之奉公等不少訳ニ茂可有之哉、他村よりも余程勞居候、奉公人之内ニ茂難渋相見得候茂段々有之候得共、百姓丈ヶ者無之様相見得候、

2

一西表之儀者、在番詰居之四ヶ村より者海上拾里余相隔居候處、詰中一度位之廻島ニ而者何篇届兼候儀も有之哉、右ニ付頭役一人交代ニ而相詰居、其上在番より每春一度完廻島有之、榮勞等見分いたし、窮民救助之道評議有之候ハ、行届可申候、尤多人数之手廻ニ而廻島有之、百姓共却而迷惑相成候而者不宜候付、詰事易簡ニ有之度事、

3

一島中奉公人茂百姓年貢米、其外何そ之諸出米、又者公役夫立等之次第、不殘取調部相成候様、申達書出ニ相成候、然ニ百姓老人前現実上納石数并納物等、内々承合候得者、右書出不相見得、上納米又ハ品物等、段々有之候得共巨細相糺不申、夫形召置候、全躰役々中陰ニ勝手筋之取計を以、百姓共迷惑相成候儀も不少哉ニ相聞得、現在自儘之次第、慥成證抛迄も見届置候儀も有之、従来之習弊ニ可有之、爾来既往之事者無御咎、右等之惡弊被相除、役人中改心いたし廉直相守、仮初ニ茂私欲之儀無之様、早々御所置被相付度、左候ハ、第一下民之救助可罷成事、

4

一頭役より筆者ニ至迄、俸禄之外供夫・民(免カ)夫被召付置候得共、現夫者不召仕、夫老人前田島之作地有之、右を耕させ豊凶無構出来高請取、又者質米ニ而請負究、米粟取交、老人前六俵ツ、取納いたし候仕来ニ候由、右者過当之割付ニ而、殊ニ取納ニ付而者百姓共迷惑之廉茂有之哉ニ相聞へ、御手元与者變り、遠海懸而之事故、流弊も生し安き儀ニ候間、以来供夫・民(免カ)夫者御引取、右之引替相当之扶持米被相重、御蔵米を以被下候ハ、名実正敷、公事之御所置ニ可相成候事、

5

一官員不相減候而者、百姓共夫仕旁減少難成、何れ之国茂官員を減するを至当之論ニ相究

候間、島中官員五人者三人減シ、四人者三人或式人減し、三人者式人或一人ニ減し、却而取締行届可申、尤廢官之人々者俸禄等従前之通被下候得者、何ぞ迷惑筋も無之、左候而交代等之節々、廢官之内より被仰付候様有之度事、

6

一頭相勤候家者子孫五代、与人・目差以下筆者迄相勤候家者子孫三代、夫米御免之規定之事ニ者候得共、夫米御免之家部連々相重、却而子孫怠惰之基可罷成候、仍而此規定者被廢、其身一世限り夫米御免ニ而、其嫡子一人ニ限り親勤役中夫米御免与被定置可然哉、左候得者夫米相懸人数相重候付、割合之員数相減、無役之奉公人少ニ而出米相減、旁可然哉之事、

7

一石垣島之内、盛山村・桃里村之儀、一村ニ六七軒位茂有之、殊ニ至極之勞村ニ而難村立様見受候付、兩村共白保村江合村相成可然哉、平得村・真榮里村兩村ニ而一村分之役員減シ、殿城村・大川村兩村ニ而も皆人家統之村ニ而、随分支配行届可申、左候得者相応官員相減し、扶持米・夫仕等格別相減可申事、

但、西表島江茂人戸相少一村段々有之、同様之振合ニ而合村、又者兩村同支配相成候様有之度事、

右、七ヶ条旧弊を除キ官員を減し、窮民を撫育する要条ニ候間、是非共御評議之上、御手を被相付度候、

8

一石垣・西表兩島共、方限ニ依風氣所与唱来り、他村より者別而恐怖いたし、詰役々右方限江廻勤等、殊之外相恐居候躰ニ候、先年来右風氣ニ相罹り、疫病ニ變し死亡夥敷村中流行伝染いたし、人戸相減し、当分人少之一村段々有之、悲痛難堪次第ニ候、全躰兩島共高山多く、村々方限ニ依而者海涯より山之頂キ迄樹木森々生繁り、或後ニ高山を屏風ニして人居相構候得者、山嵐之瘴氣強く、朝暮氣候相替り、俄ニ雨降り、山上ニ雲霧掛候得者、暫時間暑中ニ冷風を催し候事毎々有之、殊更夜分之冷氣強く、高山近キ方限ハ氣候甚不順ニ有之、其氣候ニ随候得者、風氣之煩相罹候懸念無之候得共、昼夜芭蕉帷子耄枚着し候者共而已ニ候得者、其土地ニ馴居候得茂邪氣を受候者不少由、然ニ在番付之詰医師耄人之外、医師不罷居、島中病氣煩付一服之丸薬相用候者無之、死命ニ及候共薬用不致次第何共不便之至ニ候、依之人民養生之道是非被相開、詰医師兩三人も被相重、島人茂追々医道稽古いたし候様有之度、年々死亡之不少證據ニ者、文政七申年（1824）改本より人員三千人余相減居候、右を以後來之患茂御吟味有之度、尤詰医師被相重ニ付而者、島中余程相勞居、是迄薬用ニ不及相濟来候付而者、纔之病氣迄者薬料ニ差迫り服薬不相望哉茂難計、依之此涯官より薬品者被相渡、医師江者相当之扶持米被下、島中廻勤いたし、養生之道相開候様被仰付候ハ、難有御仁慮奉感服、許多之病人得扶（快力）氣可申、是等者人々死生ニ相係深重之事候付、早々御吟味有之度事、

9

一島中運漕船三反より五六反帆迄者有之、皆樁木ニ而造立いたし、重荷之運漕者出来兼、其余者繰舟勝ニ候得者荷物之運漕不自由ニ付、兩島村々又者離島江計羅摩船（慶良間船）壹艘ツ、御見合、御造渡シ相成候御吟味筋者無之哉、左候得者島中往来之便利者無申迄、宮古島并琉球江之運漕茂相調可申哉、

10

一山中之樹木伐取少ニ而茂、山氣薄く相成候様御手相付度、就而者第一家作用之諸材木を伐下し候、大鋸・大斧之類相用候山師之手業被相開、其外薪山、炭山、椎茸山等茂追々被相開、材木・薪者宮古島辺江致運漕候ハ、本琉球より之里数より近ク、乍双方弁利可罷成候、河平村より平窪村迄之海辺より伐取、宮古迄運漕候ハ、里数近ク旁運漕之弁利可宜、左候ハ、是迄無用之品を以利益を得、宮古茂下料之薪を買取、隨而山氣茂薄罷成、旁両全之策与相考候間、早々御評議有之度事、

11

一島中手広之作職、地面手入拵届兼候向ニ相見得候間、与人・目差兩役者受持之村々農業勸導方委任被仰付置、平常民間之苦情無之様、第一夫仕・諸出米等被定置候外、余計之出米ニ及候儀共無之様、取締相勤候様有之度、尤奉公人茂御年貢相勤候付、農業付而者与人・目差之差因ニ随ひ致精作、男女共徒ニ遊手座食之躰、屹与無之様ニいたし、島中上下之職分を以農業相勤候ハ、荒地開拓茂追々相重、作毛出来増島中之益筋可罷成事、右、四ヶ条是非得失ニ相懸要条ニ付、御評議有之、此涯早々御手被相附度候、

12

一島々・村々ニ而地面之優劣有之、一樣ニ者無之候得共、新開より三四ヶ年、又者五年計茂致作職、其後五六年、又ハ拾年以上も荒し置、繰越ニ荒地を焼払相開候仕来ニ而、培養ハ全不用習俗ニ候、人里遠キ地面者不及申、人戸少キ所者、余多之荒地許多有之、人配者被引移、相当之事候得共、不容易費用相抱事ニ候間、不依誰人、引移開拓いたし度望之者者式拾ヶ年勝手作取之頭免許被究置度、左候ハ、移来候者者則土地染付、子孫茂相栄、在所江立帰候儀も相叶間敷、且又牛馬之糞、其外大小便者培養ニ不用、全穢物にして捨置候習俗ニ候由、兼而培養仕習候功者（巧者力）之作人、本琉球之内より四五人茂しらへ之上、三ヶ年位作職伝習方ニ被差下、彼地望之所江木屋一軒完造立、牛馬迄も被相渡、地面茂望次第被相渡、左候而必要之農具并物種子類、不足無之様持渡、相応之地勝手作取候様被仰付候ハ、従来之作毛与違ひ甲乙有之事も島中真実存当り、農業之手入拵一變可致哉、且又四節之野菜類、別而無他事、兼而者唐芋之葉、蓬之葉杯野菜ニ用候躰ニ而不自由相見得候間、野菜追々植広候様有之度、又煙草者上地ニ相応候哉、余程大作いたし候、是茂国府・指宿之出来者難及候付、培養旁作様伝習候ハ、今一層風味茂宜敷、島中勝手可相成も難計、旁農事之一条、此涯御吟味有之度事、

13

一塵を焼キ灰を培養ニ用候事共者、左程忌嫌候訳有之間敷、島中塵焼相初、作職相試候様いたし度、一度効見届宜候得者被行候様可有之、屋敷ノ江悪水溜有之候付、野菜其外右之灰ニ和し召仕候様いたし度事、

14

一山中之猪者作毛を荒し候由候付、作障之猪者鉄鉋ニ而射留候儀被差免置度、尤四五匁以下之筒御買入数挺被相渡、兼而奉公人壮年之方射方心得居候様有之度事、  
但、西表辺者猪与（者力）半分取いたし候得者、宜与申程之事ニ候、

15

一海中許多之魚相見得、兼而魚無多事候、畢竟漁獵之道不相開故之事候、網引等種々海漁之手業相開候ハ、島中十分魚食茂出来、追々人民増殖之基可罷成事、

覚

北谷間切

唐苧作立方、両先島江伝授被仰付候間、村々功者之者共召寄、地拵方植付手入方、壅用様苧取製作等之仕様、委敷問尋書付を以申上候様被仰渡趣奉承知、左ニ申上候、一唐苧初而植付敷地之儀、上地を以撰、土式三尺程打かへし、三ヶ月前より四五度も打拵仕置可申候、

附、敷地之儀、可成程者砂交之所地作上夫ニ而御座候、一同苗植付方之儀、可成程者二月より三月中、又者八月中旬比より九月中苗調部方を以上夫之潤ニ式尺間ニ穴堀候而、老穴ニかち壅式斤程入植付、十五六日比相成候ハ、水壅相用、草萌立次第【金平】草ニ而水壅五六合程相かけ、百二三拾日程相成候ハ、あら苧はかり早速【金平】草いたし植付置候、敷地惣様ニ右苧取置候苧葉ともはをり付、其上式三寸丈ケおそへ壅仕、八九日程相成、子萌出候ハ、水壅相用候而宜可申候、

但、苗之儀、葉広うら白等上夫ニ而候、

< 5 条ヶ略 >

右者唐苧作立之村々功者之者共召寄問尋仕候處、ヶ条之通申出有之候、此段申上候、以上、耕作筆者／伝道親雲上、同／伊礼親雲上、同／伝道親雲上、地頭代／津嘉山親雲上右之通、委曲承届相違無御座候、以上、

検者／新里筑登之親雲上、下知役／真玉橋里之子親雲上

### 三、宮古島の島政問題

1872年8月28日付けで富川親方から宮古島・八重山島の在番・御使者方・頭に宛てた7ヶ条の諮問があった。その主要な項目は、系持ちの現頭数(第2条)、百姓の現頭数(第3条)、百姓の地方所持状況・上納物の実態・雑物・夫遣・御用布負担状況(第4条)、農具不足の調査(6条)などについての報告を求めたものである(史料本文略)。

1872年9月には、宮古島頭役が首里へ出向いていたため、直接次の風俗禁令が「直面申渡候也」として手交されていた。

「覚／一、時よた之事、／一、平日男女相集くいちや舞之事、／一、人々作毛致聊爾候者之事、／右条々取締方之事、／申九月廿七日」というものであった。

同年10月付け文書には、宮古島の島政について御検使係方へ吟味を諮問し、その回答があった。その第3条に宮古島に「滞在之琉人共」が、家屋敷や地方(耕地)などを要求する者が多く、島方の煩いとなっている。そのため、帰国させるようにすべきだが、多人数ゆえ、どのように処理するか回答せよ、というものであった。それに対して、両先島御用取調係中からの回答は、滞在年限が切れた者は帰帆させること、かつ家屋敷・地方所持の者は、相応の代金で島方へ売却させて證文を取る、という回答が同年12月付けで行われていた。王府部内の両先島御用取調係へ諮問していることから、一定の方針を立てていたことが分かる。

同年11月5日付けで、宮古島で発生していた盗難問題に対して王府から御検使係方へ次のような諮問がなされていた。

「一、同島(宮古島)之儀、原々并屋敷内より諸作物盗取ヶ間敷、跡々より段々御取締被仰付候得共于今不相止、平日油断ヶ間敷打過、唐苧并木棉花・藍・諸野菜等人々作出候



得者、自俣致聊爾、剩右様私曲之働相頭候而茂何そ恥辱躰無之方段々罷在候由・・・」「右条々、吟味」して回答せよ、というものであった。それに対して、両先島御用取調係中から「取締を嚴重にすること、【口愛】役人・筆者らは常時奔走して監視させること、盗人本人は盗品に応じて流刑・所払い、日晒しなどに処すこと」という回答が翌1873年正月付けで行われていた。

1873年5月3日付けで、宮古島から王府御検使方に対して、宮古島の情報が王府の要求に従って事前に提出されていた。多様な針図（測量図）とともに杣山や山野喰実（敷）に関する情報が提出されていた点は興味深い、ここでは言及するにとどめる。

覚

- 一大地中杣山敷針図帳巻冊、
- 一來間・池間・大神三ヶ村針図帳巻冊、
- 一伊良部島惣廻并同島中針図帳巻冊、
- 一同島杣山敷針図帳巻冊、
- 一多良間島大波揚以後惣廻并海垣杣山敷針図帳巻冊、
- 一水納島針図帳巻冊、
- 一同島喰実并破所針図帳巻冊、

右、当島大地離々杣山并山野喰実、島中外廻等之針竿帳御用御見合候間写取、早便より可差登旨被仰下候處、島中外廻之針竿帳者虫入字面分明無之、写方不罷成、且山野喰実・針竿帳者道具帳ニも相立不申、前々より仕立方無之躰相見得候付、本行之帳数迄を写取せ差登申候、此段御問合申上候、以上、

酉

宮古島頭足

五月三日

松原首里大屋子

さらに、宮古島の各村の生産状況の報告も、1873年酉5月付けで王府へ行われていた。

覚

下里村

- 一小麦八拾三俵、／一大麦百八俵壹斗五升、／一菜種子拾三俵貳斗、／但、三行下作、

西里村

- 一小麦百六俵、／一大麦百五拾九俵、／一菜種子拾七俵貳斗、／但、三行下作、

<中略>

- 合小麦千九百五拾六俵貳斗七升、
- 合大麦三千四百七拾七俵七斗四升、
- 合菜種子百拾五俵壹斗貳升貳合、

右、村々麦菜種子作柄并出来高、各【口愛】役人申出表取、如斯御座候、以上、

酉五月

御使者係役新里目差

上原仁屋

前述の農具所持状況に関する報告は、1873年酉5月付けで次のように王府へ提出されていた。

覚

下里村

- 一鍬貳拾刃、／一かねから拾、／一長口貳拾刃、

西里村

一鍬百八拾三刃、／一長口百八拾三刃、／一かねから百八拾三、

<中略>

合鍬六百拾七刃、

石鍬之事

合長口四百九拾壹刃、

農具外

合よふき百九拾五刃、

合かねから三百四拾壹刃、

合牛之鋤拾八刃、

合かねつゝ百拾、

右、村々農具不足高、各【口愛】役人申出表取メ如斯御座候、以上、

酉五月

御使者係役新里目差

上原仁屋

ただし、上記の報告において久貝村、松原村、来間村、宮国村、新里村、砂川村、友利村、保良村、新城村、比嘉村、長間村、野国村に関する記載は見られない。そのことは、それらの村々は農具を十分所持していたことを示すのか、なお検討の余地を残している。

違法滞在人の問題については、1873年5月付けで、王府へ次のように報告がなされていた。

「当島（宮古島）江近年、其御地之者共無手形、多人数罷渡致商売、所之故障相成候付、御取締向之儀、毎度段々被仰付越趣御座候付、於爰元取締向仕事候得共、漸々及多人数、最早滞在ニ而家屋敷妻子畠地等相求候者共、又者借宅ニ而相住居候者共取合百拾貳人相及、其外御米漕船々より年々便乗ニ而罷下、木屋打調候而致商売候者、是又別紙之通五拾六人、取合百六拾八人、諸品物過合（分力）持下、且人躰次第ニ而田舎方々罷通致振売候付、諸役人ニも各【口愛】役之者共、品物猥ニ不買取様堅取締有之由候得共、愚昧之百姓等者勘弁不有合候而可相済物茂買取、代米付届及難儀、上納不相済内ニも押々引取候様之事共ニ而、年貢諸上納物取メ、船々仕出方之支相成、且平良五ヶ村<略>此段、御問合申上候、以上、

酉五月

松原首里大屋子

下地親雲上」

沖縄島（其御地）から許可なく違法に滞在する人間が増加していること、彼らは商売のために来島し、家屋・妻子・畑地を持つ者や借家住まいの者は112名である。その他、年貢運送船に便乗して来島し、家を建てて商売する者は別紙のように56名おり、合計168名に及んでいる。かつ田舎へ出向き振り売りをするため百姓に余計な出費をさせていることなどが指弾されていた。

その別紙での各村における滞在人のリストの一例は次の通りである。

覚

下里村

若狭町村嫡子

金城村嫡子

比嘉筑登之親雲上

照屋里之子親雲上

汀志良次村嫡子	久場川村嫡子
高江洲筑登之親雲上	石原里之子
若狭町村三男	同人次男
瀬名波筑登之	瀬名波筑登之
東村次男	西村嫡子
根路銘筑登之	比嘉筑登之

<中略>

合、貳拾三人

<中略>

池間村／知念間切久高島・かね西銘、  
久貝村／糸満村仲村・大城筑登之親雲上、同村右同・次ら大城。  
保良村／知念間切久高島・内間筑登之、若狭町村・大嶺筑登之。

<中略>

惣合百拾貳人

右、滞在人共面立如斯御座候、以上、

酉

宮古島仕上世役松原目差

五月

饒平名筑登之

これらの特徴のひとつは、圧倒的に下層の士族身分の者が多く、久高人・糸満人は極めて少ない点にある。

同様に、滞在人の家屋所持者リストも実名入りで同年5月付けで報告されていた。例えば、「久米村／山里筑登之、同村／糸数筑登之」ら56名は、「右通、木屋人数面立如斯御座候、以上」というものであった。具体的な居住村名は記載が見られないが、上記の別紙と突き合わせることで判明する。

以上から、両先島へ検使派遣前の状況が詳細に把握できること、検使側が事前に現地（宮古・八重山）に対して様々な諮問を行い、現地視察以前から諸準備を周到に重ねていたことが理解されよう。さらに、実際に発布された「富川親方規模帳」と比較することによって、何が法令・布達として残ったかという点での比較が可能となる。そのことを通じて、この時期の両先島に対する王府の両先島認識や課題意識が判明するものと思われる。そして、鹿児島県庁書記の伊地知小十郎による首里王府への改革提言はほとんど考慮されていないように見えるが、その具体的分析は今後の課題としたい。

## 「従御国元渡唐船作広昆布差荷之件」第263号について

上原 兼善

【表題】 従御国元渡唐船作広昆布差荷之件

【文書番号】 263号

【年代】 1830年、文政13（天保元）、道光10。

〔内容〕

1830年（文政13・天保1）9月、薩摩藩は琉球館の在番・聞役らに、琉球貿易の本手品の御備えも差し支え、毎度唐注文品も揃いかね買い欠けにおよんでいることを理由に、渡唐船を5、6尺作り広め、それに応じて深く作り替えることを打診するにいたった。琉球館在番伊是名親方は早速この一件を国王尚育に諮るために帰国、いっぽう藩は御裁許掛見習松崎平左衛門・唐物掛書役原田尚助らを田尻善左衛門の船に同船せしめて、王府との交渉にあたらせこととなった。田尻は389番文書で明かになるように、これとは別に砂糖の作り広めを琉球と交渉する使命を負わされていた人物である。その一件が琉球館に打診されるのがやはり9月であることからすると、この月藩は琉球を取り込むかたちで天保改革を本格的に始動させたことが理解できる。そういう意味では藩の初期天保改革の実態をつたえる第一級の史料といえよう。

藩が琉球側に示した構想は、渡唐船の船幅を広げ、船底を深く作り替えることで、藩唐物方と琉球蔵方で昆布5万斤ずつ積み込み、それで唐物輸入の本手を賄おうとするものであった。しかし、この提案について、吟味を委ねられた久米村および御船手は、改造船では福州川筋の遡航が困難であること、中国の疑惑を招くことなどを理由に、受け容れを拒みつつけている。琉球側の思わぬ抵抗にとまどった唐物方御目付の高田尚五郎らは、護送船の名目で渡唐船を仕立て、5万斤の昆布の輸出拡大をはかるか、あるいは唐物代銀の借上げに応ずるか二者択一を迫り、結局琉球側は吟味を重ねた末、後者の途で応ずることによってこの一件の解決をはかっている。

この記録で興味深く思われるのは琉球側が唐物代銀の借上げの途を選択した理由である。すなわち、王府では輸出昆布の斤数を1、2万斤に斤数を減らして交渉することを考えたが、次第に斤数の増大要求の可能性がある、昆布の差荷が始まればその分の船間は永久に大和の船間になり、輸出品は昆布にかぎらず、いりこその他の海産物にまで拡大されることになる、などとし、「唐との貿易が順調だからといって、船を造り広め、あるいは差荷のかたちで介入してくるとは嘆かわしい次第」（唐縁合近年利益相見得候途、或船作広、或差荷口御内輪之所江御手入被仰付候儀、何口嘆ヶ敷次第）とまで言い切っている。こうした王府の本音が覗ける史料はめったにない。琉球貿易は利潤がなかったとする一部の説が当たらないことも、この史料は知らしめる。

〔史料本文〕

従御国元渡唐船作広昆布差荷之件

一冊

大清道光十年唐 庚

日本文政十三年 寅

渡唐船作広并昆布差荷等被仰渡候処、右兩条者御断 相濟一節唐物代銀三拾五万貫文充御貸上御請申上候 日記

附、於大和御返錢被成下候段被仰渡候付、御礼向 之儀込ル

寅十月五日伊是名親方持下備 上覽

伊是〔 〕

兼而被仰渡、今月十日直之進同〔 〕仕候処、唐渡船之儀、当分通〔 〕御本手品御備之分茂難被差口、夫故每度唐御注文品揃兼及買欠候付、此節五六尺之間相広メ、深サ者右江応シ格好宜口造替、来秋唐渡間ニ逢候様被仰付候条、早々罷下、摂政・三司官江申出、無遅滞造立候様との趣茂可相達旨、御内達被相渡、左〔 〕松崎平左衛門殿事、右御内用之儀ニ口早々渡海被仰付候間、平左衛門殿宅江茂罷出口合仕、早々帰帆之上摂政・三司官江相達、いつれ御内達通行届候様可仕旨被仰聞、右ニ付今日直之進同伴、平左衛門殿宅江口罷出候処、久馬殿より被仰渡候御内達書之通、帰帆之上口上可申上候得共、別紙御内達江写相添、此段御問合申上候、以上

九月十三日

川上直之進

伊是名親雲上

安里親〔 〕

羽地王子様

座喜味親方様

与那原親方様

宜野湾親方様

御在番所并唐物方御届済

内達之覚

伊是名親雲上

唐渡船之儀、当分通ニ而者、唐物御本手品御備之分茂難被差渡、夫故每度唐御注文品揃兼及買欠候付、此節五六尺之間相広、深サ者右江応シ恰好宜方造替、来秋唐渡間ニ逢候様被仰付候条、早々罷下、摂政・三司官江申出、無遅滞造立候様との趣茂可相達事

同日到来備

上覽

一松崎平左衛門殿、来春代琉球詰被仰付置候処、御内 用之儀有之、当秋早船より被差越候段、別紙之通久 馬殿御書付、山田新介殿御取次被仰渡候

一唐物掛書役原田尚助殿茂、右平左衛門殿江被召附、 当秋早船より被差越候段、是又別紙之通新介殿御取 次被仰渡候

一右平左衛門殿者、其御地詰高田尚五郎跡御代、尚介殿者高崎口蔵殿跡代〔 〕渡海被仰附置候処、別紙を以申上候処、伊是名親方江被仰付置候御内用之儀ニ付、此節渡海被仰付候由、且平左衛門殿御役格承合候処、御裁許掛見習ニ而候得共、琉球詰中御目附御裁許掛之場ニ而相勤候様被仰付置候段、平左衛門殿より承申候

右別紙御書付兩通相添、此段御問合申上候、以上

寅九月十三日

川上直之進

伊是名親方  
安里親方

羽地王子様  
座喜味親方様  
与那原親方様  
宜野湾親方様  
御番所并唐物方御届済

松崎平左衛門

右来春代琉球詰被仰付置候処、御内用之儀有之、当秋早便より被差越候条、此旨申渡可承  
向江茂可申渡候

八月

右同

久 [      ]

唐物掛  
書役

原田尚助

右者、松崎平左衛門事、来春代琉球詰被仰付置候処、御内用之儀有之、当秋早便より  
被差越候付、召付被 差越候事  
本文伊是名親方より御内達書一所ニ被差出候、尤御内達書者前条ニ相見得候故、爰ニ略ス  
今日見分相成候

夏櫓船

一惣長拾六尋貳尺

外ニ表江八尺重ミ

一関幅四尋三尺

一右同深サ老丈三尺

一腰幅五尋三尺

一関胴木貳尺貳寸角

但、長四尋三尺

一帆柱

但、長拾七尋三尺

目通ニ而八尺廻り

寅九月十六日

一惣長拾八尋貳尺

一関胴木

但、長五尋三尺

角貳尺四寸

一筒挟貳本

但、長三尋四尺

ヒ貳尺五寸

部老尺老寸

一腰広サ六尋三尺

一帆柱

但、長拾八尋老尺

目通り五尺六寸廻り

右長式尋、横幅五尺大振之所、深口当分之通

但、関胴木并筒挟等相用候材木有、口之訳

寅十月廿九日松崎平左衛門殿、原田尚助殿、田尻口左衛門殿乗船より到来

上覧并御在番所唐物方御届済

琉球方より差渡候渡唐船、当分幅尺より五尺程茂作広被仰〔 〕何程可相重哉、御口手御〔 〕

御積料掛世辞づき高口口右〔 〕申渡候処、腰幅五尺、惣長式〔 〕

相成候ハ、大概拾万斤位茂積重可申、吟味之趣申出候付、此節松嶋平左衛門渡海之上御請申出、作広相成儀候ハ、昆布拾万斤相渡、右之内五万斤丈者唐物方より差荷を以被相渡、残り五万斤丈者琉球蔵方より相渡候様被仰付度、左候ハ、船作替等之補ニ茂可相成、尤昆布渡方者勿論、於唐壳払彼是之儀者、護送船より昆布差荷を以被差下候、仕向通被仰付度申候趣有之、吟味之通被仰付候、被仰渡候事

右之通川田彦九郎殿御取次今日被仰渡候、然者唐渡船作広之儀付而者、先達而伊是名親方江直ニ被仰渡、松崎平左衛門殿江茂渡海被仰付儀候得者、於其許程能御吟味可有御座儀奉存候、此段御問合申上候、以上

寅十月十六日

川上直之進

安里親方

座喜味親方様

与那原親方様

宜之湾親方様

十一月二日

一今日御在番所江撰政羽地王子、三司官宜野湾親方御用ニ付参上仕候処、御在番奉行町田平殿、唐物方御目附高田尚五郎殿、松崎平左衛門殿御出張ニ而、御奉行より渡唐船幅広被仰渡候段御演達有之、右仰渡御書付并川上久馬殿より御文箱老ツ被相渡、尚五郎殿、平左衛門殿者引取、猶又御奉行より御糖御買入被仰渡候段御演達、右仰渡御書付被相渡候付罷登、翌〔 〕御前参上、右両通之御書付久馬殿御状備 上覧候事

但

一久馬殿より之御状、御鎖之側譜久村親雲上持下、附役黒田猪兵衛殿取次、御在番奉行入御覧、唐物方江口尚五郎殿掛御目候、平左衛門殿江者尚五郎殿より可被相達由承候也

一砂糖御買入ニ付仰渡御書付者、砂口日記ニ相見得候付、此ニ略ス

渡唐〔 〕御注文〔 〕

今五六尺程相広メ、四五寸程〔 〕

積重御注文品可相揃、且渡唐付口昆布拾万斤程積増可相成候付、来秋渡唐船より造替被仰付、尤右積増昆布之内、半方者護送船同様琉球方江被相渡、半方唐物方より差荷を以可被遣候間、於唐国壳払、右代銀渡唐役者共為口を以帰帆之上、唐物御代払用ニ可被相備旨被仰渡候事

寅十一月

一筆致啓達達候、然者渡唐船之儀当分通二而者積間狭、唐物御本手品御備之分茂難被差渡、夫故每度御注文品揃兼及買欠候付、此節五六尺之間相広メ、深サ者右江応恰好宜方造替被仰付、其段者伊是名親方江申含越候間被致承知、則より造立、来秋渡唐間ニ逢候様可被取計候、猶委細者松崎平左衛門茂申含越候、恐々謹言

十月十五日  
羽地王子様  
座喜味親方様  
与那原親方  
宜野湾親方

追啓、渡唐海上浅海等二而、本文通口作方自然差支茂候者、唐船杯之振合を以、何分茂積荷物相増候様造立可有之候、以上

十月十五日  
川上久馬  
羽地王子  
座喜味親方  
与那原親方  
宜野湾親方

一右二付、久米村長史御船手奉行召寄、吟味申渡候事

同九日

一、久米村并御船手高方吟味左之通申出候事

渡唐船幅五六尺相広作事被仰付、於唐差支者有之間敷哉吟味仕可申上旨被仰渡、私共出会申談候処、進貢船之儀前々者唐よ〔 〕御拝領〔 〕差出作〔 〕且乗人数茂一艘前百人ニ不〔 〕

置、此段者海防官衛門江委敷相知口申候、尤渡唐船致着候得者、早速海防口船江被乗付、稠敷改方有之、且往古者十年一貢、五年一貢、引次一年一貢為有之事候処、成化年中渡唐之者違法規則之仕形共有之候而、隔年一貢相成、其後一年一貢之御願段々被仰上候得共、進貢事、寄商売仕候筋を以御免許無御座、所事嚴重御取扱ニ而古来最通来、最早唐国定規ニ相成申候、然処船程相広候敷、又者船形逆茂格別相替作立候而者、唐向都合不仕、屹度御僉議相及可申、琉球進貢之勤者次ニいたし商売専ニ仕候段、時々官人衆より被申掛儀共有之事候付、屹与其疑相晴候様いつれ茂心掛罷在事候処、古来差定候貢船幅広作事仕候而者、売物多積渡候為、態々作広筋ニ被相察、弥商売専入精候段被取受候儀案中〔 〕候〔 〕何篇旧例〔 〕取總申上候

〔 〕  
御故障可成立旨存当申候間、有〔 〕被召置候様有御座度儀与吟味仕、此段申上候、以上

寅十一月  
嫡子 長嶺通事親雲上  
長史 安座間通事親雲上  
次男 我喜屋通事親雲上  
嫡子 阿波連通事親雲上  
阿嘉親雲上



嫡子 名嘉地通事親雲上  
 長史 幸喜通事親雲上  
 次男 阿波連通事親雲上  
       真栄里親雲上  
       儀間親雲上  
       牧志親雲上  
       亀嶋親雲上  
 次男 新垣通事親雲上  
 四男 登川里子親雲上  
 嫡子 高嶺里子親雲上  
 嫡子 伊差川通事〔 〕  
       野〔 〕  
       喜〔 〕  
       富浜〔 〕  
 惣役 知名親雲上  
       武嶋親雲上

覚

御船之儀、当分より幅五六尺程相広作事被仰付、唐往還差支不申候哉之旨、被仰渡趣奉承知候、右ニ付相談仕候处、仰渡通船幅相広候而茂、船方之者拾四五人被召重候得者、海上船働者何そ心遣有之間敷与奉存候、然处唐湊之儀、川口より着場迄二拾四五里茂可有之、日数相掛着船仕、其上河々之流ニ而洪水每澳相替、川筋之様狭有之、潮引者強ク所々浅ク有之、就中ほいち崎与申所漸々浅ク相成、諸船出入不自由罷成候故、福州辺商船者頃年都而小振ニ作立候様ニ承申候、且双亀与申瀬戸者僅式拾間程有之、潮引別而強ク所々飛瀬有之、折々壳船怪我仕、御船茂為及難船儀多々有之、於此所二者船中人口言語茂相止、心中相慎漸乘通申〔 〕御座候、右通行川筋狭有之候〔 〕有之候付、楫成丈ケ卷上ケ引〔 〕案内船等式拾艘余雇入、御船江茂引口三四人乗付、満潮之時分見計、御船双方五六人立、備竿を以川筋深浅相試候而出入仕事御座候处、御船五六尺程幅広作事被仰付候ハ、右式狭キ川筋ニ而船乗口差支候儀者勿論、兎角船程ニ応シ楫長茂相延、其分者潮入茂深ク相成申積ニ而、決而出入相調不申儀与奉存候、此段相談を以申上事御座候間、宜様被仰上可被下儀奉頼上候、以上

寅十一月

接貢船作事

新垣筑登之

同 宮平筑親雲上

同 長嶺筑親雲上

同 金城筑親雲上

同 宮城筑親雲上

同 西銘筑親雲上

大唐船作事

喜屋武筑親雲上

接貢船作事

牧志筑親雲上

同船頭

座喜味筑親雲上

大唐船前船頭

当間筑親雲上

右之通申出候間、此段申上候、以上

寅十一月

御船奉行

仲〔 〕

一右之通御船造広之儀、唐之都合〔 〕福州湊出入茂差支候付而者、御断申上候様、御物奉行・申口其外掛中より茂吟味申出候付、御断之書面左之通相調させ、久米村人吟味書写、船方吟味書写都合三通、里主小禄録親雲上を以御奉行掛御目、尚五郎殿入内見候処、表向差出候様被仰聞候付、同十一日撰政・三司官御前参上、右三通之書面備 上覽、即日宜野湾親方持下、尚五郎殿御宿参上、平左衛門殿茂出席、右書付差出候処、得与吟味之上、後日何分可被仰聞旨致承知、罷歸候事

附、右御断之書付并吟味書両通写、譜久村親雲上を以、伊是名親方江相達させ候、御船作広之儀ニ付、伊是名茂上国内掛被仰付置候故、右通相達させ候也

唐渡船之儀、当分通ニ而者、唐物御本手品御備之分茂難被差渡、夫故每度唐御注文品揃兼及買欠候付、此節〔 〕相広メ、深サハ右江応シ恰好宜〔 〕替、来秋唐渡間ニ逢候様、左候而作広相成儀候ハ、昆布差荷を以被差渡候儀共、追々御書付を以被仰渡置、猶又御演達之趣を茂委曲承知仕候、依之向々江吟味申渡候処、渡唐船之儀、船程并乘人数等唐より被定置、厳格成取扱ニ而古来其通最通来、右之段者海防官衛門江茂委敷差知、且当地往古者十年一貢、五年一貢、引次一年一貢為有之事候処、成化年中渡唐之者法違利欲之仕形等ニ付、隔年一貢相成、彼是最早唐国定規相成候、然処今更船程相広候儀、且船形迥茂格別相替作立候而者、唐向都合不仕、屹与僉議ニ茂可相及、琉球之儀進貢之勤者次ニいたし商売専仕候段、時々難渋被申掛儀共有之、右ニ付而者、いつれニ茂其疑相晴候様無之候而不叶、渡唐面々折角其心掛仕事候処、船程相広候ハ、弥商売専ニ入精候筋被取受、進貢之故障可成立段、久米村人申出候、且又今五六尺程船幅相広候而茂、船方之〔 〕四五人程重ミ乗口得者、海上者〔 〕之筈候得共、福州湊之儀川口より着場迄二十四里余川筋之様ニ而年々澳相替、其上所々浅有之候付楫卷上ケ、満潮之時引湊口申案内船等多艘相雇、兎哉角出入仕体候処、殊之外潮引強所ニ而浅ミ方江被寄付、為及難船儀共多々有之候、左候得者、此上船程太ク相成候ハ、右江応シ、楫長相延不申候而不叶、夫長ケ潮入茂深ク相成出入難成由、船方之者共申出候、仰渡通相調候得者、当地勝手筋者勿論、第一唐物御本手御備之御為相成申事候付、私共ニ茂精々吟味仕候処、右通船幅相広候而者、湊出入差支候迄ニ而無之、唐制度差障候付而者、唐之振合者難計、万一貢期被相延候儀共ニ成立候而者、夫より何分歎訴申立候而茂、容易詮立申間敷積ニ而、国王必至与被及迷惑、且隔年進貢ニ付而者、毎歳御用物を茂相調来候処、右通貢期被相延候儀茂候而者、往々御国御奉公向ニ茂差支、旁難渋奉存儀御座候、其上押々取計候〔 〕難仕〔 〕入〔 〕御座候処、前〔 〕為〔 〕

何卒御用捨之方御取計被成下候様、偏ニ奉仰候事

但、別紙向々申出之書付兩通相添差上申候

寅十一月十一日

宜野湾親方

与那原親方

座喜味親方

羽地王子

同十二日

一今日、松崎平左衛門殿御宿江御鎖之側譜久村親雲上御用有之候処、病氣ニ付御双紙庫理玉城親雲上参上仕候処、高田尚五郎殿茂出席ニ而、渡唐船作広不相調趣断申出候儀、不都合相見得候由、段々事々敷御演達、左之御書付被相渡候事

渡唐船幅五六尺造広候様被仰付候儀者、追々御承知之通ニ而、不容易御吟味口態々当年被差下、押而御請有之候様、委曲可申達旨致承知候、然処船幅相広候歟、亦

[ ]屹与僉議相[ ]進貢之口者次ニ口口商売專ニ心掛候段、官人より申掛、自然貢期可相延哉、其外被申出趣ニ応し、左ニ申達候

一渡唐船胴幅五六尺相広候由、船形格別可相替哉、大船之事故、少々之広狭者目立候訳有之間鋪、緞令僉議有之候共、船大工間違ニ申済メ可然事

一是迄進貢接貢船共、昆布其外過分之品持渡商売いたし来候付而者、此上昆布拾万斤程積重候由格別差支之廉有之間鋪事

一渡唐船乗組百人相限り居、造広ニ付船働不自由ニ候ハ、役者之内証其外人数相省、夫丈船方之者相重、於唐者水手之内より口違いたし可然事

一福州川筋二十里余之内浅ミ茂有之、船程太ク相成候ハ、出入不自由之趣ニ者候得共、万一本船通融難成場ニ至候ハ、小舟雇入運送之筋茂可有之、此節造広之儀付而者最早御国許[ ]相成船[ ]茂態々被[ ]障筋、都而[ ]候間、何れ御趣意通御口有之度事

十一月

同十三日

一右之通作広御断之儀御落着有之ニ付、久米村方并御 船手方江再吟味申渡させ候事

同廿二日

一右再吟味左之通申出候事

渡唐船幅五六尺相広作事被仰付唐江被差渡、各官人衆僉議有之候ハ、船大工間違之筋ニ申晴可相濟哉、且福州川内浅ミ有之、本船通融難成場ニ至り候ハ、小船雇入運送仕可然哉、吟味仕可申上旨被仰渡、私共出会申談候処、唐之儀公船御作事之節者、構之官人衆段々被掛置、嚴重御取締有之、殊ニ御当地貢船之儀、船程元来唐より被定置事候処、旧式相變作広差渡、御僉議ニ相及候ハ、船大工間違ニ而者其訳相立不申、態々作広候筋被取請、甚難渋成立可申与奉存候、且福州[ ]浅ミ有之口船通船

[ ]雇入運送[ ]致入津候得共者、閩安鎮与申関守官[ ]滞船被仰付、福州より海防官理事口与申両官人衆被差越候上、相合稠敷被相改、両船浦致着船候得者、海防官友城守理事庁福州府大庁与申四官人衆より、又々改方有之、荷役と申水利庁把門官与申両官人并阿口通事船江被乗付居、且帰帆之節茂同断船江被詰居、改方有之候、尤琉球館江不限福州湊出入之船々者、惣而右様厳格成改方被仰付由御座候、右付而者、小船雇入荷物致運送候儀、勝手取計者絶而

不罷成、然迎官所江訴出、表向取計仕候而者、船程太ク造立候儀致露顯可申与奉存候、然者占城国・爪哇国与申兩國者、商売專ニ心掛候筋を以進貢被差放候由書留相見得、且被遊御存知候通、御当地先年貢期被相延儀茂有之事候処、右通船程太ク相成候ハ、売物多ク積渡候為作広作候段被相察、屹与及御僉議候儀案中御座候、然時者、右兩國之例通達貢被差〔 〕、又者貢期被相延〔 〕奉存候、此段吟味仕〔

〕  
寅十一月

嫡子 長嶺通事〔 〕

長史 安座間通事親雲上

次男 我喜屋通事親雲上

嫡子 阿波連通事親雲上

阿嘉親雲上

嫡子 名嘉地通事親雲上

長史 幸喜通事親雲上

次男 阿波連通事親雲上

真栄里親雲上

儀間親雲上

牧志親雲上

亀嶋親雲上

次男 新垣通事親雲上

四男 登川里子親雲上

嫡子 高嶺里子親雲上

嫡子 伊差川通事親雲上

野原親雲上

喜久山親雲上

富浜親方

惣役 知名〔 〕

〔 〕

覚

御船之儀、当分より幅五六尺相広〔 〕仕、唐湊通融難成場ニ至り候ハ、小舟相雇運送仕候儀可相成哉、吟味仕可申上旨被仰渡趣奉承知候、依之私共心之及段々吟味仕候処、当分之御船より幅五六尺相広作事被仰付候ハ、楫長相延、其分者潮入深ク相成候付、唐湊出入難成段者、先達而奉申上候通御座候、左候得者、五虎口より七里余沖之方定海与申所江、掛船ニ而積荷物過半小船雇入、運送仕候外無御座候処、此所者荒場ニ而多分波立強ク有之候共、小船江荷物積移候儀難成、尤海上平和ニ有之時者、兎哉角荷物卸方茂可相成候得共、荷物卸方者、船中人数心次第可相成儀ニ而無之、いつれ官所江願立、官人衆御差越御改方相濟候上、荷物移方等御免被仰付積候処、其通ニ而者長々日数を込申事ニ自然波猛敷相成候ハ、御船難掛留、決而可及災殃事ニ而至極心配仕事御座候、其上海賊澳賊等之心遣茂有之〔 〕御座候間、〔 〕奉存候〔

〕  
奉願上候、以上

寅十一月

接貢船作事

新垣筑登之

同 宮平筑登之親雲上

同 長嶺筑登之親雲上

同 金城筑登之親雲上

同 宮城筑登之親雲上

同 西銘筑登之親雲上

大唐船作事

喜屋武筑登之親雲上

接貢船作事

牧志筑登之親雲上

同船頭

座喜味筑登之親雲上

大唐船前船頭

当間筑登親雲上

右之通申出候間、此段申上候、以上

寅十一月

御船手奉行

仲吉親雲上

同廿四日

一右通并吟味させ候得者、猶故障之訳有之、いつれニ茂御断不申上候而不叶、今日座喜味親方、与那原親方、宜野湾親方罷下、平左衛門殿御宿参上、尚五郎殿口出席有之、渡唐船作広之儀、於唐段々故障筋有之、押々取計〔 〕仕候間、御〔 〕口上取口別紙書付差出〔 〕成程押々取計難成趣相見、〔 〕乍然此一件者、大和江及御届〔 〕候間、書面取置得与致吟味、御存寄茂候ハ、鎖之側ニ付而御達可被成候、致承知罷帰候事

一渡唐船胴幅五六尺相広候而茂、大船之儀故少々之広狭之目立候訳有之間鋪哉、於唐僉議有之候共、船大工間違ニ申済メ可相成哉、再吟味仕候処、唐之儀船作事之節者、段々官人被掛置諸事差引有之、琉球渡唐船之儀茂基船程唐より被究置、海防官衛門江委敷相知居、古来不相替最通来事候得者、船大工間違之筋共ニ而者申分相立間敷儀間、吟味仕候事

唐物方御存寄之所、朱入之通被相直候、但御貸上御請相济候後口相渡候

一福州川口乗参り通船難成場ニ至り候ハ、小船雇入運送之筋茂可有之哉、是又再吟味仕候処、唐之儀諸船為取締、段々官人被立置、琉球館出入之節茂、夫々之官人乗付〔 〕嚴重〔 〕候得者〔 〕

小船三拾里程〔 〕定運送仕候儀故荷役相調不〔 〕訴出候ハ、船程太ク造立口儀相〔 〕、兼而唐より被究置候船造違背仕候筋相成、屹与可及僉議与存申候事

一占城国・爪哇国与申兩國者、商売専ニ心掛候筋を以、進貢被差放置候由、唐都合向容易ニ而ハ取計難仕候、当地之儀往古以来唐通融仕、御国許御奉公向相勤来候処、万一商売心掛候筋を以、進貢之故障相成候儀共ニ成立候而者、御国御奉公向差支、当地永代之難

題相掛申儀ニ而、至極恐入奉存候事

右渡唐船幅造広之儀、段々分ケ而被仰渡趣承知仕、御趣意之程深ク奉汲得、向々江再吟味申渡、私共ニ茂精々吟味仕候処、於唐段々故障筋之儀共有之、押々取計難仕、必至与入り入居申仕合御座候間、旁被為聞召分、何与そ御用捨之方御取計被成下度、偏ニ奉仰候事

但、向々吟味書兩通相添差上申候

十一月廿四日

宜野湾親方

羽地王子

同廿五日

一尚五郎殿より三司官之内御用有之、宜野湾親方罷下候処、平左衛門殿、御徒目附町田助四郎殿、書役高崎泰蔵殿、原田尚助殿出席ニ而、左之通御書付被相渡候付吟味仕、何分可申上段申上罷歸候事、渡唐船造広之儀被仰渡候処、段々故障被申出、基年々唐物御注文通買渡、且代錢速々御払濟相成候様との御趣意ニ候処、御本手用被差下候品々茂不捌口有之候故、前文船造之儀御請成兼候ハ、毎年渡唐船壹艘ニ昆布五万斤充、護送船之振合を以差荷被相渡、右代錢唐物代御払用ニ可被相備、無左候ハ、年々唐物代御払凡之錢高、琉球蔵方より御貸上可有之候、何れ兩様之間、是非御請有之候様被仰付越候事  
寅十一月

同廿九日

摂政・三司官

御前参上渡唐船作広〔 〕

口荷又者、御貸上之儀被仰〔 〕候段、達上聞、

右御書付并此間被相渡置候御ヶ条書并久米村人吟味書・御船手吟味書、都而五通取添備上覽候事

十二月

一右通差荷物御貸上、兩様之間御請有之候様被仰聞候付、御物奉行・申口其外掛之面々江吟味申渡候処、両口御断之儀者詮立申間敷候間、兩条之内一条者御請申上候方可宜哉与申出候事

同十二日

一右通申出候得共、先以兩条共御断之方可然与申談、其趣書面相調させ宜野湾親方持下、尚五郎殿御宿参上御内談申上候得者、平左衛門殿茂被罷出、御兩所ニ而此許差支之訳者尤之事候得共、御国許極々御難渋ニ而被為得止事口より、渡唐船作広又者差荷物等之儀共、押〔 〕被仰口儀事候処、都而〔 〕御口都合ニ〔 〕候〔 〕是非〔 〕有之候様被仰聞、右書付茂被口口候付、押返再三難申上候得共、精々吟味之上持下居候間、とふそ御取置、今一度御兩所御吟味被下度旨、申上書付差上罷歸申候、右書付左之通

但、尚五郎殿、平左衛門殿御兩人江、大白砂糖一籠充拾八升、紺地鳴細上布式端充、鳴紬式反充、焼酎砧壺双充、宜野湾親方自分調ニ而持参仕候也

一唐物方御本手用被差下候品々不捌ニ有之候付、毎年渡唐船壹艘ニ昆布五万斤充、護送船之振合を以差荷被相渡、右代錢唐物代御払用可被相備、無左候ハ、年々唐物代御払凡之錢高、琉球蔵方より御貸上可有之、いつれ兩様之間、是非御請有之候様被仰渡趣、奉得

其意吟味仕候、成行左条ニ申上候

一渡唐船之儀、護送船与者相替、貢物口官府進物品等 積入、其上返上物調方等彼是諸失脚有之、差荷被仰 付候ハ、船間相減、渡唐之者共及迷惑候由、吟味申出候

一基年々唐物御注文進買渡、且代錢速々御払濟被成候様無御拋

御趣意之程深奉汲得、押々茂可申付哉、精々吟味仕候処、当国元来少高役所少ク、諸士扶持米給候儀至而廻遠適給候茂、多分年季筈合ニ而、一兩年之補助たとひ定役たり共、多分寄掛ニ而扶持米取得候者、僅五六年是以家産調兼、偏ニ唐役者を以願意にして若歳之時より混口相心掛、国王・右筆・三司官・座物奉行所・書役、其外相応之役場江相進、多年之過行借財を以相償、既ニ四拾五拾余ニ茂罷成、唐役者江相進、是ニ而家産相立候茂有之、旅柄次第抑利益無之、一世困窮ニ相終候茂有之、尤久米村人江者猶以役者少ク渡唐之節茂船間薄ク候故、別而難儀之仕合、凡当地平人之素立、此体之事御座候処、此節渡唐船江差荷御企之儀者稼口諸士一統之憂患相掛候故、押々申付茂難仕、我々口り入為申仕合御座〔 〕、諸士一統〔 〕候処、右ニ申上候通此口船頭以下水主〔 〕偏ニ唐渡口罷在候処、船間茂僅計之割合ニ而、此上船茂少ク相成候ハ、渡唐之勤相厭、船工之差支可相成与、是又心配仕儀ニ御座候

一右次第ニ而差荷之儀者不相調、蔵方より御貸上相勤度、是又吟味仕候処、当地百姓疲入、年貢相滞定式遣羽さへ不苦合候付、国王始向々諸式嚴密取縮役科扶持米其外段々引方申付候上、出米税掛等ニ而折角所帯方心配之砌候処、御国許御手伝金且飢饉之時救米差下旁ニ付、館内時借茂致増長候処、猶又江戸立茂差掛、当地館内共難渋御座候故、御貸上之儀調得不申、当惑仕居候

一右之振合ニ而兩条共吟味相付不申、進退必至与行迫居候仕合御座候、右付而者、都合之程至極恐入奉存候条、何卒当地一体之振合被聞召分、何分ニ茂御都合宜御取計被下候様、御賢慮偏ニ奉希候事

十二月

同十三日

右兩条御断之御〔 〕御返書可仕候間、銘々仰〔 〕宜野灣親方江被仰聞候付、玉城親雲上、尚五郎殿御宿参上仕候処、平左衛門殿茂出席被致、先達而被仰聞候兩条之内、是非一ヶ条御請申上候様、左之通御書付被相渡候事

唐物方御本手品不捌有之、年々渡唐船老艘、昆布五万斤充差荷可被相渡、亦者年々唐物代御払凡之錢高琉球方より御貸上有之度旨被仰渡候処、御貸上候儀者、当時蔵方難渋ニ付、何れニ茂御請難相成、渡唐船差荷之儀茂段々故障有之、琉球一統之憂患相掛候旨被申出候得とも、先達而被仰渡候渡唐船一件茂及御断、此上兩条なから難渋被申立候ハ、別而不都合可及候、此節之儀於御国許茂委細御吟味之上、押而被仰付越候次第者、先達而より申達通ニ候間、右之御趣意篤と被汲受、是非一ヶ条者御請被口口候様有之度事

寅十二月

右通是非一ヶ条〔 〕様度々頻ニ御申掛有之、此上者御断茂難成候処、兩条之内何れを御請可申上哉、精々吟味を以可申出旨申渡候付、御物奉行、申口其の外両主取并掛之面々申談、左之通申出候事

但、近年渡唐之者共ニ茂、昆布差荷之儀吟味申渡候 事

一拾五人両主取其外掛中申出、左之通

一差荷之儀一度茂相始り候ハ、永統最通御断者相成間敷、然者唐繰合当分者景氣能有之候得共、繰合方之儀、依時節段々致交易事ニ而、昆布代等茂乾隆之末、嘉慶之中比杯者拾五枚、拾二三枚、或拾枚内五六枚迄相下りたる節茂有之、一定当分之直段最通申与者相見得不申候、然ニ差荷被仰付、昆布前方之様相下り候ハ、唐役者差禿候儀者勿論、御用物調方相成間敷奉存候

一兩御目附深々御申懸有之候得共、先〔 〕

大御隠居様御家督中ニ茂御船作□、且接貢船ニ船相重〔 〕貢接貢共御銀者被相渡、外ニ昆布・いりこ・あわひ・ふかひれ類差荷之御企被為在、屹与仰渡御□□候処、段々御断被仰立、漸相迎〔 〕事茂御座候

一御国元前方与者相替極々御難渋故、右様之御断筋容易濟兼申筈、左候得者差荷之儀、大頭御請者被申上候而、斤数減少之方江御働被成候筋ニ茂可有之哉、是又吟味仕候処、斤数御侘被成候ハ、夫者初発之事故御相談通壺式万斤ニ而茂当分者被相濟、漸々与被召重候儀者案中御座候、唐物御発商売之儀茂、最初者僅八種之輕キ品ニ而候処、漸々被相重到当分ニ者利益之品都而御取入相成、尤代錢渡方茂初発者御借入を以茂無滞被相渡候処、漸々遅滞相成、最早御催促茂不相成時勢ニ罷成、是等を以相考候而茂、昆布差荷一度□相始り候ハ、則其分之船間者永々大和之船間ニ相成、然時者時々御役人見立次第昆布ニ不限、いりこ・ふかひれ類可被差渡積〔 〕漸々交代

〔 〕人相替候得者、己か功を専被相計〔 〕此一巻往々如何程哉、難被成〔 〕可成行敷、甚以恐入奉存候

一何敷ニ付米出銀被仰付候儀者、一統之國役是非可相勤儀候得共、唐繰合近年利益相見得候途、或船作広、或差荷等御内輪之所江御手入被仰付候儀、何□嘆ヶ敷次第、此儀役者之禿者小事之利害、第一是迄之御取扱相替り候様成行可申、此所甚以驚恐仕居候

一御請之上、一往相行ひ差当迷惑之積申立候ハ、御用捨被仰付儀茂可有御座趣、御目附衆御沙汰有之由候得共、□ト御請之上役者迷惑筋之訳を以、御断者決而相成間敷奉存候、依之我々相談之趣者、兩条御断被成候而者、御不都合可相成候間、御借上之方江御取成一節御金千兩丈被差出候而、昆布差荷者御用捨御願被仰上可有御座哉与奉存候

一御金御借上〔 〕成候ハ、御銀〔 〕御吟味〔 〕御所帶給地御用意方より茂〔 〕り出シ砂糖買入被差登候ハ、千〔 〕手当者可相調奉存候、左候而、右式拾五万之御手当兩三年茂差出候ハ、御蔵方夫長御不足可相成候間、右補方者出銀税掛杯ニ而追々御差足被成候方可宜哉奉存、此段申上候、以上十二月

一近年渡唐之者共申出、左之通

但、此許見届迄ニ而唐物方江者差出候也、渡唐船江昆布五万斤程護送船同様之振合を以、差荷被仰付筈候間、成丈ヶ相調候様精々吟味仕可申上旨、段々無御抛被仰渡趣、委曲承知仕、左条ニ申上候

一渡唐船之儀、進貢御物并唐官人衆江進物用品々等 積入、且一番方・二番方・三番方御用物之儀、往年直成被定置、到当分者、右定代ニ而買調不相成、六割余之増部相懸候付、右部損〔 〕申事御座候

一昆布・海鼠〔 〕此所者〔 〕猶又唐品連々高直相成候付、算面□□□都而、前方之様ニ者利潤無御座候



一唐物方御注文品過分之事候故、役者共渡唐仕舞方相広メ精々借財相働、品物を茂借入、折角差繰仕事候得共、人体次第借財調兼、御注文高金不買調、従之者共江茂、内々御用品割懸買渡申事候、尤当時御注文品外払用相成候品少ク御座候故、間々御注文可及過上候品柄茂有之事御座候

一右之振合ニ而売上代錢及過分、夫長ケ利潤有之様ニ相見得候共、渡唐面々手錢ニ手相仕舞候者無之、借財を以仕舞立候故、借財首尾方且旅向ニ付而者諸失脚物入茂有之、旁引払候得者格別余勢与申程之儀者無御座候

一帰帆払物之儀、前々者品柄面々見込次第買渡、利益 を得申候処、当分利益相成候品者、都而御注文品相成、且唐口面々品位見立を以買來売上申〔 〕見立通元銀〔 〕入迷惑仕〔 〕

右通之成行ニ而、当時唐繰合〔 〕余勢相見得不申候処、差荷被仰付候而者夫長役者共及迷惑、御用物調達方不相調、且又船方之者共繰之船間減少被仰付候ハ、渡世難成、先様船方相勤候者茂罷在間敷与奉存候、此段申上候、以上

十二月  
城田親雲上  
大湾里子親雲上  
佐渡山里子親雲上  
嶋原里子親雲上  
伊地親雲上

同廿日

一差荷之儀、先掛而諸士一統之故障相見得候付、一節 御貸上之方可然与申談、其趣御内談之書面相調させ 折節

上様茶菌之御殿江被遊 御光越候付、今日摂政・三司官浦添番所参上、御近習平安親雲上御取次、右書付地案備 御覽候処、此吟味通〔 〕承知仕候事

一唐物者方御本手品不捌有之、年々渡唐船壹艘昆布五万斤充差荷、亦者唐物代御払凡之錢高蔵方より御貸上、両様之内御請申上候様被仰渡候処、差荷之儀段々故障有之、琉球一統憂患相掛、且御貸上之儀、当節蔵方難渋付手当不相調得、乍恐兩條御用捨被下候様御訴訟申上度、内願候趣申上候処、先達而被仰渡渡唐船一件茂及御断、此上兩條なから何角申立候而者、別而御不都合可相成候、此節之儀、於御国許茂委細御吟味之上被仰付越候次第者、先達而より被仰達通ニ候間、御趣意奉汲受、是非一ヶ条御請申上候様、細々被仰下趣委曲奉得其意御尤之御儀奉存候、右付猶又再往吟味仕候処、差荷之儀兼々御侘申上候通、段々差支候訳有之、偏ニ不奉蒙御有免候而者、琉球諸士中差禿候次第之事□□幾重ニ茂御仁恵〔 〕奉仰候

一御国元御難渋之次第者、細〔 〕

承知相成丈ケ之儀者、御奉公相勤度御座候処、近来諸間切相疲、年貢御蔵方別而当迫御座候故、思様不相叶次第御座候、然共唐物代御差支之所より段々御吟味を以被仰渡御事ニ而、

御趣意之程奉汲得、猶又精細尽吟味、当時御国元重出米竈出上納内当地蔵方難渋ニ付而茂、出米税掛、且役料扶持米引方等申付、国王始向々省略□なから猶嚴密取縮公界場被附置候、給方を茂減少、且世上江茂重而課役申付、来卯年より先一節金子千両丈ケ於大和年々御貸上相勤申度奉願候、僅之銀高御都合之程茂如何敷御座候得共、僅斗之御奉公

茂難差欠御座候故、右之金高御貸〔 〕奉口事御座候、此等之趣何分ニ茂成合申様、御取合被成下度奉頼候

十二月

同廿一日

一右書付今日御物奉行喜舎場親方、御鎖之側玉城親雲上差遣、尚五郎殿、平左衛門殿御内談申上させ候処、於大和之御貸上ニ而者詮立兼可申、且右金高二而者、昆布五万斤差荷之半方丈ヶ杯与少シ御口能被仰聞候付、成程金高者半方丈ヶニ而候得共、差荷口候ハ、来々年より之御益御貸上者、来年より之御益可相成段申上候処、此儀者其通ニ而、尤御注文過上茂来年より者少ク相成筈候間、彼是御考を以何分可被仰聞候、暫里主所江罷帰控扣居候様被仰聞候付罷帰、里主所江扣居候処、追付被招呼罷出候得者、左之通御返事御書付被相渡罷帰候事

此節、御国許より被仰付越候三ヶ条之内、船造広并昆布差荷之両条者分而故障之趣有之、右付蔵方御〔 〕之儀、来卯年より先金子千両、於大和年々御貸上可有之旨委細被申出、基琉球江被差下候御本手品不捌ニ付、速々唐物代御払濟ニ不成所より段々被及御口口琉球御〔 〕被仰渡候訳茂〔 〕

詮立兼候間、右千両丈之錢高年々限月を以、爰許唐物方江御貸上有之候様被取計、御請之儀書付を以被申出度候事

寅十二月

同廿三日

一右ニ付御請書相調、且御礼物品立書取添、三司官三人御前参上備 上覽相濟、直ニ那覇江罷下、御在番所并唐物方江参上、御請申上、御礼物茂差上候、右御請書并品立左之通但、目録者摂政・三司官連名之覚書ニ而候也

唐物方御本手品不捌有之、年々渡唐船壹艘昆布五万斤充口口、亦者唐物代御払凡之錢高蔵方御貸上、両様之内御請申上候様被仰渡候処、差荷之儀段々故障有之、琉球一統之憂患相掛、且御貸上之儀、当節蔵方難渋ニ付〔 〕相調得〔 〕御用捨被下〔 〕之趣申上候処、先達而被仰渡候渡唐船一件茂及御断、此上両条なから何角申立候而者、別而御不都合可相成候、此節之儀於御国許茂委細御吟味之口被仰付越候次第者、先達而より被仰上通ニ候間、

御趣意奉汲受是非一ヶ条御請申出候様、細々被仰下趣承知仕候、差荷之儀先達而申上候通、段々故障筋有之、いつれ茂御請難申上、依之精細口吟味当時出米税掛、且役料扶持米引方口申付、省略中なから猶嚴密取縮重口課役申付、来卯年より先一節丁錢七千貫文充、唐物方江年々八月中限御貸上可仕候、国王江相達、此段御口申上候、以上

寅十二月

宜野湾親方

与那原親方

座喜味親方

羽地王子

覚

一錫口鍋一充

但汁七十充、七置十充添

- 一紺地嶋細上布三端充
- 一紺嶋細上布三反充
- 一嶋細三端充
- 一縮緬二卷充 紅白
- 一緞子一本充
- 一大毛氈二枚充

右御奉行并唐物方御目附御兩人江

- 一紺地嶋細上布二端充
- 一嶋細二端充
- 一大毛氈二枚充

右唐物方書役兩人江

十二月廿三日

同廿五日

- 一右二付、今日三司官三人

御前参上、右之首尾申上候事

- 一右通御貸上之方相成候処、於御国口渡唐船造広可相 調御吟味ニ而、追々下り船々より伐木下方等可被仰 付候間、早々飛船差立、右之首尾可被申上段、兼而 御目附より御〔 〕趣口之〔 〕被仰付度〔 〕

十二月廿五日、棚原親雲上持下附役吉富〔 〕殿取次御在番所及御届、唐物方江者里主ニ付而御届済

一筆啓上仕候、渡唐船之儀、当分通ニ而者積間狭、唐物御本手品御備之分茂難被差渡、夫故每度唐御注文品揃口及買欠候付、此節五六尺之間相広、深者右江応恰好宜方造替候様、以紙面被仰渡、且造広相成儀候者、昆布差荷を以被差渡候儀共追々被仰渡、松崎平左衛門殿、伊是名親方江被仰含越趣茂承知仕候、仰渡通相調候得者、第一唐物御本手御備之御為相成、当地勝手筋茂有之事ニ而精々吟味仕候処、船造広之儀於唐段々故障筋有之御請難申上、其段平左衛門殿高田尚五郎殿江申上候処、基年々唐物御注文通買渡且代錢則々御払濟相成候様ニ与之 御趣意候、船造広御請成兼候者、毎年昆布五万斤充差荷、亦者唐物代御払凡之錢高蔵方より御貸口様之間、是非御請

〔 〕憂患相掛事ニ而御用捨被仰付被下度、且御貸上之儀、蔵方至極難渋付、諸士百姓江課役其外向々公界場被附置候給方等致減少、米卯年より先一節丁錢七千貫文充、当地ニ而唐物方江年々御貸上可仕段、御請申上置候、委細平左衛門殿、尚五郎殿より被申上筈御座候、此旨為可申上如斯御座候、誠惶謹言

十二月廿五日

宜野湾親方  
与那原親方  
座喜味親方  
羽地王子

川上久馬様

参人々御中

- 一右通渡唐船作広并昆布差荷之儀、御断申上、錢御貸上御請申上候付、右一件館内江申越等之書付者、寅 年案書ニ相見得候事

二月十八日

当卯年より先一節唐物方江御貸上〔  
〕

内を茂引方被仰付度旨口上取添、御出方之仕様棉切紙ニ書付、摂政・三司官御前参上奉伺相濟候也

但、委細之成行者、先達而唐物方江往反書面を以即々達上聞相濟居候付、事之成行書付不及、本文之通御出方之仕様之書付備 上覽候也

覚

錢三拾五万貫文

内

貳拾壹万貫文

四万五千貫文

貳万貫文

五万六千貫文

壹万三千貫文

壹万貳千貫文

ノ三拾五万六千貫文

内六千貫文過

卯貳月十八日

(行間)

〔 〕去年当年御貸上仕置申候処、右御貸上錢之儀、年々八月限上納相成候上者、五分利被口、於御国元御返弁被成下候段、御証文を以被仰渡、去年御貸上之錢者、元利共当七月於御国〔 〕被下置候段、此節琉球より申越有之、当年より先御貸上残之儀茂、弥御証文通御返弁可被成下積御座候ハ、右出口并砂糖・麴金代減少者、朱口より口掛者、当月より御用口被仰付度、左候而来年より先唐物方江御貸上錢之儀者、去年以来御貸上御返弁錢を以、年々繰廻差上候様被仰付被下度旨、御書院当西原里子親雲上御取次達上聞相濟候事

辰十月三日

人別牛馬船出銀七分錢 ノ三貫五百文

諸職人重税錢

無京(カ)屋敷百坪ニ付拾貫文

諸士申請并差付砂糖拾分壹减少

諸士売上砂糖代渡之内右同

諸士売上麴金代右同

一右通達

上聞相濟候付、支配方之儀御物奉行江手形を以申渡、且右付世上江儉約筋之儀申渡候事

但、手形写并廻文帳ニ相見得候也

本文御状卯二月十二日、飛舟帰便より御在番所江到来候由ニ而、同日相届候付、翌十三日

御書院当山川親雲上御取次備 上覽、翌々十四日日帳主取摩文仁親雲上持下、御在番所并唐物方御届済

御札致披見候、渡唐船積間狭、唐物御本手品御備之分茂難被差渡、唐御注文品揃兼候付、造広之儀被仰付候処、於唐段々故障筋有之、御請難成、依之毎年昆布五万斤ツ、差荷を以被差渡、又者唐物代御払凡之錢高蔵方より御貸上有之候歟、両様之間是非御請有之候様相達候処、当時蔵方至極難渋之砌候得共、当年より先一節丁錢七千貫文ツ、年々於其地唐物江御貸上之御口給有之候付、御請之段達

□聽候、此旨及御報候、恐々謹言

二月十九日

川上久馬

羽地王子

座喜味親方

与那原親方

宜野湾親方

三月十三日

一今日、御在番所江座喜味親方御用ニ付参上仕候処、唐物方御目附高田尚五郎殿、松崎平左衛門殿ニ茂出席ニ而、唐物方江御貸上錢之儀付、別紙御書付之御旨趣御演達、則御書付被相渡候付、翌十四日御書院当山川親雲上御取備

上覽、渡唐船積間狭、唐物御本手品御備之分茂難被差渡、唐御注文品揃兼候付、造広之儀被仰付候処、於唐段々故障筋有之、御請難成、依之毎年昆布五万斤充差荷を以被差渡、又者唐物代御払凡之錢高蔵方より御貸上有之候歟、両様之□是非御請有之候様被仰渡候処、当蔵方至極難渋之砌候得共、当郡より□一節丁錢七千貫文充、年々於当地唐物方江御貸上之御請有之候付、去十二月飛船より其段申上趣有之候処、渡唐船作広方ニ付而者、無扨故障筋故、御貸上銀之方年々丁錢七千貫文充被仰付候付、高田尚五郎、松崎平左衛門申談、上納方等無滞様可取計旨、久馬殿より去月十九日之御書付相達候付、此段申達候事

三月十三日

四月廿七日

一今日、唐物方御目附松崎平左衛門殿御宿江、御鎖之側玉城親雲上御用付参上仕候処、新古御目附衆御兩人、書役兩人出席ニ而、当卯年より先一節御貸上錢之儀、年々於御国元御返済被成下候段、平左衛門殿より御演達、則御書付被相渡候付罷登、三司官衆遂披露、翌々廿九日御書院当仲田親雲上御取次備 上覽候事

但、右御書付左ニ記

本文ニ御物座次書を以、御物奉行江手形差出候也

唐物御本手用として一往丁錢七千貫文充、琉球蔵方より御貸上之儀、年々八月限上納相成候上者、五部利付を以、翌七月於御国許可被返下、尤琉球詰御目附より御借状相渡置、御返銀被相渡候上、右御借状被返消除候様被仰付候段、卯二月廿六日山田新介取次、御証文を以被仰渡候事

卯四月

五月八日

一唐物方江御貸上錢之儀、於御国許御返錢被成下候段被仰渡候付、御礼向之儀先例等相糺

させ、此節野村親方御使者兼務ニ而、御礼之御書翰御用意を以被差登候様被仰付被下度、且御掛之衆江茂、摂政・三司官より御礼物差上申度、別紙両通之通棉紙切紙相調、座喜味親方、与那原親方、宜野湾親方 御前参上、奉伺相濟候事

但、羽地王子江者御役御断相濟候付、御前参上不仕候也

本文御伺相濟候付、御書院方江為致問合候也

覚

唐物方為御本手用一往丁錢七千貫文充御貸上之儀、五部利付を以、翌年七月於御国許被返下候旨、山田新介殿御取次、御証文を以被仰渡候段、松崎平左衛門御書面之趣承知仕、依之御礼向之儀、先例相糺候処、去卯年金貳千兩七ヶ年限ニ而、於大和御借上之儀、去酉年迄年限答合候付、御返金被成下度旨、聞役在番親方より奉願趣有之、先達而御手伝為御見当、上納被仰付置候金五千兩之内江御差引上納被仰付候付、御礼向之儀、是又聞役在番親方より奉伺趣御座候処、在番親方御使者兼務ニ而、御礼一通可被仰上旨被仰渡通被仰付置候間、此節茂右例通野村親方御使者兼務ニ而、御礼之御書翰御用意を以被差登、於館内奉伺候上、何分ニ茂相計候様可被仰付事

卯五月八日

本文御伺相濟候付、御物座手形を以御物奉行江相達、其後川上久馬殿江之御礼物品替相成候御伺相濟候付、是又右同断手形差出候、委細手形扣ニ相見得候也

覚

一十錦太碗十

一紺地鳴細上布二端

一縮緬二卷 紅白

川上久馬殿

一鍬鉈火爐一

一紺地鳴細上布二端

一嶋紬二端

北条織部殿

一洩扇子一箱充

一紺地鳴細上布端宛

一嶋紬二端宛

高田尚五郎殿

松嶋平左衛門殿

卯五月八日

六月二日

一唐物方御役々衆江御礼物之儀、兼而奉伺相濟居候付、高田尚五郎殿、松崎平左衛門殿御宿江三司官御礼として被罷出候趣、昨日唐物掛外間親雲上ニ付而申上させ、今日座喜味親方、宜野湾親方、右御兩人御宿門迄罷通候事

附

一尚五郎殿者、唐物荷作付仕上世座口出張被致、平左衛門殿者御病氣之由ニ而御逢不被成候也

一与那原親方者、帰唐船入津、月番ニ而首里詰之砌故不罷出候也

一品物者御物座手形ニ而相調させ、覺書目錄ニ而当日早朝入付させ候也

口上言上

一紺嶋細上布二端

一嶋紬二端

右者、唐物方江御貸上錢之儀、於御国許御返錢被成下候段被仰渡候付、川上久馬殿江摂政・三司官より御礼物之内縮緬二卷差上候様被仰付被下度旨口追而伺置候处、此節帛〔 〕縮緬過半買欠相成、其上買米候等茂、薄地ニ而御用立兼御進上物并御延申上事御座候間、右之通品替ニ而差上候様被仰付被下度旨、御書院当仲田親雲上御取次、達 上聞相濟候事

卯六月十三日

以上

道光十一年辛卯三月

御内用掛

評定所足筆者	玉城親雲上
同 筆者	親里里子親雲上
掌翰使	与那覇里子親雲上
中城御殿御物大親	野村里子親雲上
御物奉行方帳主取	比嘉筑親雲上
	世名城親雲上
評定所筆者主取	野里親雲上
日帳主取	摩文仁親雲上
同	棚原親雲上
御鎖之側	玉城親雲上
御物奉行	喜舎〔 〕

從御国元渡唐船作広昆布差荷ノ件一冊

## 「渡唐人江申渡条目」第 295 号について

上原 兼善

【表題】 渡唐人江申渡条目

【文書番号】 295 号

【年代】 天保 2 ～明治 3

【作成者・作成部署】 評定所

〔内容〕

1831 年（天保 2）から 1870 年（明治 3）にかけて、対中国貿易に関する諸法度をまとめたものである。表紙に「此帳帰帆之上返上可有之候」と記載されているところをみると、渡唐役者たちが渡唐の際にはこの法度条目集を携行することが義務づけられ、帰帆の後に返上するのが慣わしであったものと思われる。こうした慣わしがいつから始まったかははっきりしない。しかし、最初の文書が天保 2 年 2 月 7 日付のものであることからすると、天保改革の開始にともなって始められたものではないかと思われる。すなわち、藩は改革着手後生起した問題に即応して種々の法令を定めていったが、それらを渡唐役者たちの心得のために、合わせまとめて持たせるようにしたのであろう。内容は誂え品の買い過ぎ買不足、粗悪品の買入れ、抜荷、私貿易優先の渡唐船の積間の問題などに関する法度が中心をなして、琉球貿易がいかなる問題を孕んで展開されたかを知るにはうってつけの史料である。『琉球王国評定所文書』（浦添市教育委員会）にも同じ法令が散見できるので、比較検討して利用するのが望ましい。

〔史料本文〕

此帳帰帆之上返上可有之

渡唐人江申渡条目

御評定所

渡唐役者へ仰渡 二冊

唐物御注文品之内、去夏俵物過分之買不足いたし、其上品位別而不宜、且箱荷類者格別致買過、高料之品柄□御本手銀太分之不足相立、御差繰調兼、右付而者、畢竟唐渡役者共自分勝手に心掛候筋相聞得、如何之至候得共、此節迄者不及御沙汰候条、以来屹与御注文通可買渡、尤唐渡前役者共より御注文品何程与銘々受合之証文掛、御役々方江為差出、買過いたし候者者□□□払被仰付、買欠有之候節者以□渡唐可被召留候、且又唐物抜荷御取締之儀者、先年以来度々被仰渡置候得共、段々抜荷等取企、琉球表取締不行届、甚以不可然事候、就中御免品之内抜荷等有之候付而者、被対 公辺江御難題茂可致到来事候条、琉球役々より厳敷取締可致候、乍此上不束之儀茂候ハ、我々御国元江被招呼、御糺方ニ可及儀茂可有之候条、聊緩せ有之間敷□、久馬殿御書付を以被仰渡候段、琉球館より申越有之候、然者唐御注文品調達方、且抜荷取締向之儀ニ付而者、以前より段々被仰渡置趣有之、毎度申渡事候処、右通之次第甚以不可然候、此節前文通分而稠敷被仰渡候上、万一自分勝手筋



を相考、御用品買過買不足いたし、且位不宜、又者抜荷等有之候而者、畢竟御趣意取不奉  
汲受筋相成、面々可及迷惑段者勿論、御難題ニ茂可成立事候条、右之趣厚奉汲受、唐御注  
文相渡候ハ、銘々御請之証文差出、左候而渡唐之上御用品買過買不足無之、位茂能々入  
念取調へ、且抜荷等一切無之様嚴重致取締、いつれ此節仰渡之御趣意行届候様、精々勤務  
可致者也

卯二月七日

三司官

渡唐役者

唐物荷御取締之儀者、毎度被仰渡之趣有之、就中朱粉之儀者、琉球用分之外一切不買渡様、  
去辰二月分而仰渡有之候得共、今以抜朱之聞得有之、甚以不可然事ニ候、依之当秋走渡唐  
船より琉球国用迺茂一往朱粉積渡候儀、屹与被差留、国用分者御国許御格護以来年々不事  
欠様、本御買上直成を以可被相渡、万一渡唐役者并琉球属嶋先嶋人奉汲受、薄犯御法密之  
抜朱於取企者、朱粉御取揚、本人者勿論、荷担之者茂屹与御咎目可被仰付、乍然不正筋之  
聞得茂候ハ、渡唐船帰帆之節、琉球蔵方用物迄茂明改可被仰付候条、当秋渡□□役者共  
并琉球属嶋中江茂、取締向嚴重行届候様取計可有之、尤朱粉之儀、以前より江戸朱座江被  
差出来、至極御都合ニ茂相成事候処、遠近他国者勿論、年々小国表江太分之抜朱□□候  
付、朱座御買立難□□之処及中絶、当時柄格□□一種□形難被捨置、殊ニ唐物御年限中  
密壳等相頭候付而者、御免品拾六種之□ニ茂相成候付、抜朱屹与□相禁候□、朱座用分及  
払底、以前之通御余勢可相備儀ニ付、此節右通取締向分ケ而被仰渡候間、当秋渡唐琉人者  
勿論、琉球属嶋先嶋地廻船等唐漂着之節、少々たりとも一切不買渡様、万一取締不行届儀  
共候ハ、我々初掛り役々急度可及迷惑趣共、委曲為可被□□、此節態与飛舟御取仕立被  
仰付候間、屹与御趣意詮立候様、我々并□役々□□□諸事無手抜御扱可有之旨、於在番所  
御□□唐物方御役々衆御出席ニ而、屹与被仰渡候、□者唐物括□取締向之儀付而ハ、以前  
より段々被仰渡置、□□朱粉之儀、去年分而被仰渡有之、堅取締申渡置候処、前件之通抜  
荷之□□有之、甚以不可然事候、右通密壳等ニ相頭候而者、御免品拾六種之妨ニ茂相成事  
ニ而、別而被為及御心配、態々飛舟等御取仕立□□被仰渡置御事候□、万一取締向不行届、  
抜朱於有之者、何様御難題可成立哉茂難計、至而心配之事□□掛役々御趣意之程深奉汲受  
候処、渡唐面々者勿論、國中両先嶋其外嶋々ニ至り、人数与合を以嚴重締方申渡、猶又勢  
頭大夫江茂□□取締向屹与可致下知旨申越、幾重ニ茂御趣意詮立候様可被取計候、乍此上  
自然違背之者於有之者、本人与合之者重科申付、頭役掛之面々茂屹与可及沙汰之条、聊緩  
疎有間敷旨稠敷□□申渡者也

巳八月十九日

三司官

御物奉行

申口

右之通被仰渡候間、得与被得□意、五主船方従之者共江茂具申聞、各初末々四五人宛与合  
於唐荷作等之節、与中嚴重ニ相改、帰帆之砌、久米慶良間嶋其外諸嶋諸浦汐懸□候□、猶  
以氣を附嚴重可致取締候、尤抜荷取企候者於有之者、本人可為同罪段、与合之証文を以、早々  
可被差出候、以上

巳八月廿七日

大城親雲上

棚原親雲上

□久田親雲上

安谷屋親方

巳秋走接貢船

役者中

右之通被仰渡候間、各口得与被得其意、渡唐船者勿論、漂着船等有之節、御法度之旨趣具ニ申渡、猶又帰帆前荷作等之節、分而氣を附可被致取締候、尤朱朴一切不買渡段渡唐之人數者役者以下未々迄、於爰元四五人宛与合証文為差出置候間、漂着人并在唐之面々者其元ニ而同断証文為差出、右証文勢頭大夫又者存留添書を以、各帰帆船より爰元江差送、入津早速為差出、屹与御趣意詮立候様精々下知方可被致候、左候而右之段者存留江茂相達、年々右之振合を以、下知方有之候様可被取計候、此段致問合候、以上

八月廿八日 上同

勢頭

大夫

口達

一今般朱粉御取締向之儀付而者、別紙を以被仰渡候通ニ而、聊不守之者有之間敷候得共、此以前於唐算面殘等之由ニ而、商人共より朱粉押而被相渡候得者持渡、唐物方江申出、御取入為相成事共有之候付而者、馴々之仕向与相心得持渡候者茂可有之哉、今般之儀、別紙仰渡之通、國中用分茂御くに元より被差下、御取締向嚴重被仰渡、万一抜朱口有之者、三司官を始、掛役々屹与可及迷惑段、態与飛船御取仕立を以被仰越、是迄御取締之振合与者格別相替、至而嚴重成事候口、帰唐船入津之口ニ掛り、役々改方等茂嚴密ニ被仰付、疑敷荷物者一々被明改、万一僅逆茂朱粉積入於有之者、本人与合之者人名ニ相掛程之及御咎目、猶又役者船頭ニ茂御沙汰之程不輕答之条、右之趣得も得其意、船頭作事五主以下従之者迄每度無油断申聞、たとひ算面殘又者進物等有之候而も一切不持渡様、嚴重取締可被致候

一御当国之儀、元來朱粉出產無之、年々渡唐船より買渡致用弁、此段者唐人共能存知口候処、此節より一切不買取候付而者、唐人共疑相立、何角相尋候儀茂可有之哉、於其儀者近年琉球朱粉屯居候付、買取不申段可相答候、万一其心得無之、未々之者共実成申拔候儀茂候而者、至而及御難題事候条、是又船頭佐事五主以下従之者迄厚申論置、於唐不差障様精々可被取計候、右兩条直面ニ堅ク可申達旨、御差図ニ而候事

巳八月廿七日

右之通役者中江被仰渡置候間、被得其意、在唐之面々又者漂着人等有之節、前条之趣意具ニ申聞、聊心得違無之様取計可被致候、左候而、存留江茂年々右之振合を以、屹与下知方有之候様可被申達候、此旨御差図ニ依而申越候、以上

八月廿八日

勢頭

大夫

今般抜荷御取締之儀ニ付而者、別段分ヶ而被仰渡事ニ而、少茂取違之儀者有之間敷候得共、一番方ニ番方御用物荷数不相知候而者、抜荷取締向之故障可相成事候間、於唐荷作之節、役者共立合屹与致下知方、御物之分者荷数委敷取メ一帳ニ相綱、入津之当月高所江差出、其首尾可被申出候、若抜荷於有之者荷物御取揚之上、当人者勿論、役者ニ茂屹与可及御沙汰之条、聊疎略被致問敷、此旨御差図ニ而候、以上

巳九月五日 大城親雲上  
棚原親雲上  
佐久田親雲上  
安谷屋親方

巳秋走節貢船

役者中

右之通被仰渡候間被得其意、荷作之節抜荷無之様取締方可入念旨、分ケ而下知方□被致候、依御差図、此段申越候、以上

九月□日

勢頭

大夫

唐物方御注文品茶碗薬之儀、当年者御注文御取止相成候付、一切不買渡様ニ与之段者、先達而被仰渡置通候処、万一末々之者共御免品之筋差□□買渡儀茂候而者、別而如何之事候条、右之趣末々江茂具ニ申聞、一切不買渡様堅取締可被致候、此旨御差図ニ而候、以上

巳八月廿五日

巳秋走接貢船

役者中

右之通被仰渡候間、聊取違無之様下知方可被致候、此旨依御差図申越候、以上

巳八月廿五日

勢頭

大夫

唐物御注文品買欠等無之様ニ与之儀者、先書より度々被仰渡趣茂有之候処、去夏之儀過分之買不足等有之、如何之至候、右付而者唐国災殃等之趣も有之候得□、御都合ニ茂相懸候付、御注文品□□いたし候、斤数□代分相直候ハ、壹貫文ニ付拾五文掛ニ而、買不足之者共より御取揚被仰□候、尤買過之儀茂買不足同様、過斤丈之代分壹貫文ニ付拾五文宛御取揚被仰付、左候而、以来茂前文同様取計候様被仰渡候条、取扱向委細之儀者、諸唐物方掛より可相違候□、此□さん用官□可被申越旨、但馬との御差図ニ而候、以上

三月 やまたしんすけ

右之通被仰渡候段、琉球館より申来候間、各ニ茂被得其意、随分御注文品買過買不足等無之様、出精可被相働旨、御差図ニ而候、以上

未四月 高嶺親雲上

安谷屋親方

未秋走接貢船

役者中

唐物品取締向之儀者、追々申渡置候通ニ候、然処、渡唐□□人共から製明はん持渡致商商売候聞得有之、明はん之儀者、御くに産御仕登品之内ニ而、右通から製持渡候而者妨相成候条、りうきう地□之外屹与商売差留候、此間りうきう館□□在番親方□申渡可承向江茂可申渡候

十一月 たしま

右之通、に在る次らう四らうとの御取次被仰渡候段、りうきう館聞役在番親方申越有之候

間、向後仰渡通屹与商売差留、尤□た□□面々江□地秃用外一切持渡間敷候、若違背之者も候而者、向様御取扱可被仰付も難計事候間、御法度之旨□□候様従之者迄堅取締可被申渡候、此旨御差図ニ而候、以上

申二月  
兼浜親方  
山川親雲上  
天願親雲上  
安村親方

申秋走渡唐□

役者中

朱墨之儀、向後売買差留候、若違背之義茂候ハ、屹与可及沙汰候、此旨□□可申渡候

但、諸人用之儀者朱粉同様申請、□□仰付候

九月 [ ]

右之通にいる次らう四らうとの御取次被仰渡候段、りうきう館聞役在番親方申越有之候間、朱墨地秃用外一切不持渡様、□□迄堅取締可被□□、此旨御差図ニ而候、以上

申二月  
兼浜親雲上  
山川親雲上  
天願親雲上  
安村親雲上

申秋走渡唐

役者中

唐より御用之外買渡方御□□之品数

[ ]

一虫糸	一礪砂	一玳瑁
一瓜	一龍腦	一沈香
一□膠	一大黄	一甘草
一□□来	一耳松	一甘草
一茶碗薬	一木香	一蒼□
一犀角	一明礬	一象牙
一朱粉	一桂皮	一朱墨

去夏とうもつ方御本手品之内、茶・繰綿之二種別而不捌ニ成立候付、何様之訳ニ而右様有之候哉、御用聞共江吟味申渡候処、進貢船兩艘より清明茶并繰綿同かせ為売用斤数夥敷持渡、其上護送船より右之三種同断太□之斤数相見得、外□蔵方入用清明茶□万斤、繰綿千式百斤茂持渡、右進貢船より積船之品者其涯□売□、夫故御本手之二品格別不捌成立候段、去七月申出候付、護送船より蔵方用之品最初より調□□候哉、□□物奉行野村親方江間尋候処、書付を以申出有之、右株々共□□□売用ニ持渡候綿并木綿かせ吟味之訳有之候間、売方屹与差留置候様、高奉行方江申渡置、野村親方申出之書付取添、成行御くにもと江申上越候処、去酉十一月十一日たしまとのより三はらとう五らう取次を以、被仰渡候□茶綿之儀、たうもつ方御本手第一之品柄ニ候得者、蔵方用其外壳用等持渡儀付而者、前以在番奉行并とうもつ方掛御目附□得差図候儀、当然□事候処、無其儀殊ニ国用茶之儀者、先年

依願千俵相下儀御免被仰付、其上冠船入用錢茂同断依願去々申秋御免許も有之、不願其儀旁琉球方別口不行届取計候、然者右売方差留候品柄之儀口御取揚茂可口口付事候得共、此節迄者別段口御吟味を以不及御沙汰、無御構荷主江引渡、売方致勝手候様、就而者以来唐渡之者共とうもつ方御本手ニ差障り候口、売用等自俣ニ持渡候儀、屹与口口藏方用其外地禿等ニ不致調口口不叶節々者、さいはん奉行并とうもつ方掛御

取

め付方江斤数等書届を以申出、双方故障之有無承届候上、注文可申渡申来候事

右之通、此節御くにもとより被仰渡候間、右ニ基以来御取扱有之口、此段申達候事

戊二月四日

右之通被仰渡候間、得其意とうもつ方御本手ニ差障候品売用自俣持渡間敷候、尤藏方用口外地禿用是非不買渡候而不叶品口有之候ハ、其段者御ざいはん所并とうもつ方御め付江員数凡数等書取を以可及御届候間、何品何程迄ハ不致口候而不叶段、委細書付を以早々可被申出候、此旨御差図ニ而候、以上

戊九月四日

国吉親雲上

両唐船

渡唐役者中

たうもつ方御注文品拾六種之儀、斤数買過買不足共ニ売上代口壱貫文ニ付拾五文宛之引方被仰付来候処、此節御吟味之訳有之、一往買過之分者拾五文掛等之不及差引、買不足之分者当分通被仰付候、勿論渡唐之面々御注文品割前江御請有之候付而者、過上斤数之儀者、本斤御代払相濟候上、御都合次第追口御渡方可相成、且亦唐土之依振合、専自己之勝手ニ募り過分之及買過候品者、吟味次第格別直下候之向、御買入可被仰付候付、其段茂兼而相心得候様、役者中其外江可被申渡事

右之通たうもつ方御めつき衆より被仰渡候、然者右様為被仰渡口及買過候而茂相濟候趣、致心得違候而口如何之事候条、随分買過買不足無之、御注文通金買調候様致骨折、末々江茂聊心得違無之様、頭役抱主より分ケ而可被申渡旨、御差図ニ而候、以上

申八月

若浜親雲上

山川親雲上

天願親雲上

安村親方

両艘

役者中

船頭

右之通被仰渡候間、聊緩せ候儀共無之、嚴重行届候様下知可被致旨、御差図ニ而候、以上

申八月

勢頭

大夫

たうもつ方御注文之儀、是迄口々自物荷作内江入交持口口候茂口口通堂荷役之節、及混雜候付、以来御用荷之儀者、都而取分何品入付之口銘書相記候様可取計、自然御用品之内江口品入交候敷、亦者自物口口内江御用物入加へ候類者御取揚可被仰付候付、其節苦情申出間敷候、勿論頭立候役者之面々二者、於唐惣別家口之員数綱立之取締も可有之事候付、前

条之次第相心得不洩様可致取扱旨、役者中其外江可被申渡事□、右□通たうもつ方御め付衆より被仰渡候間、御注文品之儀者別段荷作いたし、一切物入交無之様可取計候、尤末々之者共二者勘弁薄、僅之□者入加候而茂相濟候様、致心得違候而者如何之事候条、此旨頭役抱主より精々申聞せ、聊取違無之様□□申渡旨、御差図ニ而候、以上

申八月  
兼城親雲上  
山川親雲上  
天願親雲上  
東村親方

両艘

役者中  
船頭

右之通被仰渡候間、聊緩せ之儀共無之、嚴重行届候様下知可被□□□差図ニ而候、以上

申八月  
勢頭  
大夫

本文遂披露候処、申出通□□難被仰付、此節渡唐人数荷物積間ニ割合面々当高出銀を以買調、積渡之節者、勢頭大夫始末々迄帰帆之荷物間ニ割合を以積入候様被仰付候、尤久米村役者船方中江茂、右之趣被仰渡候条、五主□□者各より申渡、御用品調達□并出銀船間割合等之儀、船頭大夫江茂得差図可被取計候、以上

附、本文之趣勢頭大夫在唐人数□□被仰 付置候  
卯□月廿七日

天願親雲上  
勝連親雲上  
伊舎堂親方

口上覚

唐物御方より別冊之通□買入可被仰付候間、買渡候様被仰渡□□之私共吟味仕候処、仰渡之斤数□□過分之及銀高中々不及手式付、減少ニ而別冊之分者、勢頭大夫始船中末々迄帰帆間之割合面々当高出銀を以買調候振合仕候□、相調候儀も可有之哉与存申候間、其通被仰付被下度奉存候、左様被仰付御事御座候ハ、右之趣向々江茂被仰渡被下度奉存候、此段奉得御差図候、以上

□六月

□□里子親雲上  
池原筑之親雲上  
有堅親雲上  
真堅里子親雲上

本文遂披露候処、勢頭大夫者御使者格別之儀候間、割合相除、右荷物間ニ掛候分者両艘ニ致配分、役者以下末々迄渡□荷物間ニ割合出銀を以買調、積□□□□申出通割合可致候、右之段者、久米村役者・北京役者其外江□茂、各□之通達いたし、御用品調達方、且□□□間割合之儀、勢頭大夫江茂得差得被取計候、此旨御差図ニ而候、以上

辰八月四日

伊是名親雲上  
真栄里親雲上  
天久親雲上  
伊舎堂親雲上

今般御国元御内証御用物之儀、勢頭大夫始渡唐人数末々之荷物積間ニ割合出銀を以買調積渡方之儀、役者船中末々迄帰帆荷物間ニ割合候様被仰付被下度奉存候、左様被〇〇御事御座候ハ、右之趣面々茂被仰渡被下度奉存候、此段奉得御差函候、以上

辰七月  
宜野座里子親雲上  
森永筑親雲上  
浜元里子親雲上  
仲〇筑親雲上  
具志堅親雲上  
浦添〇〇親雲上  
本謝里子親雲上  
松本親雲上

本文遂披露候处、御用〇〇〇方并積渡方等嘉慶二十四卯年・同〇五辰年被仰渡置候旨趣ニ基き取扱候様被仰〇〇〇〇、役者船方中江茂、右之趣被仰渡候条、五主〇〇者各より申渡、所持勢頭大夫得差函可被取計〇、自然其汲受薄割合之荷〇積入方致難渋候者〇茂有之候ハ、帰帆之節者被申出候、以上

附、本文之趣勢頭大夫在唐人数江茂〇被 仰越答〇

巳八月〇日  
池城親〔 〕  
金武親〔 〕

口上覚

産物御方御用品之儀、以前より役者以下末々迄渡唐〇荷物積〇ニ銀高割合買調方仕〇〇〇節者、面々帰帆之荷物間ニ割合積入候仕向之由御座候处、去卯秋走接貢船帰帆之砌、北京方役者并船方共右仕向通之御用品荷積入方相断、難渋為仕由、表〇申候〇〇御方御注作品調達〇之儀、〇〇〇〇〇被仰付、御請書〇〇上申〇御座候处、自然右様積入方被相〇〇〇候而者、大切成御手品過分買欠買〇〇仕候外無之筈ニ而、至極〇〇〇〇事候〇、何卒是迄之仕向通、北京役者者存留勢頭与力大夫〇者、北京〇〇〇、此節渡唐之役者以下、船中〇々迄帰帆荷物間ニ割合積合様被仰付被下度奉願候、此旨宜様被仰上可被下儀奉頼候、以上

〇〇月  
接貢船脇筆者  
桑江筑登親雲上  
同大筆者  
上江溯〇〇〇 同官舎  
松村親雲上  
同才府  
喜名里子親雲上

渡唐船より持渡候紅花、於当地商人共買入、御くに元江持登、不勘弁ニ売払、右者基ひ唐

種之事ニ而御取締付、故障之訳有之、別段之御吟味を以、渡唐船帰帆之さん物方江御買入相成、□□以来者脇々買入之方一切不相成旨、笑さゑものとの御差図之段、坂本休さゑ〔 〕より申越候間、帰唐人数〔 〕其外逆茂持合之者都而さん物方□□□候様、且亦脇商売屹与不相成□手厚可被申渡候、此段申達候事〔 〕右之通御在はん所より被仰渡、やまと人御取締者、御かりや方より被仰付候□、琉球人取締向入念候様、且相場□□買入被仰付候間、□□在方之儀者さん物方掛□□申出候様、御口達御取添被仰渡候付、右品持合之方者御物方江売上、脇商売屹与可差留旨、向々江茂被仰渡置候間、被得其意、自然唐より売渡候ハ、さん物方江売上、聊緩せ無之様、渡唐〔 〕迄堅取締可被申渡候、若違背〔 〕有之者、当人者勿論、各ニ茂可及御沙汰之条、聊緩せ有間敷候、此段可申渡旨、御差図〔 〕候、以上

未四月十七日

摩文仁親雲上

嘉手納親方

〔 〕

垣花親方

未秋走接貢船

渡唐役者中

本文遂披露、嘉慶五辰年被仰附□□通、□□申出通致取扱候様被仰付候□、右□□久米村役者船方者筆者別段被仰渡、勢頭大夫在唐人数江茂被仰□□□被得其意、五主中者各より可被申渡候、以上

未三月三日

伊是名親雲上

〔 〕

口上覚

さん物御方御〔 〕以前より役者以下末々迄、渡唐之〔 〕積間銀高割□買調方仕、積渡之節者、面々帰帆之荷物間ニ積入候仕向之由ニ御座候、去卯之秋走接貢船帰帆之砌、北京役者并船方□右仕向通之御用品積入方相断候□、去々巳秋走接貢船役者より以前之仕向通、北京役者并久米村役者船方末々迄帰帆之□□間ニ割合積入候様被仰付度旨、〔 〕被仰付置候処、右接貢船唐着無之候付、在唐之□□又者去秋走進貢船久米村役者・北京役者共□右仰渡之趣不奉承知由ニ而、当夏帰帆之砌、右御用品積入方相断、過分買欠不足相成、為申由承申候、然者産物御方御用品之儀、当年より□□拾五種御注文被仰付、屹与買欠買不足等無之様、嚴重被仰渡置候処、過分之斤高二而、北京役者并船方末々之者共、御用品積入無之候而者、□切成御用品斤高過分引入、至而不都合可相成与甚驚入居申仕合御座候□、何卒以前之仕向通□□、巳年□被仰渡候通、北京役者存留勢頭与力大夫儀者、北京宰領并此節渡唐之役者以下、船中江末々迄帰帆之荷物間ニ割合積入候様被仰付候而、右之趣者此節向々江分而被仰渡被下度奉願候、此旨宜様被仰上可被下儀奉頼候、以上

未八月

接貢船脇筆者

本部里子親雲上

同〔 〕

翁長里子親雲上

同官舎

富里筑親雲上



同才府

屋嘉比筑親雲上

さん物方并御内用方御注文品調達方之儀、役者以下末々迄渡唐荷物積間ニ割合買調積渡方之儀、帰帆之役者以下右同断荷物間ニ割合積入候仕向之處、去卯秋走接貢船帰帆之砌、北京方役々并右御注文品積入方致難渋、去々已積走接貢船役者より以前之仕向通、北京方役々并久米村役々船方末々迄、各荷物間ニ割合積入候様被仰付度之旨申出、其砌被仰渡置趣茂有之候処、右接貢船いまた唐着無之、去秋走進貢舟北京役者□□江在唐面々右之仰渡承知不致由ニ而、当夏帰帆之進貢船茂、又々御注文品積入方為及難渋由ニ而、以前之通面々帰帆之荷物間ニ割積入候儀被仰渡度旨、接貢船大宿役者申出趣有之候、嘉慶廿五年被仰渡置候通、勢頭大夫者相除、申出通役者以下船方末々迄荷物間割合積被仰付候条可被得其意候、昨年右御注文品斤高過分買不足故、此節御くに許高段々訳而稠敷被仰渡趣有之、此段者先達而被仰渡候通ニ而、自然此上積入方等致難渋、昨年之様御注文品斤数引入候而者、至而不都合可成立儀ニ而、御沙汰之程も不輕答候条、面々割合荷物少も無違背様積入可有之候、此旨訳而可申渡旨御差図ニ而候、以上

未九月

伊是名親雲上

垣花親方

接貢船

大通事

存留

網官

此段、船方中江茂堅可申渡旨、御差図ニ而候、以上

未九月

接貢船

船頭

被得其意、面々割合之荷高少茂無違背積入候様、北京役者存留与力儀者、宰領江□堅可被申渡候、依御差図此段申越候、以上

未九月

勢頭

大夫

去年返上物宰領人共於御くに許勤方相濟、御暇願申上候処、去年者唐物御商法品段々買不足等ニ而御不都合相成、御暇願茂御取揚無之御模様相見得候付、右宰領人共事、去々年渡唐御用品買入口、手を附取扱為仕事候付、品々令帰帆御都合向之所、彼是掛役々江相達させ、於唐取計之手筋等渡唐役者江直談為致度趣等を以、願書調替差出候処、以来御商法品御注文買渡候様、尽吟味可取扱与之趣無抛相聞得候付、願之通御暇被□候段、笑さゑもんとの御口紙を以被仰渡候間、以来之儀、御注文通全可買渡旨被仰渡置候様、りうきう館より申来候、御商法品買調方之儀付而者、每度稠敷被仰渡置、聊大形二者相心得間敷賦候得□、猶又館内より申越候趣を茂得其意、以来御注文通買欠買不足等無之様、精々可相働候、乍此上去年通過分買欠等有之候而者、御沙汰之程茂難計御念遣之御事候条、聊疎意有之間敷候、此段可申渡旨御差図ニ而候、以上

申八月□日

与那覇親雲上

浦崎親雲上  
摩文仁親雲上  
垣花親方

申秋走両艘

渡唐役者中

右之通被仰渡候処、被得其意、御商法品買欠買不足等無之、御注文通買渡候様可致下知候、此旨御差図ニ而候、以上

申八月廿七日

勢頭

大夫

唐物抜荷一件ニ付而者、御くに許より追々被仰渡趣有之、毎度稠敷御取締被仰渡事候処、其守無之、密々不正品持登候者茂罷在、守右為御取締、於館内砂糖三町入札之儀も此以前より被召留置候処、りうきう難洪之段、被 聞召通難被黙止御訳合ニ而、今般別段御吟味筋を以御免被仰付、唐物締向館内出入等之儀、御法通ニ而別段精口尽吟味、聊不締之儀無之様、猶又掛御役所江屹与可申渡旨 御内沙汰被為 在候旨、しやうさうとの御書付に、いよちからとの御取次を以被仰渡、館中早速厳重取締口渡置候間、於御当地茂、改而猶厳敷御取締有之候様、此節りきう館より申越有之候、輕はん者一己之利欲ニ迷ひ御法を犯、此以前密々不正品持登、及露顯逢御咎目候者共段々罷在、右様御当地第一成御払口之故障ニ茂罷成、旁如何至極之儀ニ候条、此度難有 御内沙汰被為在候上者、右之御趣意一統深奉汲候、自今以後、御法度之旨堅取守不正之仕形共曾而無之様、厳重取締可有之候、乍此上違背之族於有之者、当人者勿論、於与中茂屹与可及御咎段、此節諸向江被仰渡候条、猶又各より茂五主船方従之者迄取締可被申渡旨、御差図ニ而候、以上

酉八月四日

宮平親雲上

浦崎親雲上

摩文仁親雲上

垣花親方

酉秋走接貢船

渡唐役者中

右之通被仰渡候間、被得其意、各より茂堅取締可被申渡旨、御差図ニ而候、以上

酉八月四日

勢頭

大夫

近年唐反布類過分ニ持登候付、追々取締申渡儀ニ者候得共、御領内ニ而相禿口無之、商人共不正之手筋取企、他こく江被抜売、当時唐反布類分ケ而 公へんより茂御取締厳敷事候付、以来りう人持登候儀、左之通

一羅紗五拾本

一鴈毛緞百本

一岬岐式百五拾本

一西洋布千式百五拾本

右之通差登候儀、令免許候条、於琉球さいはん奉行所江申出、免許を口候而可差登候、

万一心得違免許を不受差登候ハ、品物取揚、其身屹与為及迷惑候、且琉人共進覽又者付届用等不足茂候ハ、りうきう産之品を以用弁可致候

右之通申付候条、屹与取違無之様りうきう江申越、渡唐役者共江茂、成丈余計不持渡様厳重可申付旨、摂政・三司官江可申越旨、りきう館間役さいはん親方江可申渡候

三月 しゃうさう

右之通御取締被仰渡候段、此節りうきう館より申越有之候付、御免外一切不持登様、上国之御使者役々并船頭共江稠敷御締方被仰渡置候、就而者、第一渡唐面々仰渡之御趣意堅取守、兼而其賦を以面々致配当、成丈余計持渡間敷候

公へん江相拘訳而御締方被仰渡、不容易御事候処、万一末々之者共取違、是迄之通過分持渡、不正筋等致出来候而者、如何至極之事候条、是旨を存 従之者迄 船方末々迄厳重取締行届候様可 被取計候 取計候 此旨御差図ニ而候、以上

戊四月 小禄親雲上  
恩河親雲上  
浦崎親雲上  
嘉手納親方

戊秋走両艘

渡唐役者

船頭

右之通被仰渡候間被得其意、各よりも堅取締可被申渡旨、御差図ニ而候、以上

戊四月

勢頭

大夫

一羅紗五拾本

一鴈毛毯百本

一岬岐式百五拾本

一西洋布千式百五拾本

右者、りうきう下諸人届用として、以来右通年々差登せ候様被仰付、りうきう方より茂同断差登せ候儀者、別段被仰渡通ニ候、右付而者、渡唐役者共右員数ニ基キ余計不買渡様可被申渡候、以上

七月 さいはん奉行

右通被仰渡候間、先達而被仰渡置候りうきう御免高取合、成丈右員数外余計不買渡様可被取計候、此旨御差図ニ而候、以上

戊七月 小禄親雲上  
恩河親雲上  
浦添親雲上  
嘉手納親方

戊秋走両艘

渡唐役者

右通被仰渡候間、可被得其意旨、御差図ニ而候、以上

戊七月

王舅

大夫

一本掛人參

一山口人參

一丁子

右者御内用方品ニ而、去秋渡唐船江御注文申渡候處、当夏歸唐船より過分致買過持渡候、右ニ付而者、此節之儀者吃与御注文本□無買過持渡候様、若致過上候ハ、御買入不被仰付、葦困可申付候間、右之形行渡唐役者中江訳而可申渡、此段申達候事

右之通産物方御め付衆より被仰渡候間、得其意、御注文本少茂無買過様、末々迄茂厳重取締可有之候、此旨御差図ニ而候、以上

巳六月廿八日

我謝親雲上

和宇慶親雲上

久手堅親雲上

嘉手納親方

子秋走兩艘

渡唐役者中

船頭

右之通被仰渡置候間、各より茂御注文本不致過上様、下知可被致旨、御差図ニ而候、以上

子六月廿八日

勢頭

大夫

去亥秋渡唐りう人共江御注文相成候□、太し□様御用御端物之内白□檜垣紗綾貳拾七七反位不宜、段々御吟味有之、乍漸拾六反丈上納相濟、外ニ取替茂無之所より拾壹反丈者、中床紕縮緬白縮緬七反、中床紕縮緬貳反、代銀差引御品替相濟候由、然處此節之儀者御発駕差掛、右通繰替被仰付置候得共、以来者他替等不被仰付候間、吃与入念候様、分ケ而渡唐りう人共江可申渡旨被仰□越候間、聊大□之儀無之様、当秋渡唐之りう人共江可申渡事

□九月朔日

さん物方

右之通さん物方御め付衆より被仰渡候御注文御反物、位宜致調達候様ニ与之儀者、毎々分ケ而被仰渡趣有之候處、其汲取薄所より件之次第被奉恐入御事候条、右仰渡之御趣意厚汲取、蘇州□□商人江訳而頼入、随分御注文通位宜を買渡候様、精々可入念候、位宜乍此上位不宜儀茂候而者、甚御不都合可成立儀ニ而、御沙汰之程も不輕答之条、聊大形有之間敷候、此旨御差図ニ而候、以上

子九月

松堂親雲上

座間味親雲上

久手堅親雲上

嘉手納親雲上

子秋走兩艘

渡唐役者

右通被仰渡置候間、随分位宜を買調候様、□よりも可被加下知旨、御差図ニ而候、以上

子九月八日

勢頭

大夫

紅花五万斤

右者、御内用計を以御買渡被仰付置候処、御吟味之訳有之、以来本行之通買渡候様、万一心得違斤数相重候ハハ、屹与可及迷惑候間、聊取違無之様、当秋渡唐りう人口申渡、御請書兩日中可被差出事

子九月十二日          さん物方

右之通さん物方御め付衆より被仰渡候条、得其意聊無買過様厳重取締可有之候、尤御請書之儀、今明日中可被差出候、此旨御差図ニ而候、以上

子九月十六日

子秋走兩艘

渡唐役者

右之通被仰渡置候間、無買過様各よりも可被致下知旨、御差図ニ而候、以上

子九月十六日

勢頭大夫

琉球之儀、わかん通商之潤助を以立行来候処、近年唐国之振合以前ニ相替、交易向不便利成口、渡唐役者共差繰六ヶ敷致難渋候趣相聞得、当時柄不容易儀候得共、別段之 思召を以爲御口、当年より先式ヶ年さん物方御商法品拾六種口勿論、御内用御注文薬種代之口、是迄之御買入代銀ニ壱割増を以、御買入取計候様被仰付候、左候而、右本手用等ニ被相渡候諸品御払、是迄之直成より壱割下を以、払渡候様被仰付候条、御注文品々買不足口口無之様、精々可取計旨、渡唐役者共分ケ而手堅可申渡旨申越候様、琉球館聞役并在番親方江申渡可承向江も可申渡候

八月

右之通さん物方掛御用人ともの口すけとの御取次を以被仰渡候段、りうきう館より申越有之候条、難有致承知、左候而御注文品々買不足等無之様、精々可被取計候、此旨御差図ニ而候、以上

子九月

松堂親雲上

座間味親雲上

久手堅親雲上

嘉手納親雲上

子秋走兩艘

渡唐役者

右之通被仰渡置候間、可被得其意旨、御差図ニ而候、以上

子九月

勢頭

大夫

御内用方計を以紅花御買円ニ付、右支配はまた太平次江被仰付置、於琉球同人手先キ之者共買円方取締来候処、位品々取分直段下直ニ相立、欠斤諸雜費差引候得者、買取代ニ茂口引足、渡唐役者共致迷惑候由相聞得不可然事候、右御買円之儀、専御内用御取扱之訳有之

候付、全たひ（へか）い次自己之交易口ニ一手支配為被仰付儀口無之候付、是迄通ニ而被召置候、就而者、前文通直段下直ニ相立致迷惑候付而者、致渡唐候詮も有之間敷事候付、已来帰唐船便より紅花相届候節々、詰居之琉球産物方掛・御裁許掛并同見聞役江届申出候様、左候ハ、荷数者勿論、貫目等厳密掛役受持之琉役江致熟談、上中下品位精微ニ尽吟味、位々ニ応し相当之直成相究候ハ、致買円方候様被仰付候条、渡唐役者共江右之趣手厚申論、於唐地買入方之儀も手厚取調へ買取候様、左候而箱入付之儀、下之方者下位之紅花入付、上向計位入付相成候も有之由相聞得、別而不宜心入之事候条、右式不埒之儀共屹与無之様、手堅可申渡旨、ほんたとの依御内慮申達候事

右之通、さん物方掛御用人三はらとう五郎とのより被仰渡候段、りうきうくわんより申越有之候条、被得其意、左候而於唐紅花取入、於唐運ひ方之節取調へ入念、聊不埒之儀共無之様、末々迄も堅取締可有之候、此旨御差図ニ而候、

子九月  
松堂親雲上  
座間味親雲上  
久手堅親雲上  
嘉手納親方

子秋走兩艘

渡唐役者  
船頭

右之通被仰渡置候間、被得其意、各よりも時々可被差引旨、御差図ニ而候、以上

九月  
勢頭  
大夫

御内用計を以、紅花御買円方ニ付、右支配はま崎た平次江被仰付来候処、品位之取分ケ直段下直ニ相立、渡唐役者共致迷惑候一条ニ付、此節於御国許在番親方江被仰渡候様有之、尚又於爰許申渡置候様申来候間、何篇被仰渡候御趣意ニ基、聊不埒之儀無之様、当秋渡唐りう人共江手堅可被申渡事

子九月廿五日  
さん物方

右之通、さん物方御め付附衆より被仰渡候間、先達而被仰渡置候御趣意ニ基キ、聊不埒之儀共無之様、屹与取締可有之旨之御差図ニ而候、以上

子丑九月廿八日  
上同

渡唐役者  
船頭

右之通被仰渡置候間、各よりも時々差図可被致旨、御差図ニ而候、以上

丑九月廿八日  
勢頭  
大夫

さん物方御商法品拾六種并御内用御注文薬種代之分、是迄之御買入代銀壱割増を以、御買入被仰付、且右御本手用等ニ被相渡候諸品、是迄之直成より壱割下ケを以、御払渡被仰付候旨、ほんた殿御書付を以被仰渡、其段者、先達而被仰渡置候通ニ而、其通御算面被仰付候様、さん物掛亀山里子親雲上を以、さん物方御役々衆江申上候処、彼御方江者、御国許

より未何分不被仰渡候間、来夏渡唐船帰帆之上宜被御取計、左様可相心得旨被仰渡候条、可被得其意候、以上

子九月廿九日

宜野湾親雲上

渡唐役者

近年唐国之交易向不便利成立、渡唐役者共致難渋候御取計を以、去々子年より去丑年迄産物方御商法品拾六種者勿論、御内用御注文薬種代之分、是迄之御買入代銀ニ割増を以御買入被仰付、左候而、右本手用等ニ被相渡候諸品御払代、是迄之直成より一割下を以、払渡候様被仰付置候処、唐国兵乱付而ハ持渡候品々等も下落いたし、猶更難渋いたし、御注文品買入方等茂存分不相調答候付、別段之訳を以、当年より先式々年是迄之通被仰付候条、御注文品々買不足等無之様、精々可被取計旨、渡唐役者共江手堅可申渡旨申越候様、りうきうくわんき、役并さいはん親方江申渡可承向江茂可申渡候

正月

ふんこ

右之通くらやまさくたゆふとの御取次を以被仰渡候段、りうきうくわんより申越有之候条、難有致承知、左候而、御注文品々買不足等無之様、精々被取計候、此旨御差図ニ而候、以上

寅四月廿八日

伊舎堂親雲上

仲村親雲上

喜屋武親雲上

伊是名親雲上

寅秋走両艘

渡唐役者

右之通被仰渡置候間、可被得其意旨、御差図ニ而候、以上

寅四月廿八日

勢頭

大夫

今度下まち出火ニ付者、さん物方御蔵囲之唐御薬種類都而焼失、唐船も昨年よりなかさき表渡来無之、若哉当年迄茂致渡絶候ハ、第一人命御取救格別成薬種、猶更世上可及払底、当秋進貢ニ而、おのつから薬種類其外例式之品買渡高多有之賦候得共、右通之御差支故、猶又別紙之品々多斤買来候様、左候ハ、琉人共不及迷惑様買来候上、代銀之代品物取下度望之者者、其通ニ而夫々応薬品等、是迄より茂別段之増銀を以、御買入可被仰付候間、其通申越候様、御内沙汰被為在、畢竟□□等御取救之御趣意難有御事ニ而、是非共詮立候様可取計旨、新いる駿か殿より分ケ而被仰付越候、然者薬種類者当分御商法品御内用方御注文之斤高逆茂、船間可差支儀ニ者候得共、今般之御用御趣意与申、格別成御訳合、殊更琉人共不及迷惑様、夫々応薬品等は迄より茂分ケ而被仰渡候付而者御趣意之程厚汲受、役者共者勿論、末々之者共土産用之品々迄茂折角せり詰候而、右之積間江此節御用之薬品精々可買来、人命御取救御差支之御訳無余儀、御用之場ニ面々勝手計を相考、利潤無之品逆買欠等有之候而者、決而御都合不致事候条、件之趣厚得其意、此涯之御奉公与存、各従之者并船方末々迄も随分申論、別紙御注文品無買欠、成丈多斤買来、御用相弁候様精々可被取計候、此旨御差図ニ而候、以上

附、本文さん物方御注文品与□別段之事候条、買立帳別冊ニ相調、首尾可被申□候、以

上

寅八月七日

喜屋武親雲上

伊是名親方

寅秋走兩艘

役者中

同 船頭

右之通被仰渡置候間、被得其意、格別成御用品之事候条、随分加下知、御用全相弁候様可被取計候、此旨御差図ニ而候、以上

寅八月

勢頭

大夫

去秋御内用を以買渡方被仰付候葉種之儀、さん物御方江御取納被仰付度、此程段々御相談相成候得共、御取納一件者御国元より仰越無御座ニ付、御取計難被成段被仰聞、就而者此節御国元江奉伺御差図之趣、御到来之間、御蔵口被仰付候間、此旨得其意從之者并五主船末々江茂可被申渡候、以上

附、依品◇しそかし不致候而、不叶儀茂候ハハ、さん物御用掛方江可被申出、

此段口彼方江茂相達置候

卯七月

宜野湾親雲上

帰唐船兩艘

役者

船頭

唐葉種之儀、重立候大黃等者、唐国兵乱等趣を以致買欠、丁子其外之品々者多斤持渡候儀、専琉人共利欲ニ惑ひ候仕業与相見得、殊更大黃等者、右通買欠之姿ニ取繕ひ、蜜売いたし候儀茂有之哉ニ相聞へ、唐物抜荷之儀者、公義御制禁之段者分而申渡置趣候処、右次第別而不届之至候条、向後右体不正筋之儀共一切無之様、屹与取締可有之旨、摂政・三司官江申越候様、りうきうくわん聞役并在番親方江可申渡候

三月

するか

右之通被仰渡候段、りうきうくわんより申来候、然者御くに元御注文品調達方、又者抜荷取締向之儀ニ付而者、毎度被仰渡置趣有之候処、右次第別而不可然事候条、此段仰渡之御趣意深奉汲受、御注文品全買渡、抜荷等一切無之様、嚴重取締可有之候、乍此上大形ニ相心得、何敷不行届儀者於有之者、御沙汰之程茂難計、甚御心遣之御事候条、聊無緩疎可被致勤務候、此旨御差図ニ而候、以上

辰六月廿日

立津親雲上

亀川親雲上

川平親雲上

与那原親方

辰秋走

渡唐役者

右之通被仰渡候間被得其意、万端入念候様精々可被加下知候、此旨御差図□□候、状以上  
辰六月廿日



勢頭

大夫

御兩殿様御用さん物方計、唐御注文御反物之儀、近年別而品位不宜、就中当年歸唐船より持渡候品染入、又物疵物等有之、御召御用不相成候付、当秋走渡唐役者吃与入念、品位者勿論染入旁能々致吟味、右様行届無之様可申渡旨、此節分而申来候付、右之趣可被申渡候、乍此上間違之儀共有之候而ハ、吃与迷惑可相成候条、是亦申渡、御請之成行早々可被差出事

辰九月廿七日

右之通りうきうさん物方御め付衆より被仰渡候御注文御反物、位宜致調達候様ニ而之儀者、毎々分ケ而被仰渡趣有之口、其汲取薄所より件之次第被奉恐入御事候条、右仰渡之趣意厚汲受、於唐商人共訳而頼入、随分御注文通位宜口買渡候様、精々可入念候、乍此上位不宜口買渡候様精々可入念候、乍此上位不宜口候而者、甚御不都合可成立儀ニ而、御沙汰之程茂不輕答之条、聊大形有之間敷候、尤御請之成行書付を以、今明日中可被申出候、此旨御差図ニ而候、以上

辰九月

立津親雲上

亀川親雲上

川平親雲上

与那原親方

辰秋走兩艘

渡唐役者

右之通被仰渡候間、随分位宜を買調候様、各より茂可被致下知旨、御差図ニ而候、以上

辰九月

勢頭

大夫

御商法品之内大黃・犀角・甘松之類、当分之御買入直成より御直増等を以御買入被仰付候条、以来者吃与買欠無之、御注文本ニ相備候様 御沙汰被為 在候付、難有 御趣意之程奉汲受、唐渡役者共江訳而無間違買渡候様可被申渡旨、摂政方可申達事

八月

右之通、するかとのより御書付を以被仰渡候段、りきうくわんより申越趣有之候、格別成御用品右式直増等を以、御買入被仰付候段、訳而 御沙汰之趣茂有之候付而者難有致承知、於唐精々相働、御注文本無買欠全致調達候様可被取計候、自然買欠買不足等有之候而者、甚御不都合可成立儀ニ而、御沙汰之程茂不輕答候条、聊大形有之間敷候、此旨御差図ニ而候、以上

辰十月

立津親雲上

亀川親雲上

与那原親雲上

辰秋走兩艘

渡唐役者

右之通被仰渡置候間、随分御注文通全買調候様、各より茂可被加下知旨、御差図ニ而候、以上

辰十月

勢頭

大夫

渡唐之面々西洋品買渡候而者、売口対し御難題之端ニ相成事ニ而、一切不買渡様ニ与之儀者、先達而細々被仰渡、一統奉承知通ニ而、然者、去年御くに元より羅紗岬岐并西洋器物類、去々年亜米利幹江約定取替不相成、以来唐持渡候儀取締為有之由候得共、最早其儀ニ及間敷よりたいしゆ様御内沙汰為被為 在事候得共、羅紗・岬岐西洋口類并同器物等買入候儀者、唐商人共中入を以之調達ニ候得者、多欲之夷人等聞伝口口故障付候廉有之、乍恐御内沙汰ニ者何分ニ茂取計難仕趣、口口被仰上越候処、無余儀趣故被達 御内聴候様可被仕、此以後唐より不買渡様口之儀者、摂政・三司官吟味茂可有之与、するかとの御書付を以被仰渡置候、然処、此節帰唐船御くに元漂着、羅紗岬岐類持渡、前文御断被仰上置候趣意ニも致齟齬、御都合不仕候付、き、役さいはん親方より御断申上置候段、りうきうくわんより申越趣有之候、御かい屋方より茂、右通西洋品買渡不届之仕形口おのつから買渡之面々御咎目茂有之筈、罪分御議定相成候ハ、申上候様御沙汰有之、御くに元御都合等如何御取合可被成哉与、至極御心配之御事候、就而者、買渡候面々屹与御咎目不被仰付候而不叶、平等方江糺方被仰渡置候付、追々其御取扱被仰付筈候間、右之趣具ニ得其意、先達而被仰渡置候通、西洋品買渡間敷、乍此上持渡商人共押渡候杯与申、何分謂等敷申上候而茂、右通難ニ相懸候儀者勿論、被对御くに元甚御不都合相成事ニ而、品物御取揚之上、御咎目之程不軽筈之条、聊緩疎有間敷候、此旨御差図ニ而候、以上

附

五主并従之者 船方之者 迄申渡、堅可相守通証文、高所江可被差出候

辰十月

宇地原親雲上

与那原親方

辰秋走兩艘

渡唐役者

船頭

右之通被仰渡置候間、被得其意、各より茂締方行届候様可被取計旨、御差図ニ而候、以上

辰十月

勢頭

大夫

さん物方御め附衆より各被召寄、唐御注文品調達方一件ニ付、御書付并御口達を以茂為被仰渡段、御書付取添被申出趣、遂披露候、然者、唐御用物御調達方之儀ニ付而者、毎度稠敷被仰渡請書等差出、不容易事候得者、渡唐之上精々入念御注文品全可買来、当時唐族乱ニ事寄、御注文品買欠等之品茂間々有之、是迄者御叱迄ニ而相済候得共、以来買欠買不足等之多少ニ応し、旅留又者其科可被仰付、且帰唐船改之儀、是迄一番方・式番方・三番方御用物積入候箱櫃者、改なしニ相済来候哉ニ相聞得候付、向後箱櫃不依、大小一々明改被仰付、不正之品物入加置候ハ、屹与其御取扱可被仰付由、彼是御尤之御事候得者、仰渡之趣等与汲受渡、唐之御注文品全買調、抜荷等一切無之様精々取締可有之候、万一夫々不行届儀茂候ハ、越度之稜ニ応し、嚴科ニも相及、面々迷惑者勿論、御難題も可成立事ニ而、別而御念遣之御事候条、五主船方従之者毎度無油断致差引、いつれ仰渡之御趣意行届

候様精々可被取計候、此旨可申渡旨、御差図ニ而候、以上

午九月十五日

阿波根親雲上

喜舎場親雲上

浦添親雲上

恩河親方

午秋走両艘

渡唐役者

船頭

右之通被仰渡候間、各より茂屹与致差引、御注文品全買調、御法度品等茂一切不持渡様可被致下知、御差図ニ而候、以上

午九月十五日

勢頭

大夫

帰唐船持渡さん物方御注文品之儀、銘々持物荷作内江入交、持渡品茂有之、荷役口節及混雑候付、以来御用荷之儀者、都而取分何品入付之訳銘書相記候様、自然御用品之内江外品取交候敷、又者、自物之内江御用品入加候類者御取揚可被仰付候付、其節苦情申出間敷、勿論頭立候役者中二者、於唐国惣別買占之員数綱立之取締茂可有之事候付、前条之次第屹与心得可有之旨之趣、先年より追々申渡有之候得共、当夏進貢船帰帆ニ付而者、段々疑敷品物等有之、不束之次第候付、糺方申渡候処、何そ不審之廉茂不相見得候付、別段之御取訳を以、銘々荷主江被返下取納被仰付候間、向後屹与入念聊混在之儀共無之様、当秋走接貢船役者中者勿論、其外嚴重相守候様、分ヶ而可被申渡事

未八月

さん物方

右之通被仰渡候、然者さん物方御注文品之儀、別段致荷作、一切自物入交無之様可取計与之趣者、跡々より被仰渡置候処、其守達無之、前条通御沙汰相懸、如何之事候条、未々之者共江者頭役抱主より精々申聞、聊取違無之様可被取計候、此上なから不守之者於有之者、屹与可及御沙汰之条、聊緩疎有間敷候、此旨御差図ニ而候、以上

未八月

森山親雲上

奥平親雲上

浦添親雲上

浜比嘉親方

接貢船

役者

船頭

右之通被仰渡候間、聊緩之儀共無之、嚴重行届候様下知可被致旨、御差図ニ而候、以上

未八月

勢頭 大夫

さん物方唐御注文品之儀、買欠又者買過買不足無之様、去年茂敷被仰渡置候処、当夏帰唐之面々品数者大概相揃買来候得共、買渡候而勝手可相成品者過分買来、不勝手之品者致買不足候様相見得、甚御用支相成、且抜荷御締方ニ付而者、慶良間嶋江やまとよこめ并あしかる、久米嶋江茂やまとよこめ被差渡、嚴重被仰渡趣有之候処、当夏帰唐船冲通之出舟

漕寄せ、不正物卸取候儀有之候、地下ニ而之締方者役者共届兼候儀茂、間ニ可有之候得共、海上ニ而者締方随分可行届儀候処、右通小舟漕寄為致拔荷候儀、畢竟役者共締方大形之筋相見得、如何之事候間、以来御注文品無欠過買渡、拔荷茂無之様可致取締旨、さん物方御め付衆より被仰渡候、然者唐御注文品調達方、且拔荷御締方ニ付而者、御くに許より追々被仰渡趣有之、猶又去年茂さん物方より厳敷被仰渡候処、其汲取無之、右次第今形ニ而者何様御故障筋可致出来茂難計、甚御心配之御事候条、件之趣得与被得其意、御注文品全可買渡、馴々相心得買過買不足等有之候而者、御沙汰之程不輕筈之条、此段茂頭ニ承知可有之候、且拔荷取締之儀、五主船方従之者共江茂具申聞、各始末々迄四五人宛与合、於唐荷造等之節厳密ニ相改、帰帆冲通之砌、猶以氣を附厳重取締可致候、此上なから拔荷取企候者於有之者、本人与合之者共者重科被仰付、頭役ニ茂屹与可及御沙汰之条、聊緩疎有間敷候、尤与合之証文早々可被差出候、此旨御差図ニ而候、以上

未八月  
森山親雲上  
奥平親雲上  
浦添親雲上  
浜比嘉親雲上

#### 未秋走接貢船

役者中 船頭

右之通被仰渡置候間、各ニ茂得与被得其意、御注文品無欠過買渡候様致下知、且拔荷取締之儀、在唐之面々并漂着茂罷在候ハ、前条同断証文為差出、右証文ニ各又者存留添書を以爰許江差送、屹与取締行届候様、是又下知方可被致候、左候而右之段者存留江も相達置、年々右之振合を以、下知方有之候様可被取計候、依御差図此段申越候、以上

八月  
勢頭  
大夫

#### 紅花

右者、御当地近年臨時御物入之儀共被為続、御蔵方極々御難渋成立、諸士百姓ニ茂一統困窮之砌、猶又御物入之儀共差見得候付、くわんない支配被仰付度旨、御願立相成候処、願意之趣細々 さいしやう様被 聞召上、不容易儀ニ者候得共、願意難被為黙口事情ニ候故、格別之御慈悲を以、一往願之通くわんない支配被 仰付候、就而者別而不容易折柄ニ候間、大さか表等自他国共売捌方之儀者、何篇是迄之仕向ニ準、御取扱被仰付候間、御役々より茂氣を附、無滞相揃候様可御取計与之御事ニ候、左候而、右様御物御事を茂被為欠為御救助願意御許容被仰付候御趣意者差留、ゑと立こわんせん等之公務を始、國中窮民共御扶助行届簡易節儉之趣法相建、追年御蔵方立直り、永久御こく政等等閑無之様ニ与之厚 思召ニ候間、りう役共深汲受、直様精蜜遂吟味厚 思召之詮屹与相立候様、手厚可取計旨被仰付候段、ほんたとのより被仰渡、御たうち困窮之所御憐恤、右通厚御取扱被仰付難有次第ニ候間、各ニ茂難有可奉承知候、右ニ付進貢之時五万斤、接貢之時三万斤内外買渡方被仰付、左候而くわんない用聞之内、柿もと彦さいもん・へつほう太らう兩人江売、支配被仰付候間、右之斤数丈可買渡候、尤拔買有之候而者、払先之故障者勿論、為御救助御許容被仰付候

御趣意ニ茂不相叶、依体ニ者御故障筋ニも可成立事候条、於買先拔荷之取締一稔入念各護

之者共并五主船方共迄無油断下知を加、積荷之砌分ケ而氣を付相改、抜荷一切無之様可被取計、自然荷取企候者於有之者、重科被仰付、各ニ茂屹与可及御沙汰之条、聊緩疎有間敷候、此旨御差図ニ而候、以上

附、支配方代銀等之儀、委細御物奉行より可申渡候

未九月廿九日

森山親雲上

奥平親雲上

浦添親雲上

浜比嘉親方

未秋走接貢船

役者

船頭

右之通被仰渡置候間、各ニ茂氣を附致差引、前条通之斤数買渡、抜荷茂一切無之様可被取計候、依御差図此旨申越候、以上

未九月廿九日

勢頭

大夫

さん物方唐御注文品之儀、買欠買不足無之様ニ与之儀者、御くに許より追々被仰渡趣有之、猶又さん物方御め付衆より茂御沙汰有之、此段者先達而被仰渡置通ニ而、聊粗略者有之間敷候得共、此節より紅花くわんない支配被仰付候付、若哉紅花江差向候方勝手筋与相考、さん物方御用品買欠買不足等可有之哉、御念遣之御事候条、件之趣等与得其意、右体利欲之企曾而無之、御注文品全可買来、此上なから買欠買不足等於有之者、御沙汰之程不輕筭之条、聊緩疎有間敷候、此旨御差図ニ而候、以上

未九月廿九日

森山親雲上

奥平親雲上

浦添親雲上

浜比嘉親方

未秋走接貢船

役者

右之通被仰渡置候間、各ニ茂氣を付致下知、さん物方御注文品買欠買不足無之様可被取計候、依御差図、此旨申越候、以上

未九月廿九日

勢頭

大夫

紅花一件付、さん物方御役々衆より今日たかさきしんゆい門慶良間嶋江被差渡、別紙兩通口相渡候、此段御届申上候、以上

酉正月十三日

大唐船才府

読谷山里子親雲上

小唐船才府

武嶋里子親雲上

御鎖之側御方

別紙写之通紅花之儀、当座計ニ而支配人はまさき太へい次江被仰付候、右付御用聞たかさきしゆい門江委細申付、態々其元江差渡候間、篤く承届、聊無大形無之様可取計候、此段申越候、以上

正月十三日

さん物方

大小両船 渡唐役者中

きくゝ(カ)とのより被相渡候御書付之写

りうきうこわんきゝ役

さいはん親方江

紅花之儀、りうきうさん物方御用第一之品柄ニ而、格別之御利潤相成事候処、りうきうこく吉凶大礼打続、其上異国人逗留旁ニ而国王蔵方を始一統及困窮候付、りうきう役々歎願之趣有之、昨年別段之思召を以、こわんない支配被仰付置候処、本手之儀過分之金高ニ而代品取戻候儀無覚束、就而ハこわんない支配被仰付候詮茂無之候付、以来さん物方計被仰付、琉きう方江者当分支配人より紅花壺万斤ニ付金五百兩宛差出候由ニ而、今百兩被相重、都合壺万斤ニ六百兩宛之割被成下候、左候得者、於さん物方代本手品等引受取計、紅花多斤持渡候得者、おりうきう方二者利潤茂相重候付、旁別段之思召を以、右之通被仰付候条、此旨りうきう江可申越候

右申渡、りうきうさん物方掛御役々江申渡可承向江茂可申渡候

十二月

きくゝ(カ)

近年、唐国交易向不便利相成立、渡唐役者共難渋いたし候御取訳を以、去子年より卯年迄之年限を以、さん物方御商法等拾六種者勿論、御内用御注文薬種代之分、是迄之御買入代銀ニ壺割増を以御買入被仰付、左候而、右本手用等ニ被相渡候諸品御払代、是迄之直成より壺割下を以、払渡候様被仰付置候処、唐国兵乱ニ付而ハ今ニ不相鎮、持渡候品々茂下ろしたし、猶更難渋成立、御注文品買入方等茂不相調管候付、別段之御取訳を以、当年より先三ヶ年は迄之通被仰付候条、御注文品々買不足等無之様、精々可取計旨、渡唐役者共江手堅可申渡旨申越候様、りうきうこわんきゝ役并在はん親方江可申渡候

十月

さい門

右之通、御趣法方掛御用人中むらしん介との御取次を以被仰渡候段、りうきう館より申越有之候条難有致承知、左候而、御注文品々買不足等無之様、精々可被取計候、此旨御差図ニ而候、以上

酉正月

崎浜親雲上

金武親雲上

森山親雲上

久手堅親方

申秋走両艘

渡唐役者

右之通被仰渡置候間可被得其意旨、御差図ニ而候、以上

酉正月

勢頭

大夫

さん物方御計被仰付置候

御前御用唐御注文御端布代料之儀、以来干生子・なからめ・鱧ひれ類者品物一年敷付ニ而、前年渡唐役者持渡、唐国滞在之琉人ニ而右品買捌代銀取図置、翌年着帆、直様御注文品致調達方、年々右之手続ニ而品物を以、是非相弁候様、去年御くに元より被仰渡趣有之候処、福州之儀、現銀有少殊賊乱ニ付而者不意之用心ニ現銀致格護、票蓄錢を以致通用候由ニ而、御端布代料品物持渡候而者、現銀取図方不相調、御用物調達方差支、其外故障付候訳合有之、就而者吃与現銀御下渡之方被奉願答候得共、訳ケ而段々被仰渡趣有之候付、左様ニ茂難被仰上、御当地御損成なから、右御用物二番銀を以差足調達仕、御返銀者一番方売上、御用物代銀同様之振合ニ被仰付度旨、其通難被仰付候ハ、此中さん物方より渡唐役者江丁錢御下渡被仰付候、御算面を以、御当地御蔵方江現錢渡被仰付ニ而茂兩様候間、御願越相成候処、不容易儀候得共、唐国兵乱ニ付而ハ無余儀趣付、旁出格之御取訳を以、是迄渡唐役者共江御下渡被仰付来候、直賊を以丁錢御下渡被仰付来候、直賦を以丁錢御下渡被仰付候条、以来御用端布吃与買調候様可取計旨被仰渡候段、りきうこわんき、役在はん親方より申来候間、其首尾方可被申渡旨、御差図ニ而候、以上

戊五月八日

御物奉行

右之通被仰渡置候間可被得其意候、唐御用物調達方之儀ニ付而ハ、毎度分ケ而被仰渡候付、聊疎略者有之間敷候得共、右通御くに元より被仰渡候間、猶以入念御注文通位宜を全買調候様、精々可被相働候、此旨御差図ニ而候、以上

戊五月八日

大村里子親雲上

安室親雲上

金武親雲上

戊秋走兩艘

渡唐役者

御当地座木綿紺地布之儀、於おくに許賞翫いたし候品柄候処、近年異国総織交外飾者宜候得共保不宜、かミ方表其外直段下落いたし、今体ニ而者、格別成名品之詮薄成立候付、以来帰唐船より異国総持渡候儀、吃与差留候様、くわいけい局御書付を以被仰渡候段、此節りうきう館より申来、生さん方より茂締向厳重行届候様可取計旨、分而御達有之候間、件之趣厚汲受 従之者迄 船方末々迄 堅申渡、帰帆之節、異国総迎不持渡様、自然不守之者茂候ハ、現品御取揚之上、御咎目を茂可被仰付之条、聊有緩疎間敷旨、御差図ニ而候、以上

午九月廿八日

幸地親雲上

城間親雲上

小禄親雲上

午秋走進貢船

役者中

船頭

右之通被仰渡候間被得其意、各より茂堅取締可申渡旨、御差図ニ而候、以上

午九月廿八日

勢頭

大夫

# 「御国元御使者孫左衛門殿御内用日記一冊」第383号について

上原 兼善

【表題】 大清道光九年 日本文政十二 年御国元御使者孫左衛門殿御内用日記 一冊

【文書番号】 383号

【年代】 道光9・文政12(1829)

〔内容〕

1829年(文政12)、薩摩藩は9月半ば過ぎに四本孫左右衛門と石原伝兵衛の2人に特別の使命を負わせて琉球に送り込んでいる。特別の使命とは一つは翌々年に予定されている琉球の「江戸立ち」(参府)延期の了解を取り付け、その嘆願書を幕府に差し出させること、そして今一つは砂糖を作り広めさせることであった。

薩摩藩ではこの年調所笑左衛門を中心として天保改革がはじまり、藩の財政改革は旧来の藩債の償却、新銀主の編成、領内特産物の商品化、とりわけ奄美三島砂糖の専売化などを中軸として展開されたことはよく知られている。しかし、財政的な手当ができず、改革の手始めに琉球の江戸参府の延期、琉球砂糖の増産とその専売化が画策されたことはあまり知られていない。その点で、この史料は薩摩藩の初期天保改革の新たな側面を明らかにしてくれる貴重な史料といえるが、それだけではない、四本らは特命使者と琉球摂政・三司官らとの間で論議が交わされ、幕府を欺くための機密文書が作成されていく過程は、薩摩藩の対幕姿勢が知られて興味深い。また、砂糖の作り広めの一件についても、基本的には摂政・三司官らは四本らの要求を呑まざるをえなくなるが、要求の免除願、砂糖と米の換算率および作増し高をめぐる交渉など、琉球側の主体的な動向が確認される点も注目してよいであろう。

〔史料本文〕

大清道光九年

日本〔 〕年

九月十□日

〔 〕来着、聞〔 〕

孫左衛門殿・石原伝〔 〕

琉球江被差越候条可申〔 〕

御書付を以〔 〕

〔 〕

附係之役々〔 〕段〔 〕

被仰渡、且又乗船之儀者〔 〕

九月より〔 〕出帆之段承候由〔 〕□事

一御使者四本孫左衛門〔 〕

〔 〕御下□被成〔 〕

手組〔 〕引向〔 〕



御取計旨、左之人〔 〕

〔 〕 〔 〕 親〔 〕

日帳主取 羽地里子親雲上

御所帯方〔 〕御吟味役

〔 〕親雲上

日帳主取 小録親雲上

一右付、左之〔 〕御用向取扱〔 〕被仰 付被下度□、達

〔 〕 上聞申渡候事

〔 〕 〔 〕 評定所筆□主取屋嘉部

〔 〕 中城御殿大親野村〔 〕

掌□使〔 〕

御物奉行帳主取

比嘉筑登親〔 〕

一右人数致□□諸事致〔 〕候事

十月十二日

一從御国元御内用ニ付、御使者四本孫左衛門殿・石原 伝兵衛殿御乗船那覇川御着船被成候付、与那原親 方・盛嶋親方罷下、御銘々御旅宿〔 〕拜□顔祝 詞申〔 〕事

附、羽地王子・座喜味親方者不快付、不〔 〕

一右相濟、直ク御在番所參□、御奉行懸御目、誠□□々より御断申上□者、今度御使者御渡海被成候儀、何様之御用与者不相知、□用者、砂糖作□之御用ニ而茂可有御座哉、心配仕居候、去年御奉行江茂委曲申上置候通、砂糖作増付而者、疲□之百姓者別而痛ニ罷成申事□、押々難申付成〔 〕等□捨願為申上事〔 〕御許容無〔 〕御使者を以、強而被仰付候ハ、当時□百姓難□行至極心痛仕居候、〔 〕当地一体之成行、百姓告難之所者御賢察可有御座候間、何与そ被添御心、万事情能御賢慮被成下度旨、御頼申上候処、随分其御心得可被成、尤差支之成行御奉行御存知不被成後茂有之候間、委細申上候様被仰聞候付、里主玉城親〔 〕御内々重而申上候様仕度段申上、御暇ニ而罷帰候事

同十四日

一右付御増方差支候成行〔 〕

左之通書付日帳主取小〔 〕

里主玉城親方を以、御内分より〔 〕

砂糖黍作増方差支候成行〔 〕

一先年作増之頃迄者、一統之潤〔 〕有之候処、兩度之江戸立引続、冠船渡来旁不応国力物入ニ而、其節々国中課役并砂糖作増等多年押々申付置候処、砂糖黍之儀、上位之地を撰差付、初中後之手入人〔 〕相掛、段々〔 〕致熟焼出之時分者、田地〔 〕旁差支、夫故連々諸郷疲入〔 〕、村々人居相減、□作茂不行届候付、不及是非黍作敷地取納置申□事

一右通百姓為取救、砂糖減少等申付置候得共、海国年々風早之災殃相口不申、就中去酉年無類之飢饉〔 〕打続、時々館内才覺を以、多分之〔 〕差下、救方申付候へ共不行届〔 〕及過之、諸郷口至之疲入年〔 〕滞納、夫故蔵方統料〔 〕申候事

一御国元ニ茂御統方御難渋付、拾壹年以前子年川々御普請御手伝ニ付金子壹万五千兩、去酉年御手伝金為御見当五千兩上納、其外重出米口出銀彼是取合、此拾三四ヶ年中ニ過分之出金、小国不相応之上納分御座候故、蔵方必至与困窮仕、諸郷江年々可相渡、砂糖雜物代渡方茂相滞、百姓弥増及難儀居申候事

口口月十四日

同廿四日

一御内用付、摂政・三司官〔 〕可被成候間、明廿五日昼時分、孫左衛門殿御宿江可差越旨致通達候様、用達筑地半次郎を以里主江御達有之、里主より那覇筆者差遣、日帳主取小録親上取次申出有之候事

同廿五日

一四ツ時分、羽地王子・座喜味親方・与那原親方・盛嶋親方、里主所江差越、里主を以半次郎迄相達候処、追而摂政一人孫左衛門殿御宿江罷出候様申来、早速参上仕候処、障子被相閉、床之前江差寄候様被仰聞、口寄候処、国王様得御対顔極密御内用申上度、此段被仰上、御答者、摂政手紙を以內密相達候様被仰聞候付、国王江申聞、日柄相究申上候様可仕段、御即答申上、直ニ扣居候事

一極密之御内用故、伺御機嫌之筋を以被成御定候間、御対〔 〕摂政一人出席有之、三司官ニ者致出席間敷、尤御馳走茂御茶迄口可相済由被仰聞候付、適初而〔 〕被成候を何之御馳走茂無之、御茶計ニ而者国王不安ニ被存候間、御吸物者差上度旨申上、弥御受合有之候事

一右一段相済、三司官御用有之、座喜味親方・与那原親方・盛嶋親方参上仕候処、如最前障口被相閉、床之前江差寄候様被仰聞差寄候処、御国元御所帶方極御難渋付、御勤事を茂被為整兼候向ニ成立、乍御氣之毒追々出銀米等茂被口仰付候得共、詮立候程之儀茂無御座候付、和製砂糖精々作広候様被 仰付候、砂糖之儀第一之御国益候間、琉球之儀茂少々作増為繰登候様被仰付候、摂政・三司官ニ茂 御趣意之程奉汲受、精々吟味仕、御請之程合何分可申上旨被仰渡候、右付仰渡之趣委細承知仕、随分遂吟味、後口何分申上候様可仕旨、御即答申上、退去直ニ登〔 〕御前参上、右段々口成行委細〔 〕候事

一御使者御登 城日柄遅成候而口不相済、来ル廿九日 御登被成候様、羽地王子手紙差遣候様可仕段奉伺相 済候事

同廿七日

一羽地王子手紙箱ニ入、切封ニ而王子与力外間子親口を以、四本孫左衛門殿江差上候処、御即答之手紙右箱ニ入、切封ニ而外間江被相渡持来候付、早速奉備 上覽候、王子手紙并御使者手紙左ニ記

一昨日承知仕候、国王御対顔之事相達申候処、明後廿九日御出被下候様可申上旨被申候、此段為可申上、如斯御座候、以上

十月廿七日

四本孫左衛門様

石原伝兵衛様

追而申上候御対顔之砌、御〔 〕書被成下候 様者相成申間敷候、〔 〕茂可有之哉□心配仕、乍□此段御頼申上候、以上

□月廿七日

一昨日御達申置候一条二付、明後廿九日可罷出旨、得 其意申候、御答如斯御座候、以上  
十月廿七日

追而口上扣書之儀被仰聞相達可申候、此段茂申上候、以上

表書ニ此通

羽地王子様

四本孫左衛門

石原伝兵衛

同廿九日

一御使者御兩人御登 城、南風之御殿江御着座

上様出御、摂政羽地王子伺公、左候□御使者御兩人少上江御寄

上様御差寄、羽地王子茂差寄候付、御意与被申、御 演達之趣左之通、江戸立之儀、御国元ニ茂太粧成及 御入価候処、猶又 公辺より御金納被仰出候御模様有之、当御時節右程成儀共被為蒙仰□候而者、前後御□繰茂難被為整、御難渋之御事□故、右御金納被遊御□候以 思召来寅年被召列候様、御伺済之上被仰渡置御事候、然処江戸立御入価茂当御時節整兼候〔 〕年延之御伺被仰上候御内定ニ候処、其段江戸表江相響御疑有之、夫付而ハ琉球方差当り変事到来ニ而、江戸立手当礎与及相違候訳合申□、年延之願立無之候而者、右之御疑相晴不申、江戸表御不都合可成立与御心配被思召候、右付我々渡海之上、直ニ 国王様得御対顔、琉球より年延之御訴訟被仰候様御頼可申上旨蒙 仰候間、とふそ其通御取計有御座度□被仰〔 〕事

一右一段之御内用相済、猶又〔 〕御趣意与申被申、御演達之趣左之通、御国元御所帶□極御難渋〔 〕御□事を茂被為整兼候向ニ成立、乍御氣之毒追々□□米等茂被仰付候得共、詮立候程之儀茂無御座候付、〔 〕砂糖精々作広候様被 仰付候、砂糖之儀、第一□御国益候間、琉球之儀茂、少々作増為繰登候□被 仰付候間、国王様御承知之〔 〕御趣意通、御取計御座候様被仰候事

一右兩条 御趣意之程

上様被遊御承知御即答、羽地王子御名代を以被仰上候御振合、左ニ記、御演達委細承知仕候

御趣意之程奉汲受随分取計、後日何分可申□候

一右付、羽地王子より江戸立年延願之儀、使者を以可申上哉之旨、御尋申上候処、不及其儀、書面を以相済候段□仰聞候事

一御内用之儀、摂政□人ニ而□承知違□可有之哉与、恐入罷在候間、三司官之内一人添聞被仰付度旨、羽地王子〔 〕御使者江御相談仕候処、今日添聞相重候様ニ者難被成

候、国王様より口見合御申付御座候ハ、後日被仰聞候由被申候付、其通可仕旨申上候、右御使者御歸り後相談之上、盛嶋親方江被仰付度旨奉伺相濟候事

一御使者御口上之扣書御持参被下度旨、兼而撰政手紙を以御頼申上置候処、扣書差出候而者御内用相洩候付、御持参不被成段、撰政江御達有之事

一御使者初而御登 城被成候付、輕キ御休迄者御馳走仕度旨、兼而御挨拶申上、御内用相濟、於御書院御 料理差上、昼八ツ時分御歸被成候

附、御次第書并御膳御書院方江相見得申候

十一月朔日

一盛嶋親方、孫左衛門殿・伝兵衛殿御宿参上、御内用添聞之儀、昨日羽地王子より申上候通、私江被申聞候間、委細被仰聞度旨申上候、右ニ付、御内用之成行被仰聞口者、江戸口使者被召連候儀、御国元ニ茂過分御入価御座候処、既ニ

公边より御金納被 仰出御模様有之、当御時節右様成儀共被為蒙 仰候而者、何様ニ茂難被為整所〔 〕右御金納被遊御返(カ)候、以 思召寅年〔 〕被遊御伺候而寅年差掛り、猶又辰年江年延被仰上候御内定御座候処、其段江戸表江露頭ニ而、御都合不宜次第ニ成立、至極被為成御心配候、依之段々及御吟味、琉球方不量之變事差当、来年江戸立手当礪与相違ニ而、何様ニ茂難取償訳合を以、年延願立無之候而者、江戸御都合御取直難被遊候付、我々渡海之上、国王様江右之成行極密申上、年延御願御座候様、御頼可申上旨蒙 仰候

公边御都合向ニ掛不容易御事候間、随分變事之謂考茂御願立有之候様可取計、是又連年御所帶御難洩成立、追々出銀米等被仰付候得共詮立候儀無之、和製砂糖精々作広被仰付、去年二者、琉球ニ茂作増方被仰渡候処、百姓勞入候訳申立、直様御断申出候付、御口々趣為有之事候、然共為過去儀者無御構、此度者御用相調を第一ニ而我々渡海、撰政・三司官江茂直談被仰渡候、尤百姓禿候程ニ作増被仰渡儀ニ而ハ無之候間、其心得ニ而評議可有之、乍此上御趣意汲受無之候而者、違背之筋ニ而、屹与御取扱茂被召替筈候間、少々成共作増御請之方吟味無之候而ハ不相濟儀ニ候、勿論於御国元、依時宜諸郷竿糺を茂被仰付御仕向御座候処、琉球者御取分茂候而不及其儀、若彼是之勘弁茂無之御断申立候而者、新開地御糺御竿入等可被仰付哉茂難計候、此段者仰渡ニ而無之、我々気寄之事ニ而為心得兼而被申達候由、段々被仰聞候付、前条之御内用随分吟味可仕旨申上候事

一右付、江戸立年延願之口御相談仕〔 〕粧ニ付而者、如先規蔵役・書役運送船江乗船申付、及兩度致出帆候得共、風不順ニ而及難船乗〔 〕終ニ越年故手当向差支、且又御糸口・古米船蔵役乗船江者、砂糖其外諸反布等茂積入置候処、難船ニ而長々之船中、殊ニ致越年候付而者砂糖位劣ニ而、重而積出不罷成、諸反布茂黒ミ入虫入等ニ而、是又調替相成候品多有之、旁手当及相口候訳合申立、年延申上候而者、何様可有御座哉之旨申上候処、謂筋之儀、委細事書を以懸御目候様、左候ハ、御吟味可被成旨被申候事

一御使者衆より被仰聞候者、疫癘相口行、江戸立人数之内多分相煩、上国難叶訳相立候様被仰付候付、疫癘与申者、首里那覇迄茂致流行候筋合之処、那覇江者御国元之衆余多被罷居事候得者、事洩候者相成間敷哉之旨申上候処、成程其通ニ茂可有之、此儀猶得与吟味可有之旨被仰聞候、右付猶又被仰候者、唐渡船洋中〔 〕逆風先嶋後江漂流ニ而唐着遅〔 〕帰帆格別相後、手当及相違候筋申立候而者、何様可有之哉之旨被仰〔 〕

渡唐人数二者御内用不口二而、来夏早々致帰帆箬候へ者、謂難相立段申上候処、帰唐船乗掛候砌、小舟漕出、右口訳合申聞候ハ、随分相濟候様ニ被思召候段被仰候、右付重而申上候者、海上之不平者難計、若哉風並ニ依而、他領又者御国元江可致漂着儀茂可有之哉、銘々其例も有之事ニ而、別而無心元次第段々申上候間、御聞置被成候事

一右通江戸立年延謂筋ニ付而者、御使者衆ニ茂色々及御心配候様子相見得、猶又御存寄之趣者、古船一艘取仕立荷物積入、蔵役中乗ニ而、正二月之頃、那覇致出帆、山原辺潮掛ニ而為致破船、積荷流失ニ而手当相違成候筋取計候而者、何様可有之哉之旨被仰候、伝兵衛殿より茂、此儀久馬殿御内沙汰之事ニ而、右通取計候ハ、都合茂宜有之旨、段々被仰聞〔 〕吟味之上、何分可申上旨御返答〔 〕事

一砂糖作増之儀、向々口調部口申渡〔 〕何分吟味茂難成候間、調部申渡候上、申上候様可仕旨申上候、右付物奉行喜舎場親方・鎖之側譜久村等親口江御用掛被仰付度旨、御相談申上候処、弥其通可然由被仰聞候付、今日喜舎場譜久村初而御見舞仕候事

一前条段々之成行御使者御銘々御宿江参上、得御相談 罷帰候事

同十六日

不等之氣候之処、弥御堅康被成御勤奉口寿候、先達而御達申置候作増之儀者、如何之事御座候哉、大体御治定も有之候半敷、将別段御内用向茂被及御評決候哉、当時之成行致承知度存申候、随席此段得貴慮候御手透之折、御光駕所希〔 〕御覽後、直ニ御投火可被成候、早々不具

神な(カ)月十六日

盛嶋様 四本

〔 〕極々秘密被成度相成〔 〕事故、尚又他口御無用口御座候、以上

同十八日

一右通手紙被遣候付、盛嶋親方参上、作増之儀、向々江吟味申渡口候処、未出揃不申、今程何分治定難成、将又御内用向茂未評決不致候間、今暫被召延度申上候処、早目吟味相片付申出候様被仰聞候事

同十九日

一羽地王子・座喜味親方・与那原親方・盛嶋親方 御 前参上、左之事書奉備 上覧、孫左衛門殿・伝兵衛 殿江差出候様仕度旨、奉伺相濟候事

一江戸立為手当先規之通旅方蔵役兩人、書役一人、其外手伝等当夏上国申付、右人数夏運送船江乗船、及兩度那覇川致出帆候得共、順風不相続乘戻り致越年、右付而者、江戸立手当口至極差支相成申候事

一御糸船兩艘・古米船一艘・運送船、右四艘向江館内蔵方届、江戸立口砂糖・諸反物等茂積入有之候処、難船ニ而長々之船中殊致越年候而者、砂糖茂古砂糖相成、位相劣候故、重而積出茂相調不申、且諸反物口シミ入虫入等ニ而、是又調替相成候品多有之、旁手当相違相成申候事

一諸月九日不時大風有之、砂糖黍茂諸作物吹損、右付 而者、来春之頃ニ至世上取続方可及難儀者勿論、砂糖出来高茂格別相減可申与心配仕事御座候

一天明六年、就 御代替江戸使者立之儀、翌々年申年御参府之節可被 召列候得共、当地差廻之砌ニ而、御国元御取計を以 戌年 御参勤之節被 召連度旨、御伺相成、其通被仰付置候事

一享和二戌年国王代替ニ付而、御口使者翌々年子年可被 召列候得共、当冬統方難洪之砌ニ而御内〔 〕を以〔 〕有之候処、寅年 御参勤之節口 召列度旨、御伺相成口通〔 〕仰置候事

同廿日

一盛嶋親方前条之事書并去年江戸立御延之訴訟書写持参ニ而、孫左衛門殿御宿参上、掛御目候処、当年者不順成年柄ニ而、船々致出帆候得共、追風不相続及難船、乗帰、右付而者長々之船中殊越年故、諸反布シミ入虫入、其外諸品茂疵物相成調替無之候而者不相叶、反布者早速両先嶋・久米嶋江差遣、調替を以積越候処、洋中逢大風、一艘者破船、一艘者山原辺迄乗来候処、水船相成皆廢り、今より調替決而不相成、其上蔵役・書役来春早登ニ而茂、諸反物間ニ合不申、琉球調之諸品茂数月を掛ル事ニ而、是又間ニ合不相調、旁以手当及相違候訳筋ニ而無之者、年延之御願不相立、勿論物入沙汰ニ而者謂不相立候間 心得を以吟味可仕旨被仰聞候付、〔 〕江相違、随分吟味可仕立旨御返答〔 〕候事

同廿九日

一孫左衛門殿御宿江盛嶋親方参上仕候処、江戸立年延願之儀、先達而持参之事、然迄ニ而者謂筋不相立候間、猶又疫流行仕、江戸立人数之内多分相煩、正使茂同疫ニ而、上国無覺束体罷成候次第書入候様被仰聞候、右付正使者添相附奉伺相濟候付而ハ、正使差支之節者、添より上国仕候筋ニ而謂立兼候段申上候処、其意味合江戸表ニ者不相知、却而宜謂ニ茂可相成候間、其通取計候様被仰聞候付、撰政申談、何分御返答仕度旨申上候処、此段者差図之事候間申談ニ不及、其通可取計旨被仰聞候、右付訴訟之地案相調可懸御目候間、御都合之所者御添消被成下旨申上候処、文面者格式有之事ニ而取直ニ不及、謂筋者添消可仕候被仰聞候事

一先達而古船一艘取仕立、為致破船候筋申立候様被仰候付、段々相考候処、船口仕立迄者随分取計可相成候得共、為及破船ニ候所者船中人数江口不申聞候而者不罷成候処、其通ニ而者外ニ難相付、御内用相洩候次第ニ茂可相成哉、無心元段申上候処、此儀取止候様可仕旨被仰聞候事

一砂糖作増一件ニ付、喜舎場親方・譜久村親上江御用掛申付置候処、何歟ニ付差支之儀有之候間、日帳主取羽地里子親上・小録親上江茂御用掛申付度旨、御相談仕候処、弥其通可然由被仰聞候、右付翌十二月朔日、羽地・小録初而御見舞仕候事

一砂糖作増之儀、去年茂被仰渡候処、御当地之儀、此跡江戸立冠船莫太之御物入有之、砂糖焼重申付、諸郷一統疫入至極及難儀、向々歎訴申出候付、砂糖減少申付、折角取救之砌、頃年無類之災変打続、猶更百姓及極窮候故、右成行を以作増御断申上候処、御取揚無御座、於今般者態々御使者被差下〔 〕御趣意之程分ケ而被仰渡候付、十五人其外掛り中江吟味申渡候上、得与申談候処、御当地之儀、砂糖外ニ諸用銀調達之産物無之、専砂糖代を以彼是之差繰乍漸相調来事候付、作増御請申上候而者、段々差支ニ相成可申儀者

勿論、此上作増申付候而者疲労之百姓難立行、差禿候儀案中ニ而御断申上候方ニ、一先為申談事候得共、此節之儀、御使者御渡海 御趣意を以 上様江直ニ被申上、摂政・三司官直談被仰渡、尤百姓禿ニ相成候程ニ作増被仰渡儀ニ而者無之候間、其心得ニ而評議可有之、乍此上其汲受無之候而者 御趣意違背之筋ニ而、屹御取扱も被召替管候段、訳而被仰渡候付而者、御断申上候而茂御取揚無之、何様之御難題登可致出来も難計事候間、一往少々作増申付御請仕以後、時節見合御断申上候方可然□評決仕、左之通事書を以御請申上候事

十二月五日

一羽地王子・座喜味親方・与那原親方・盛嶋親方、里主所迄差越、御在番所江三司官三人参上、折節御奉行御不快付、附役田尻善左衛門殿取次申上候者、明年江戸立之儀、登船々兩艘越年ニ付而者、御反布シミ入虫入、其外諸品濡糜等ニ而旁手当及相違候付、飛舟差立、年延之願申上候様仕度旨申上候処、弥其通被聞召置候段、御返答承知仕候、左候而、御奉行より里主玉城親方ニ付而、砂糖作増等之御用意有之間敷哉、乍御不快些御気色も宜御座候間、於御勝手之間、一刻御逢被成度旨被仰聞、早速参上、掛御目申上候者、砂糖作増之儀、御趣意之程奉汲受〔 〕作増申付候吟味ニ而、今日御請申上候様可仕段申上候処、此儀御奉行ニ茂御世話被思召候処、今通之吟味尤之筋合御悦之段承知仕、里主所へ罷歸候事

一御使者御兩所江羽地王子・盛嶋親方参上仕度旨、御案内させ候処、伝兵衛殿御宿江罷出候様申来、早速参上仕〔 〕者、江戸年延願之書付并聞役在番親方□問合之書付相認置〔 〕御覽被下、御都合之所者御差図を以御添消被成下度旨、御頼申上候、左候而正使差支之訳者、文面御除被成候而者、何様可有御座哉之旨及御相談候処、此儀文言之入所取替候ハ、可宜候間、吟味之上取直、両三日中可差遣旨被仰聞候、尤摂政・三司官願書物之儀、御国元ニ而段々御吟味を以、江戸江被差登〔 〕猶又及御吟味、公辺江御願被仰立御事ニ而、琉球方願書者出不申候間、少も世話ニ及間鋪候、聞役在番親方江之書面者宜相聞得候由ニ而、早速被返下候〔 〕直ニ扣居候事

附、年延之訴訟書并聞役在番江問合書、後条ニ相見 得候故、爰ニ略ス

一右付飛船之儀、来正月申上着無之候而者、江戸表不都合可相成、且又遠路之事候へ者、兩艘ニ而者無心元候間、此節者極々入念三艘差立、□□ニ茂早□□候様、可取計旨被仰聞候事

一右一段之御内用相濟、座喜味親方・与那原親方ニ茂参上仕、砂糖作増御請申上候振合左之通

御国元御所帯方御難渋付、和製砂糖作広被仰付、当地茂少々作増為繰登候様被仰渡、御兩所様御渡海段々 御趣意之程、国王始私共ニ茂委細奉承知、随分 御趣意通行届候様、国王より茂被申付候、地面狭殊ニ当時柄百姓及難儀居候へとも 御趣意奉汲受、来寅年より少々作増候様可申付候、此段御請申上候間、御都合宜様御賢慮被成下度旨、御頼申上候事

一右付百姓及難儀候成行、委細書付差出旨被仰候付、此儀者我々ニ茂其心得ニ而罷在候間、後日書付差上 候様可仕旨、御返答申上候事

一兩条之御内用相濟、緩々仕候様ニ与之御挨拶ニ而、段々御馳走有之、夜五□時分罷歸

候事

同六日

一羽地王子・座喜味親方・与那原親方・盛嶋親方 御 前参上、昨日御奉行所并御使者御  
兩人江、御内用之 兩条御請申上候首尾言上仕候事

同八日

一四本孫左衛門殿・石原伝兵衛殿より江戸立年延之訴 訟書御添消を以、盛嶋親方江手紙  
取添被遣、右手紙 并書付、左ニ記

先日者御出之处、何之風情も不相調、御残多事ニ御 座候、扱書付之儀申談之上取直遣  
申候間、一通ハ別 紙之通清書ニ而、一通者此書付書入、二通を以兩三 日中可被遣候、  
此段得御意候、以上

朧月八日

追而、此間者御約束之品々御恵投被下忝存（カ）候、早速 御厚礼可申上候处、省本意  
候、乍延引御礼申上候

四本孫左衛門

□原伝〔 〕

盛嶋親方様

其上疲疾流行仕、江戸立申付置候者之内、段々相煩追々死失多有之、代役申付候而茂、衣  
服其外唐江注文品而已ニ而、手当相調不申、正使儀茂罹同疲極難症ニ而、是迄段々尽医術  
候得者、得快氣候儀、別而無覚束体ニ成立、一同之疾疾無余儀仕合、不一方災殃故、諸手  
当相違仕、誠以当惑仕、いつれニ茂明年使者

(行間)

右船々越年故、旁繰合相調不申との文言より直ニ其上ニ続ク、本行之事書、右手紙之内ニ  
卷入被遣候也

老通者右之通書入可被成候

口上覚

前中山王隠居当王相統願之通被 仰出、来寅年以使者江戸江御礼可申上旨被 仰渡、正使  
豊見城王子・副使沢岨親方江被仰付候付、如先規旅粧調達之為、蔵役・書役当夏上国申付  
候处、当年之儀、登順風相少ク度々出帆仕候得共、別而不順成手柄ニ而、且風不相続及難  
船乗戻、大和船茂返上物積船・古米船・新米船等都□乗帰、都合六艘及越年、返上物□船  
并蔵役乗船江者、献上之唐布・琉布其外諸品、且行列ニ相掛候備具等積入有之、及越年候  
而者、旁不都合故押而出帆申付、順風見合候处、長々之船中、殊ニ難船懸波等ニ而シミ入  
虫入、且器具類疵物相成申候、両先嶋・久米嶋出産之端布者早速飛舟差遣調替申渡、精々  
来年早仕を以、差登候手当仕、昼夜相働積越申候处、逢大風一艘者慶良間嶋沖ニ而乗沈、  
人命荷物者相失、一艘者読谷山沖迄乗来候处、干瀬江走揚水船相成、人者相助り候得共、  
荷物流失又者濡糜り、重而調替之儀、荒端之嶋々冬海路今更往返茂難叶、唐布者勿論間ニ  
合不申、殊ニ江戸立付而ハ太分成及入価、両三年前方より諸事手当仕、前年館内江繰登、  
諸都合不仕候而者、江戸立難叶儀ニ御座候处、失脚料見当積入、砂糖之儀者右船々越年故



旁繰合相調不申、不一方災殃ニ而手当相違仕、殊ニ当惑仕、いつれニ茂明年使者参府仕候儀相調不申、中山王を始、私共必至与十万ニ暮居申候、依之使者参府之儀被召延候様被仰付被下度奉願候

公辺江御伺濟之上被 仰付置候年柄、右様申上候儀、恐懼至極奉存候得共、非常之災殃差当不及是非奉訴事御座候、此等之趣可然様御取成可被下儀頼存候、以上

丑十二月十二日

盛嶋親方

与那原親方

座喜味親方

羽地王子

北條織部殿

一江戸江御礼使之儀、来年被差上筈候処、旅方蔵役乗船、大和船々兩艘越年、殊ニ度々出帆往返及難船、積荷物相損、江戸御国元江献上進上品等相廢、右外ニ茂差支候儀共有之候付、来年参府之儀者被召口候様、飛舟を以御訴訟申上候、飛舟相届候ハ、御訴訟書被請取、早速北條織部殿入御内見、久馬殿迄茂御内見相濟候而、表向可被差出候、此儀少茂被致油断候而者不相濟候条、飛舟届次第一刻茂早ク可被差出候

一右御訴訟付而者、使者を以可申上儀候得共、不時之海上其儀不叶無是非、飛舟を以申上事候、使者便ニ而無之故、国王書翰茂難差上、御訴訟書物迄を以申上候間、御都合宜被相計候

一右御訴訟相濟次第、早々不被申越候而ハ、至而行兼、至極心配可仕候間、右飛舟之久高嶋人共留置、御返事相下次第一日茂早ク可被差下候

一御願通相濟候得者、来夏便御礼向之儀、早々相伺可被申越候

右申越候、以上

丑十二月十二日

盛嶋親方

与那原親方

座喜味親方

羽地王子

川上直之進殿

伊是名親方

同九日

一前条之通訴訟書二通御取直被遣候付、早速百田半切紙ニ二通り清書させ、箱ニ入切封ニ而、盛嶋親方・与力崎山筑登親口江持シ申候処、御覽相濟、尤訴訟書来辰年被召列との六字相除候而者、同様御座候哉与引札差遣候処、弥相除候様、左之通書面を以御即答有之候事

尚々直記殿方江者極御内用之一筋御申達可被成候、外々江者決而相洩候而者不相濟儀ニ而、此段も申進候書付二通り被遣致一覽候、引札之所被成御除、疲疾等之書付者飛舟より被差上、右相除候一通者品々在番奉行所内見可然、左候へ者、少々書付之趣及相違候得共、我々承届置候付、何ぞ御念遣ニ不及候、委細之儀者御面談申殘候、左候而在番方江差遣之上、弥其通可被致との事候ハ、其成行我々迄為御知可被成候

隴月九日

四本孫左衛門

石原伝兵衛

盛嶋親方

同十日

昨日之書付、在番方江御差出之儀者、今明日中与相考申候、右付自今方之内御差越之筈候間、御出掛ニ一刻御立寄可有之候、内意之趣ニ付口と考付候事茂御座候故、此段態々申越候、以上

臘月十日

盛嶋様 石原伝兵衛

同十一日

一疲疾書入候訴訟書、飛舟より差登候成ニ而、清書申付、摂政・三司官御前参上仕、御使者御差図之次第委細言上仕、右訴訟書奉備 上覽候、左候而飛舟三艘取仕立、早々差登候様可仕段茂奉伺相濟候事

一御在番所御届茂御使者差図通、疲疾相除候書付清書口付、盛嶋親方持下候、尤御在番所江参り掛ケ立寄候様、昨日伝兵衛殿より御書面被遣置候付、一刻参上仕候処、在番方ニ者右訴訟相疑、何哉尋掛茂可有之哉、其儀者両先嶋・久米嶋江者先達而飛舟差遣、諸反布調替積来候処、破船ニ而相廢、手当向相違候訳屹与申立候様段々被仰付、私ニ茂其心得ニ而罷在候段、御返答仕、直ニ御在番所江参上、訴訟書掛御目御届申上候処、何そ六ヶ敷御尋事無御座、差掛り年延者如何候得共、謂筋無拋相見得候付、弥願申越可然由被仰聞候、右付孫左衛門殿・伝兵衛殿江茂、右御届相濟候首尾申上罷登候事

一江戸立延願之訴訟謂筋相考申上候様、御使者衆被仰聞候付、先口事寄を以掛御目候処、右謂筋迄ニ而口此節之訴訟立兼可申候間、疲〔 〕申付江戸立申付置候者〔 〕死失多ク正使〔 〕

難症ニ而、是迄色々尽医術〔 〕得快氣候儀別而無覚束体ニ成立、一同之疲疾無余儀仕合、不一方口殃故、諸手当相違仕、誠以当惑仕、何れも明年使者差登候儀、不相調段書入候様被仰聞候、右付正使者添相附奉伺候付而者、正使差支候節者係より上国仕候筋ニ而謂立兼候間、相除候様段々申上候処、此儀江戸表ニ者相知、却而宜謂ニ可相成候間、其通取計候様、尤此段者差図之事候間、役々吟味ニ不及、屹与書入候様、押々被仰聞候、段々不実成謂筋ニ而折角御断申上候得共、御聞濟無之、訴訟書地案ニ右之意味御添消有之、不及是非、其通書入候事

同十四日

不等之天氣合御座候得共、口御堅栄被成御勤、珍重 奉存候、然口明日飛舟被差立候由、御届有之候を〔 〕清書之〔 〕候故、御都合次第可被差出候、得御意候、早々頓首

十二月十四日 四本孫左衛門

盛嶋親方様 石原伝兵衛

同十五日

一右通訴訟書御内見之筋、御手紙被遣候付、早速清書申付、印押箱ニ入、切封を以評定書寄筆者喜屋武筑登親上、盛嶋親方使之筋ニ而持口入、御内見候処、此通宜有之由、御即答ニ而喜屋武江御返被成候事

一此節飛舟之儀、常式飛舟与者訳合相替候付、随分早着有之候儀可取計旨、御使者より兼々御沙汰之趣有之候付、三艘之船頭召寄来、正月廿日頃者鹿兒嶋到着之心得を以極々可相働旨、日帳主取小録親上より直面〔 〕申渡させ候事

一訴訟書并諸書付竹筒ニ入、筆者主取より〔 〕船頭銘々江相渡、早々致出帆候様申渡候事

同十七日

覚〔 〕

差返候飛舟之儀口、此天氣合〔 〕借船〔 〕右付情及工夫候処、冬海上与申内、当分口若北風強、正月廿日頃迄上着、無覚束存候〔 〕、飛舟与者格別訳合相替候付、水主共被申様口可有之段者、先達而承置口付、聊御手拔〔 〕有之間敷候へ共、重ミ水主ニ而も被申付候得ハ、夫丈ハ口着ニ茂可及儀も難計候間、自然其手数茂有之候ハ、則其通御取計有之度儀与存申候、右式之处、心付無之筈ニ者不存候得共、遅着相成候而者、江戸表不都合可相成事故、為念此旨及御掛合候、此間より不快有之不得拜顔、旁心配御推計被下候、病床罷在、乱筆御仁免所仰候、早々不具

臘月十七日

宜野湾親方様 四本孫左衛門

要用

追而御覽後御投火相願候、努々〔 〕御無用ニ候、以上

同十八日

一右通孫左衛門殿より御手紙被遣候付、宜野湾親方〔 〕飛舟之儀付而者、御世話被口召候得共、此節者常式口訳合相替候付、船頭・水主共ニ茂船柄を撰申付、早着候様段々分而申渡口候付、少も油断者有之間敷鋪〔 〕申付候ハ、夫丈ケ者早着之筋ニ茂〔 〕小振之舟ニ而人数相重候ハ、却而差支相成候故、頭ニ人体見合召置候次第細々申上候付、久高人者と論迄者早々乗渡、夫より海上見合候迄、遅滞ニ及候様茂承り、若其通〔 〕候ハ、江戸表不都合可相成事ニ而、為念及御掛合事候、今通之次第成程落着候段、被仰聞候付罷帰候事

砂糖作増之儀、先達而御受被申、地面等之しらへ中候哉、大体之程合者可相分事候、其後否之模様可承口、当時之成行可承候、此段申越候、以上

十二月十八日

四本孫左衛門

騎射場親方伝

譜久村親方殿

同十九日

一右付、譜久村親〔 〕申上候者、砂糖作増之儀、向々江吟味申渡置候処、未出揃不申口程成行 難申上候、追々出残之上、我々内吟味之所者、何分 申上候様可仕

候間、被召延置旨申上罷帰候事

同廿二日

一砂糖作増斤数早々相究、御使者御方江不申出候而者、御不都合相成候付、羽地王子宅江、座喜味親方・与那原親方・宜野湾親方拾五掛り中相揃、吟味仕候処、拾五万斤之内外作増之筋申上候方可然与議定仕候、右付喜舎場親方・譜久村親上・小録親上、孫左衛門殿御宿参上申上□、砂糖作増之儀、疲百姓共過分〔 〕先当分拾五万斤之内外申付、田地方試之上、漸々相重候筋二〔 〕役々内吟味仕候間、其通被仰付度旨申上候処、尤□筋合相聞得、拾五万斤之内外二而者、随分宜有之候段被仰〔 〕究□儀者、田地〔 〕共〔 〕相伺〔 〕何分後日申〔 〕仕旨申上候処、表向議定仕候而より申〔 〕吟味次第二□致反覆、及延引ニ茂事候間、内吟味之所者、先達而可申出旨被仰候付、弥其心得可仕〔 〕返答仕罷帰候事

同廿三日

御国元御所帶方御難渋ニ付、御勤事を茂被為整兼候而〔 〕、乍御氣之毒追々出銀米等も被 仰付候得共、詮立候程之儀も無御座候付、和製砂糖作広候様被仰付候、砂糖之儀第一之御国益ニ候間、厚以 思召、琉球之儀茂砂糖作〔 〕、以前之通取計、精々作増為繰〔 〕候様被 仰付候段、去年被仰渡置候、然処御当国之儀、此跡江戸立〔 〕莫太之御物入有之、多年砂糖焼重申付、夫故諸郷疲入及難儀候付、向々吟味申出、砂糖減少被仰付、折角御取救之砌、去申年以来〔 〕百姓猶又及難儀候故、砂糖作増方御請難申〔 〕、右成行を以、去夏便御断申上候処、御取揚無御座〔 〕御使者を以無抛 御趣意之程具ニ奉承知、此上重而御断難申上、一統難儀之砌なから作増方より〔 〕達上聞申渡候条、此旨諸間切役々末々ニ至厚汲受、精々作増候様申付、其首尾可申出旨、田地奉行江可申渡者也

十二月廿三日

三司官

御物奉行

覚

砂糖作増方段々被仰渡□承知仕、三手役々召列、各構間切々々江差越、御国許より被仰渡候 御趣意、役々末々迄具為奉承知候、左候而村々人居并地面之様子等致見分次第作増□申付候処、疲百姓共当分之砂糖高さへ過分之引負ニ而、諸作式差〔 〕納物相滞難儀仕事候処、此上作増被仰付候ハ、何共難相立段、色々歎訴申出候、然共適訳而被仰渡候事〔 〕々申付、〔 〕三年〔 〕作〔 〕夜漸々□三万斤作御座候、今四五万斤茂相重、作増候様精々吟味仕候得共、全体地面狭、殊近年災変等ニ而極々疲入、年貢を茂相滞難儀仕候儀者、実ニ前文申出候通之成行候得者、此上押々申付候而茂、決而相調不申吟味□御座候、引帳相添、此段申上候、以上

十二月廿八日

田地方

寅正月七日

一作増砂糖斤数并御買入代鈔之儀、田地奉行より諸間切□々共□吟味仕申出候付、内吟味之趣書付相調、喜舎場親方・譜久村親上〔 〕持参ニ而、孫左衛門殿・伝兵衛殿御銘々

□差上、御内談仕候処、御取置得与御吟味□□、重而御申談可被成由被仰聞候、内吟味之事書、左ニ記

附、御在番所江者内吟味之□書、里主玉城親上持参 を以、御内々掛御目候也

一砂糖作増方斤数之儀、田地方〔 〕引当寅 年〔 〕拾五万斤内外者押々申付候、〔 〕候 □、其通被仰付度奉存候事

一砂糖代鈔之儀、百斤ニ米五斗宛凡□被仰付度旨、諸 間切申出候間〔 〕被仰付、年々出物御米之内より御引合被仰付度奉存候事

一砂糖者、於砂糖座御国船頭共相請取、於大和御物江 納方船頭□被仰付度奉存候事

一右運賃者新米〔 〕 奉存候事

寅正月

覚

一砂糖作増方段々被仰渡承知仕候、諸間切役々召寄、御趣意之程具ニ為奉承知、作増斤数吟味為仕候処、当時百姓〔 〕難儀仕候而、飯料作出口当地〔 〕、多分之斤数作増候儀相調不申候間、斤数者成長ケ御減少被仰付

〔 〕全体地面□殊近年災変等ニ而、極々疲入年貢を茂相滞、難儀仕候儀と〔 〕ニ申出口通之成行候得者、斤数之儀、〔 〕斤程被仰付度奉存候

一作増砂糖代鈔之儀、砂糖百斤〔 〕米五宛 凡代米被成下度、〔 〕申出候付吟味仕候処、砂糖焼出方諸雜費相考候得者、右当り之代米〔 〕不被成下候而者、百姓可及迷惑候間、其通被仰付度奉存候

右之通諸間切役々相糺吟味仕候間、此段申上候、以上

以砂糖焼出雜費等相添差上申候

寅正月

田地方

(行間)

雜費書者、御物奉行方江相見〔 〕

覚

未年

鈔三百貳拾貫文

丁鈔ニ沔六貫四百文

申年

〔 〕

酉年

一同三百貳拾老貫文

同六貫四百文

戌年

一同貳百貳拾貫文

同四貫四百文

亥年

一同三百貳拾貫文

同六貫四百文

子年

一同百六拾貫文

同三貫貳百文

丑年

一同百七拾貫文

同三貫四百文

ノ千七百三拾貫文

丁鈔ニ汙三拾四貫六百文

平ニ汙

貳百四拾七貫百四拾文

丁鈔ノ四貫百四拾三文

寅正月

砂糖座

覚

米貳斗五升宛

代鈔百拾貫文

老石ニ付四百四拾貫文

右近年仕上せ立代大概如斯御座候、以上

寅二月

仕上座

喜舎場親方

譜久村親上

小祿親方

右御用之儀有之候間、明後廿九日、四本孫左衛門所江被差越候様可申遣候

正月廿七日

築地半次郎

里主衆

同廿九日

一右三人、孫左衛門殿御宿参上仕候処、砂糖代米之儀、五斗ニ而者高直ニ口相見得候間、

今一往致吟味候様被仰渡候付、掛之向々江猶又〔 〕罷帰候

一〔 〕相認候〔 〕候処、適分ケ而御内談之趣承〔 〕、

其取計無之候而者、御都合相口不仕候間、四斗ニ相下ケ可然哉、其分ニ〔 〕諸間切

何ぞ迷惑不相成段、田地方申出趣も有之候間、其通致御相談旨、御物奉行・申口申出候

付致相談、四ツニ相下ケ、喜舎場親方を以為致御内談候処、得与御考御返答被成答之段、

承知仕、罷登り候御事

二月八日

宜野湾親方

右明九日、御用之儀有之候間、被差越候様可申遣候 事

二月八日

別紙之通、四本孫左衛門所江御差越候様可被相達候、以上

二月八日

築地半次郎

御物城衆

同九日

一右付、四本孫左衛門殿御宿〔

〕

候而不叶候間、飛舟壹艘早々〔 〕有之候様可 □渡旨被仰〔 〕候付、其手当可仕段申上罷帰候事

同十日

宜野湾親方

右御用之儀有之候間、今明日中在番所江可被罷出差 合等、〔 〕三司官之内〔 〕可被差出旨、在番奉行被申聞候

右之通被申聞候間、早々可被申越、此旨申達候、以上

二月十日

谷村半左衛門

御物城

一右付、宜野湾親方御在番所参上仕候処、此内帰帆之飛船便□御用被仰渡、急ニ御返答不申上候而不相濟候間、飛舟壹艘早目取仕出有之候、〔 〕可申渡旨被仰下候付、其手当可仕□申上罷登候事

本文飛舟之儀、江戸立年延願一件〔 〕御届

〔

〕

被仰渡趣有之、右御用之由承候也

一右付、飛舟壹艘早々取仕立候様可申渡旨、喜舎場親方江相達候事

同十四日

此節飛舟立之儀、一艘ニ而可然〔 〕、先日御達申置候処、其後吟味之趣有之、三月中□いつれ不致到着候而者不都合□成候間、猶又船方江被成吟味申渡、海上之儀茂弥三月中到着之段者難申出筈候得共、一艘〔 〕受合同前之趣申出候ハ、是迄之通〔 〕宜敷候得共、二艘之筋ニ候得者、丈夫之趣申出候ハ、早々〔 〕艘御□当可有之候、是迄何敷都合茂宜敷事候〔 〕及不都合候而者、屹不相成訳之儀ニ候条、明日中何分船方吟味之趣書付を以可致承知候、旧臚之飛舟三艘□追□慥ニ相届候、涯々之事ニ而、別而慥□向ニ者相見得候得共、□つれ海上之儀ニ候得者、万一之儀茂難計面〔

〕

二月廿四日

石原伝兵衛

宜野湾様

同十六日

一右通有之候付、久高嶋之者□吟味申渡候上、いつれ も致相談、喜舎場親方を以、伝兵衛殿江左之通御返 答仕候事

此節被差上□飛舟一艘ニ而可相濟段、承知仕居候処、猶又御吟味之趣有之、被仰下趣承知仕、船方共江吟 味□申渡候処、一艘ニ而者可相濟候得共、海上之事 候得者、万一之儀者難計、二艘被差立〔 〕丈夫 □段申出候付、弥今一艘早々手当仕候様申添、〔 〕 此段申上候、以上

二月十六日 宜野湾親方

一右付、今一艘急ニ取仕立候様、御□奉行江相達候事

同廿八日

宜野湾親方

[  
 ]

以上

閏三月廿八日 築地半次郎  
里主衆

同廿九日

一宜野湾親方・四本孫左衛門殿御意参上仕候処、薨金抜荷之儀ニ付、久馬殿より被仰越趣有之候間、取締向吟味を以申出候□、且交易砂糖一件付而茂被仰越趣有之候得共、此儀□在番奉行より委曲承、致首尾方候□被仰下候付、其心得可仕段申上罷□候事

閏四月廿日

本文、又四月廿日宜野湾親方持下、四本孫左衛門殿御宿参上、直ニ差上候事  
当地出産之薨金抜荷之聞得有之候間、取締方可入念旨被仰渡趣承知仕、羽地王子并同席中ニ茂相達〔 〕、右一件ニ付而者、先達而、唐物御役□衆より茂被仰渡趣有之、国中□締□度〔 〕を以申出、〔 〕御役々衆江首尾申上置候、〔 〕猶又右通被仰渡候付、精々吟味仕、細密 取締申渡置候、此段申上候、以上

四月廿日 宜野湾親方

一右御奉行并四本孫左衛門・石原伝兵衛、此節御帰帆ニ付、今日座喜味親方・与那原親方・宜野湾親方〔 〕御前参上、砂糖作増御請書物一通、且国中一統疲入、砂糖作増方存分不相調趣、委細之成行申上候書付一通、且右付御帰国之上、琉球実々困窮之成行宜被仰上度御頼申上、摂政・三司官より品物差上候様被仰付被下度、品立書一通取添奉備上覽相濟候付、即日三人共罷下り、孫左衛門殿・伝兵衛殿得拝顔、御請□并成行書取添差上、直ニ御頼申上候事

附

一羽地王子ニ者病氣引入付、御前参上不仕、那覇 江茂〔 〕  
書成行書茂〔 〕記

一古御奉行江者、後日宜野湾親□一人参上、御頼申 上候



御国許御所帶方御難渋付、和製砂糖作広候様被 仰付、当地之儀茂、砂糖作職以前之通作増為繰登候様、先達而被 仰渡趣御座候得共、当地極々難渋付、御用捨願申上候処、此度又々被 仰渡趣承知仕、誠ニ無御抛 御趣意御座候得共、此上御断申上候儀、恐口御座候故、是非 御趣意之程奉汲得候様、国〔 〕被申付、諸間切江申論、当寅年砂糖拾五万斤内外作増申付候、左候而追々作増之儀者猶又吟味仕、何分可申上候、以上和 四月廿日

宜野湾親方

与那原親方

座喜座親方

羽地王子

- 一砂糖之儀、渡唐銀并御館内統断之方江専差向候付、精々作増繰口候得者、然方〔 〕当地全〔 〕少米少分之所者、毎歳〔 〕御米引払候得者、余計米〔 〕故、国中口飯料拾分にして八分者唐芋を以取統、唐芋出来不出来を以、歳之堂〔 〕究候事ニ而、偏ニ唐芋作式第一口候得共、海国大風旱魃不相口、毎度飯料差廻、末々二者蘇鉄等取受給候体御座候
- 一右様之国柄ニ而唐芋作式専ニ仕候故、砂糖者存分作増不相成候付、前方者折角せり詰ニ而、凡七拾万斤定置候処、臨時物入ニ付、館内借銀過分成為返済料連々作増、此跡江戸冠船莫太之入価付而者、館内蔵方届式百万斤迄茂押々申付置候処、荻作之儀、右申上候通飯料作式差障、口口植立より初中後之手入焼出方ニ茂人足太分、其上桶樽（カ）帶竹等之御雜費及過分、旁以百姓迷惑相掛候口冠船相済、追々蔵方届者百五拾万斤ニ相成候得者、猶又重出米料式拾四万斤、右外古米船運賃諸士免砂糖申請口取合、凡式百四拾万斤〔 〕作出有之候事御座候
- 一砂糖萩之儀、大風旱魃痛安有之候処、依年柄者焼出格別相減候所茂有之、其節者外場所余砂糖買入を以相納申事御座候得者格別高料相成、をのつから及迷惑差禿候故、兼而其考を以、砂糖納高より少々余計萩差付不申候而者不叶事御座候、左候而、出来年柄二者蔵方納之外余計有之候故、右を以諸上納物補、且農具又者当用之品々等も買入候振合御座候処、疲労之百姓外ニ助成相成候品無之候故、多分者前広余計砂糖引当を以、現鈔品物等致取替置、砂糖出来之上、相場直成を以返済相渡候向ニ而、乍漸取統来〔 〕御座候
- 一前条申上候通、江戸立冠船付而者、過分砂糖押々申付、外ニ茂多年課役有之候故、国中一統疲入、諸郷身売人及過分、農作不行届口口増口行候〔 〕定式役々外別段〔 〕等差越、折角差引仕事〔 〕来之疲労立直之期茂相見得不申候処、去ル申口より戊年迄災変打統、就中西年二者無比類大風大波打寄候所茂有之、人家其外諸所破損におよひ候得共、其修復も不相調、其上及兩度飢饉ニ而為救、館内才覚を以多分之米差下、救方申口へ共不行届、餓死人及過分、其以来年貢をも相滞、至極難渋仕居申候
- 一右次第付而者可成長省課口口窮民不申候而者、琉国最通不申故、精々其術役々一統碎心魂候得共、蔵方差繰別而難渋之上、臨時物入殊更不時災殃打統、折節被仰渡候御奉公方も涯々難相勤程之時節ニ而、窮民救方不行届、国王始我々至極心痛〔 〕御座候、右之振合ニ而砂糖作増之儀御断申上度、向々段々吟味有之候へ共、格別口 御趣意不奉汲受様〔 〕恐多御座候故、御趣意之程細々申論、別紙之通御請申上〔 〕御座口、

此段申上候

四月七日

□野〔 〕方

与那原親方

座喜味親方

羽地王子

本文目録四人連名中奉書ニ書認、差上候事

覚

一深付蓋茶碗一束充

一錫燂鍋一充 汁七十充 七□□添

一紺地鳴細上布五反充

一紺□細上布五反充

一紬五反充 □白

一縮緬五卷充 紅白

一色紗一本充

一色漢府緞子一本充

一大毛毯三枚充

寅閏四月

五月十六日

一四本孫左衛門殿御乗船、今日四ツ時分御出帆被成候 事

附、委細月日記ニ相見得候也

一石原伝兵衛殿御〔 〕御養生不相叶、今日四ツ時分〔 〕御死去〔 〕事

七月十日

一飛舟帰帆、江戸立年延願通被仰付、来辰年 御参勤之節可被召列旨被仰渡候段、聞役在番親方より左之通問合申来候事

寅七月十日、飛舟之頭西銘〔 〕持下り、即々御書院当座喜味里子親上御取次備 上覽

前国王様御隠居、国王様江御相続被仰付候付、江戸江御礼之御使者当□ 御参勤之節可被召列旨被 仰渡置、如先規諸手当向等御座候□、段々不時之災殃到来、御献上物者勿論、御手当品等都而及相違、〔 〕参府相調不申、去臘飛舟を以年延之御訴訟被仰越候付、御書付早速差出候段者、当春飛舟便より申上度□御座候処、右訴訟之儀、不容易筋□候得共、願之趣無余儀〔 〕不及

〔 〕之節、被召〔 〕

仰渡候段、御到来□、此旨御承知有之、屹与御請被申上越候様可申越旨、今月四日別紙之通、久馬殿御〔 〕表御用人町田少兵衛殿御取次被仰渡□、被達 御聴儀奉存候、右付御請御礼之儀〔 〕之通奉伺置候付、御差図之趣、此節飛舟便申上越候様可仕候得共、最□師□節違相成候付而者、嶋々潮掛ニ而罷渡、何歟疏着仕候哉、其程合相知不申、たとひ当月中致下着候而茂、当年登船々出帆、時節間合候儀、所詮相調申間敷与奉存、右御請御礼之儀、来夏被仰上候様被仰付〔 〕飛舟之儀、早々帰帆申付、右〔 〕相濟候段迄を申越、御請御礼御差〔 〕、此節罷登居候馬艦船之内、当秋早仕出ニ而申越候様仕度、御内意〔 〕奉願候処、願通信濃殿被聞召〔 〕候段、表御用人

上野善兵衛殿御取次〔 〕今日被仰渡〔 〕帰帆申付候、御請〔 〕伺之儀者何分被仰渡次第、当秋早便口申上越候様可仕候、別紙御書付并〔 〕相添、此段御問合申上候、以上

寅六月廿一日

川上直之口

伊是名親〔 〕

安里親〔 〕

羽地王子様

座喜味親方様

与那原親方様

宜野湾親方様

同日、譜久村親上添書を以、那覇役人江差遣、御在番所并唐物方及御届

中山王隠居、中城王子御相続被仰付候付、江戸江御之御使者 御参勤之節、可被召列旨被仰出置、則より唐国江茂相掛如〔 〕諸手当等有之候処、段々不時災殃到来、献上物者勿論、手当品口都而及相違、何れニ茂当秋参〔 〕不相調、無是非年延之儀被申越可有之、不容易筋合候得共願之〔 〕無余儀相聞得、難被黙止被口御願立候処、来々辰年 御参勤之節被召列候様被 仰渡候段申来候、是旨御承知有之、屹与御請御礼被申上越候様、琉球〔 〕聞役江可申渡候

六月

久馬

道光拾年辛寅

御物奉行帳主取 比嘉子親〔 〕

〔 〕 与那覇里子親〔 〕

中城御殿御物 野村〔 〕親〔 〕

〔 〕 屋嘉部里子親〔 〕

世名城親〔 〕

野里親〔 〕

日帳主取 小禄〔 〕

御所帯方御物奉行吟味役 古堅〔 〕

日帳主取 羽地里子〔 〕

御鎖之側 譜久村〔 〕

御所帯方御物奉行 喜舎〔 〕

# 「出物米を以砂糖御買入被仰付候付日記」第 389 号について

上原 兼善

【表題】 大清道光十年庚寅 日本文政十三年 出物米を以砂糖御買入被仰付候付日記

【文書番号】 389 号

【年代】 道光 10・文政 13 (1830)

【作成者・作成部署】 評定所

〔内容〕

薩摩藩は、383 番文書によれば、天保改革の一環として、琉球に砂糖の作り広めを指示し、承諾させたことがわかるが、1830 年（天保元）9 月には、新たに家老川上久馬の名をもって、琉球産砂糖 250 万斤を薩摩藩あての年貢 2700～2800 石をもって買い入れたい旨提案するにいたる。史料はその一件をめぐる薩琉間の交渉記録である。このころ、藩は新銀主を確定すべく、大坂商人と交渉中と思われるから（原口虎雄『幕末の薩摩』、芳即正『調所笑左衛門』）、川上の提案は彼らとの交渉のなかから出てきたものであろう。すなわち、旧来の奄美三島の産糖高のみでは違約のかたちとなり、新銀主の編成が容易にすすまないという、進退きわまった状況のなかから、川上プランは浮上してきた可能性が高い。

川上はこの一件の「取扱方掛」として田尻善左衛門を琉球に派遣するにいたるが、やがて田尻の命によって那覇西村の我那覇親雲上宅に「砂糖会所」が設置され、琉球砂糖の買入れ制は展開されていくことになる。これまで薩摩藩は改革の一環としてどのようなかたちで琉球砂糖に触手を伸ばしていったか明かでなかったが、383 番文書とともにその初期天保改革の具体的な側面を知るうえで貴重な史料といってよい。

〔史料本文〕

出物米ヲ以砂糖御買入日記

一冊大清道光十年庚寅

出物米を以砂糖御買入被仰付候付日記

日本文政十三年

評定所

大清道光十年 庚寅

日本文政十三年

出物米を以砂糖御買入被仰付候付日記

但、御在番所往反之書付、其外委細御物奉行方日記ニ相見得候也

寅十月五日、伊是名親方持下備

上覧

此節三都就改革、当年より砂糖御買入被仰付候処、右斤高連年相円（カ）候処不容易、右付而者、大坂表御銀主中江御異約之筋ニ茂相成、永続御融通之道茂不相立候付、琉球砂糖正式百五十万斤御買入ニ付而者、過分ニ斤高不容易事候付、琉球年貢出物米之内、何そ之

返代等ニ差引、現米年々石数不同者有之候得共、凡壺ヶ年式千七八百石程茂可有之、右見賦を以、来卯年より一往於琉球砂糖御買入被仰付候、右付而者、現米引替御買入相当候得共、米売実熟之依程合者、船々出帆時節可取後茂難斗候付、砂糖之義者、前広掛役々より致取納置、代料割渡方付而者、琉米壺石八拾目之価ヲ以、正砂糖百斤三拾目直成取究、前文年貢米不及上納、都而居置居直成替を以、作人共江者琉役々計を以可致配当候、依年柄者、砂糖位相劣候砌者掛役々手厚遂吟味、相当之直劣を以御買入可取計候、尤御用分不致都合内者、脇商売屹与差留候、出物新米積船之儀者、夫々支配方へ被仰付置候、船数相究居候付、琉球方渡分三部運賃之儀者自ら有来通可相渡、左候而、前文御買入砂糖積船手当付而ハ、右新米積石之場江砂糖振替積入、差登候様被仰付候旨、別紙之通久馬殿御書付、吉利主馬殿御取次、今月八日被仰渡候、且又、前文通砂糖御買入被仰付候付、田尻善左衛門殿附役兼務ニ而、右取扱方掛被仰付、来々辰辰迄相詰候程被仰付候条、当冬中早々致渡海、当ノ分其御地相詰居候平田直次郎殿相会引受、御買入より船々積出、又者樽数斤目送状附遣候儀、其外前文砂糖方江相拘候儀共綿密行届、諸事在番奉行申談致、取扱候様被仰付候、第一琉球方江相拘候儀故、三司官を始、琉役々之内人柄吟味之上、其御地之応時宜掛人数取究、申渡振等之儀共在番奉行より取計置、其段来夏又者依事ハ、早々飛舟を以成行申越候様被仰付候、御買入砂糖御当地届之上ハ、都而三嶋砂糖惣御買入方掛御役々取扱被仰付候間、御買入之始末、又者船々積入送状等、右役々江宛差遣、双方引合致、御用弁候様被仰付候、前条御買入ニ相拘候手数者勿論、砂糖会所取建、或者出入勘定下支配召仕候儀共、鎖細吟味取調へ申出候様被仰付候旨、是又別紙之通久馬殿御書付、主馬殿御取次被仰渡候、然者砂糖御買入相成候而者、國中必至与及難渋候所より再三被及御断、御買入之儀、作重拾五万斤迄を無是非御請被申上置事候処、此節右通被仰渡、甚存外之次第驚入居申候、此儀永久ニ相拘り不容易事候得者、いつれも細密吟味を尽シ、屹与御模様等承合、久馬殿江得与御内意等申上、何分之儀追而申越候様可仕候、別紙御書付兩通相添、先此段御問合申上候、以上

寅

九月十三日

川上直之進

伊是名親方

安里親方

座喜味親方様

与那原親方様

宜野湾親方様

御在番所并唐物方御届済

琉球館閣役

在番親方江

右者、此節三都就御改革、当年より砂糖御買入被仰付候処、右斤高連年相円候処不容易、右付而者、大坂表御銀主中江御異約之筋ニも相成、永続御融通之道茂不相立候付、以来左之通被仰付候

一琉球砂糖正式百五拾万斤御買入付而者、過分ニ斤高不容易事候付、琉球年貢出物米之内、何そ之返代等ニ差引、現米年々石数不同ハ有之候得共、凡壺ヶ年式千七八百石程茂可有

之、右見賦を以、来卯年より一往於琉球砂糖御買入被仰付候、右付而者、現米引替御買入相当候得共、米売実熟之依程合者、船々出帆時節可取後茂難計候付、砂糖之儀者前広掛役々より致取納置、代料割渡方付而者、琉米壺石八拾目之価を以、正砂糖百斤三拾目直成取究、前文年貢米不及上納、都而置居直成替を以、作人共江者琉役々計を以可致配当候、依年柄者砂糖位相劣候砌者、掛役々手厚遂吟味、相当之直劣を以御買入可取計候、尤御用分不致都合内者、脇商売吃与差留候

一出物新米積船之儀者、夫々支配方申付置候、船数相究居候付、琉球方渡方三部運賃之儀者、自ら有来通可相渡、左候而、前文御買入砂糖積船手当付而者、右新米積石之場江砂糖振替積入、差登候様被仰付候、右之通被仰付候条、三司官江茂申越候様可申渡候

九月

久馬

右同

#### 田尻善左衛門

右者、此節三都就御改革、琉球砂糖式百五拾万斤御買入被仰付候処、右斤高連年相円候処不容易、右付而者、大坂表銀主中江御異約之筋ニ茂成立、御融通之道も不相立候付、琉球年貢出物米之内、何そ之返代等ニ差引、現米年々石数不同ハ有之候得共、凡壺ヶ年ニ式千七八百石程ハ可有之、右見賦を以、来卯年より一往於琉球砂糖御買入被仰付候付、附役兼務ニ而右取扱方掛被仰付、来々辰春迄相詰候様被仰付候条、当冬中早々致渡海、当分彼地相詰居候横目平田直次郎相会引受、御買入より船々積出、又者樽数斤目送状付遣候儀、其外前文砂糖方江相拘候儀共綿密行届、諸事在番奉行申談致取扱候様被仰付候、第一琉球方江相掛候儀故、三司官を始、琉役々之内人柄吟味之上、波地之応時宜掛人数取究、申渡振等之儀共在番奉行より取計置、其段来夏又者依事ハ、早々飛船を以成行申越候様被仰付候

一御買入砂糖御当地届之上者、都而三嶋砂糖惣御買入方掛御役々取扱被仰付候間、御買入之始末、又者船々積入送状等、右役々江宛差遣、双方引合致、御用弁候様被仰付候

一前条御買入ニ相拘候手数者勿論、砂糖会所取建、或者出入勘定向下支配召仕候儀共、鎖細吟味取しらへ申出候様被仰付候

右可申渡候

九月

久馬

十月七日

一御在番所より宜野湾親方御用有之、今日参上仕候処、来卯年より出物届米を以、砂糖御買入被仰渡候付、掛被仰付候段御演達、左之御書付被相渡候付、罷登、翌々九日、右御書付御書院当御取次備

上覽候事

来卯年より於琉球出物届米を以、砂糖御買入被仰渡候付、御方江掛被仰付候、右付而者、掛琉役々人柄致吟味可被申出候、尤御買入ニ付而者、前広より手当相掛儀も可有之、初発之儀ニも候間、万端無手拔様取扱可有之候、左候而、申渡無之儀迎茂氣相付候儀者、諸事不差置可被申出候事

十月

本文之通、御在番所より被仰渡候段、那覇筆者差遣申出有之候付、御鎖之側譜久村親雲上ニ而遂披露候、尤達上聞候儀者、後条ニ相見得候也

里主

御物城江

来卯年より於琉球出物届米を以、砂糖御買入被仰渡候付、首里掛役々等江御用掛合、又者那覇中御用向之儀御方兩人引受致、御用弁候様可被相勤候、右ニ付而者、前広より手当相掛儀者勿論、何そニ付申渡無之儀逆茂、氣相付候儀者諸事可被申出事

寅

十月十七日

同十九日

一砂糖御買入被仰渡候付、掛琉役々人柄致吟味申出候様、先日御在番所より宜野湾親方江被仰渡候付、左之人数江掛り被仰付被下度旨、棉紙切紙ニ書付、今日摂政・三司官御前参上奉伺、相濟候付、翌廿日右之人数名面書を以、御鎖之側譜久村親雲上持下、書役河野郷兵衛殿取次、御在番所御届申上、相濟候事

附

一里主御物城ト者、御在番所より掛口仰付置候段、本文御伺之砌達上聞候也

一御在番所江者、名〔面書〕者廿日之日付ニ而候也

覚

本文帳主取名前之儀、御奉行	喜舎場親方
より御相談之趣有之、名前切	御物奉行方
札を以、喜舎場親方より差上候也	帳主取
御物奉行方	同筆者二人
	加勢筆者五人

寅

十月十九日

一右人数之外、左之通掛被仰付度、いつれも致吟味、譜久村親雲上より御座御案内申上、相濟候、尤達

上聞候儀、又者御在番書御届等ニ不及候事

覚

仮手代式人

御用聞掛口

下遣式人

十月十九日

十一月二日

一今日、御在番所江摂政羽地王子、三司官宜野湾親方御用付参上仕候処、御奉行町田平殿、唐物方御口口高田尚五郎殿、松崎平左衛門殿出張ニ而、御奉行より渡唐船作広メ一件御演達有之、右仰渡御書付被相渡、尚五郎・平左衛門殿ハ引取、猶又御奉行より琉球出

物米を以、砂糖御買入被仰付候段御演達、右仰渡御書付被相渡候付、罷登、翌三日御前  
参上、右両通之御書付備

上覽候事

但

一右仰渡御書付、左ニ記

一渡唐船作広一件之御書付者、前段其日記ニ相見得候付、爰ニ略ス、琉球砂糖式百五拾万  
斤御買入被仰渡置候得共、琉球方者勿論、諸向一統可及難渋趣相聞得、無余儀御仕向被  
相替候儀者、別段被仰渡置候通、右付而者、琉球出物米を以砂糖御買入、毫ヶ年分宛致  
全備候、余分之儀者諸人交易心次第ニ而、右自物砂糖荷主計繰登より砂糖蔵掛物上納之  
上、現樽被相渡候儀共、都而以前之通被仰付候条、在番奉行初掛役々、前文御買入砂糖  
取取扱合等微細吟味を詰、万端都合能可被取計事

砂糖御買入方、今日より西村我那覇親雲上宅江、会所被相建候段、致承知候間、此段致  
御問合候、以上

十一月十三日

瀬名波親雲上

小禄親雲上

御鎖之側御方

右之通申来候間致問合候、以上

十一月十四日

摩文仁親雲上

御物奉行

砂糖御買入方、一昨日より西村我那覇親雲上宅江、会所被相立候段被申越紙面相達、遂  
披露、御物奉行江茂相達置候、此旨及返答候、以上

十一月十五日

譜久村親雲上

里主

御物城

砂糖御買入ニ付、会所并蔵々為見締、別紙之通掛被仰付、勤星之儀者、御用昆布・海人  
草、牛馬皮番同様被成下度旨、平田直次郎殿、田尻善左衛門御申出有之候間、何分ニ茂  
被仰付度、別紙取添、此段致御問合候、以上

十一月廿二日

瀬名波親雲上

小禄親雲上

御鎖之側御方

阿波連筑登之

田頭筑登之

照喜名にや

与座子

渡喜敷にや

田頭筑登之

崎山子

賀根村子

糸数筑登之

崎浜筑登之



久米村嫡子  
賀根村筑登之

右者、砂糖御買入ニ付、会所番并蔵々見締旁として掛ニ而相勤候様、御取計有之度、尤勤向之儀者、我々より差引可致候、此旨申達候、以上

附役

田尻善左衛門

寅

横目

十一月

平田直次郎

里主

御物城

本文日帳主取摩文仁親雲上ニ而、御座印押渡候  
覚

若狭町村嫡子

阿波連筑登之

同村嫡子

田頭筑登之

同村次男

田頭筑登之

東村三男

糸数筑登之

同村次男

崎濱筑登之

久米村嫡子

賀根村筑登之

同村嫡子

賀根村子

西村嫡子

与座子

東村三男

崎山子

西村嫡子

渡賀敷にや

東村嫡子

照喜名にや

右、砂糖御買入会所并蔵々見締番被仰付可被下候、以上

寅

十一月廿三日

瀬名波親雲上

小禄親雲上

本文御物奉行・申口双方役寄江為致問合申候

砂糖御買入付、会所并蔵々内見締掛り人被仰付、勤星之儀者、昆布・海人草、牛馬皮番  
同様被成下度旨、平田直次郎殿、田尻善左衛門殿御申出有之候間、何分ニも被仰付度、別  
紙取添被申越、紙面相達、遂披露候処、弥御申出通被仰付候間、此段及返答候、以上

附、別紙おかす書御印押差返申候

十一月廿三日 摩文仁親雲上

里主

御物城

砂糖御買入会所并蔵々見締番崎濱筑登之御断付、代并重被仰付度旨、別紙之通御買入方御  
役々衆御申出有之候間、其通被仰付度、別紙両通取添、此段致御問合候、以上

十一月廿八日 瀬名波雲上

小祿親雲上

御鎖之側御方

東村嫡子

新垣筑登之

久米村嫡子

糸数筑登之

右者、砂糖方会所并蔵々見締番崎浜筑登之御断申出候、且老人者及不足候間、右式人江番  
人被仰付候様、御取計有之度候、此旨御問合申達候、以上

十一月廿七日 田尻善左衛門

平田直次郎

里主

御物城

本文日帳主取棚原親雲上二而、御座印押渡候  
覚

東村嫡子

新垣筑登之

右崎濱筑登之病氣御断付代

久米村嫡子

糸数筑登之

右重

右、砂糖御買入方会所并蔵々見締番被仰付可被下候、以上

寅

十一月廿七日 瀬名波親雲上

小祿親雲上

砂糖御買入方会所并蔵々見締番代并重被仰付度旨、御買入方役々衆御申出有之候間、其通  
被仰付度、別紙両通取添被申越紙面相達、遂披露候、此旨及返答候、以上

附、別紙おかす書御印押差帰候

十一月廿八日 棚原親雲上

里主

御物城

此節、御下被成居候御役々衆并足輕、宿主共より当年御合力米前寄を以被成下度旨、別紙之通願出有之候間、渡方被仰附度、此段致御問合候、以上

十一月廿八日

瀬名波親雲上

小祿親雲上

御鎖之側御方

口上覚

乍恐申上候、私共居宅之儀、今般唐物方御役々衆足輕、又者重御附役御宿被仰付、相勤居申事御座候間、何卒当年御合力米前寄を以被成下度、奉願候、此旨宜様御取成可被下儀、奉願候、以上

寅

十一月

原田尚助殿御宿主

西村 大城にや

□田休兵衛 同村

大城筑登之

田尻善左衛門殿御宿主

□村 新垣筑親雲上

松崎平左衛門殿御宿主

西村 岸本里子親雲上

右之通願出有之候段、那覇役人申出候付、遂披露相濟候旨、例之通渡方可被申渡候、以上

寅

十一月廿九日

棚原親雲上

御物奉行

此節、御下被成居候御役々衆并足輕、宿主共より御合力米前寄を以被成下度旨申出之書付取添被申越、紙面遂披露、御物奉行江渡方相達置候、此旨及返答候、以上

十一月廿九日

棚原親雲上

里主

御物城

本文地案棉紙切紙ニ書付、十一月十五日撰政・三司官

御前参上備

上覽相濟候付、中奉書半切ニ清書申付、十二月廿三日三司官御在番所参上之砌、直ニ差上候也

琉球砂糖式百五拾万斤御買入被仰渡置候得共、琉球方者勿論、諸向一統可及難洪被聞召上、無余儀御仕向被相替候儀者、別段被仰渡置候通、右付而者、琉球出物米を以砂糖御買入、一ヶ年分宛致全備候、余分之儀者、諸人交易心次第二而、右自物砂糖荷主計繰登より砂糖蔵掛物上納之上、現樽被相渡候儀共、都而以前之通被仰付候条、御在番奉行始、掛役々衆前文御買入砂糖取扱位合等微細御吟味を詰、万端都合能被取計候様、被仰渡趣承知仕、国王江茂申聞候、右付而者、仰渡之趣奉汲得、御用高全相調候様、精々尽吟味、向々江茂嚴密申渡候、此段申上候、以上

寅

十二月

宜野湾親方

与那原親方

座喜味親方

羽地王子

砂糖御買入方会所并蔵々見締番、当分之人數二而者及不足候間、別紙おかす書之通重被仰付度旨、御買入方御役々衆御申出有之候間、其通被仰付度、此段致御問合候、以上

十二月

瀬名波親雲上

小祿親雲上

御鎖之側御方

本文白帳主取棚原親雲上二而、御座印押渡候

覚

東村次男

鏡平名筑登之

若狭町村三男

糸数筑登之

東村嫡子

我那覇筑登之

泉崎村次男

糸数子

久米村嫡子

渡久地子

東村嫡子

新垣子

右、砂糖御買入方会所并蔵々見締番被仰付可被下候、以上

寅

十二月十七日

瀬名波親雲上

小祿親雲上

砂糖御買入方会所并蔵々見締番、当分之人數二而者及不足候間、別紙之人數重被仰付度旨、御買入方役々衆御申出有之候間、其通被仰付度、別紙おかす書取添被申越、紙面相達遂披露候、此旨及返答候、以上

附、別紙おかす書御印添差返候

十二月廿九日

棚原親雲上

里主

御物城

卯

二月朔日

一今日、御在番所江宜野湾親方御用之段、兼而御物城付而御問合有之候付、參上仕候処、

横目平田直次郎殿、重附役田尻善左衛門殿江茂被致出席、砂糖御買入付、御用取扱掛并  
取納方勤人数之儀、先達而琉球方より人柄見合被申付、御在番所江者御届迄申上置候得  
共、御在番奉行より被仰付候筋相心得候様御演達、左之通両通之御書付被相渡引次、猶  
又右人数之内□□親雲上以下之役々交代ヶ間敷有之候而者差支候間、随分右通ニ而精勤  
有之候様、尤転役、又者御断等申出候節者、御在番奉行被聞召届候上被差免、左候而跡  
代役之儀茂、人柄取しらへ申出候ハ、御在番奉行より被仰付候条、以来首尾方無間違  
様、可相心得旨御演達、左之通御書付被相渡候事

	喜舎場親方
物奉行方帳主取	比嘉筑親雲上
右同書役	渡嘉敷里子親雲上
	比屋筑親雲上

右、御買入砂糖方御用取扱掛被仰付候

右可申渡候

十月

在番奉行  
大田親雲上

具志川里子親雲上

右、御買入砂糖取納方検者被仰付候

比嘉筑親雲上  
宮城筑登之  
久高筑登之  
大見謝筑登之  
照屋筑登之

右、前条同断加勢筆者ニ而、取納方諸差引并帳面引詰旁之取扱被仰付候条、支配人共引合  
首尾可致候

右可申渡候

十一月

在番奉行

爰許年貢出物米引替、砂糖御買入ニ付而者、第一琉球方江為相掛儀故、三司官を初、琉役々  
之内人柄吟味之上掛人数取究、申渡振等之儀共在番奉行より取計置、其段御届申上候様、  
久馬殿より北條織部御取次を以被仰渡候付、御用取扱掛共、取納方勤被仰付置候人数之内、  
転役等見合有之候敷、又者、何そニ付御断等申出候節者、掛横目并附役方江被申出候ハ、  
在番奉行承届候上可差免候、左候而、跡代役之儀茂人柄取しらへ、前文同様被申出候ハ、  
猶亦吟味之取扱可致候条、以来首尾方無間違様相心得、可承向江茂可被申渡候事

二月

二月廿四日

一今日、御在番所江御鎖之側玉城親雲上御用付、参上仕候处、役々衆御出張、附役黒田猪  
兵衛殿より抜砂糖御取締付、別紙之通此節御到来御座候間、屹与取締可申渡旨御演達、  
則御奉行御添書一通、仰渡御書付一通被相渡候付、同廿六日右仰渡之御書付一通、御書  
院当仲田親雲上御取次備

上覽相濟候付、三月三日取締申渡候、地案玉城持下御在番所并唐物方入御内見相濟候付、

廻文差出候、取締向之次第委細回文帳ニ相見得候事

附、最初玉城御在番所参上之砌、御奉行江者御出席無御座候也

別紙之通被仰渡候間、向々江不洩様可被申渡候、左候而、倭登措船・馬艦船并三嶋沖永良部嶋等江渡海之船々船頭水手之儀者、出帆之節御製法を相守、聊取違不仕旨証書在番所江差出候様可被申渡候、以上

但、水手証書之儀者、一紙連判ニ而、船頭者別紙ニ差出候様可被申渡置候

卯

二月廿四日

在番奉行

拔砂糖取締之儀者、先年以来追々申渡、殊更惣御買入之御趣法被召建候付而者、分而厳密申渡之趣有之候得共、兎角利欲惑ひ候哉、不正之手筋不相止、別而不届之至候、依之向後拔砂糖取企候本人者不依誰人死罪、本人任申同意之もの者、依軽重口キ遠嶋可被仰付旨、屹御規定被相居候条、若此後犯御法候者者、御用捨被仰付間敷候付、御仕置之期ニ至り後悔有之間敷候、人命ニ茂相掛不容易事候者、自然末々ニ至り汲受薄く御製度を破り候而者、乍罪人不便之至候付、前広御製法之次第茂申聞置事候間、此旨奉承知、弥以御法令相守、聊取違無之様、頭人主人等より稠敷可被申付候

右之通与中支配中、其外可承向々江不洩様可至通達候

但、琉球嶋々江茂可被申渡旨、御勝手方江相達、諸郷江者、地頭・領主・大番頭より可被申渡候

十二月

久馬

但馬

丹波

信濃

右之通被仰渡候間、不洩様申渡、其通可被申越候、以上

寅

十二月廿三日

北條織部

琉球在番

町田平殿

四月三日

一今日、御在番所江御鎖之側玉城親雲上御用付罷出候処、御徒目附大山後角右衛門殿、重附役田尻善左衛門殿出張ニ而、壺砂糖御取締并砂糖御買入相濟候上、諸人交易勝手次第被仰付候御書付、別紙両通被相渡候付、罷登候事

附、向々江仰渡之御書付、回文帳ニ相見得候也

別紙式通之通被仰渡候間、向々江不洩様可被申渡候、尤申渡相濟候届可被申出候、以上  
卯

四月三日

在番所奉行

拔砂糖御取締之儀付、先度尚亦分而厳密被仰渡置候付而ハ、向後聊違茂取違之者江者無之積候得共、琉球表之儀、間二者壺詰砂糖繰登候茂有之由候付、右類入計之砂糖假令小壺少斤数たり共、惣而津口通手形付を以可差登、尤山川入津之上者、壺詰砂糖与見受候分ハ、無用捨明改をも被仰付筈候付、其期ニ至出帆差掛、混雜等ニ事寄せ手形取後、無

手形を以積登候筋申陳候而茂無御取揚、別段被仰渡置候通、嚴科ニ可被行事候条、右等之処猶亦一統深取守、屹与無取違様、再重琉球方者勿論、在琉之諸人江茂分而嚴敷可被申渡候、且右

恕

様被仰渡候茂、畢竟諸人後難ニ不望様、專御憐愍之御趣意、今一往拙者共よりも可申越置旨、久馬殿依御差図申達候、以上

三月八日

有川藤左衛門

三原藤五郎

琉球

在番奉行

此節琉球年貢出物米之内、何そ之返代等ニ差引、現米凡壹ヶ年式千七八百石程之賦を以、当卯年より一往於琉球砂糖御買入被仰付候段、去九月細々被仰渡置候通ニ候、右付而ハ、右石数丈御買入相成候、余斗砂糖之儀者、おのつから諸人交易勝手次第被仰付候、左候ハ、自物砂糖仕登者勿論、掛物銀等（カ）何篇以前之通被仰付候条、其段可被申渡候、尤拔砂糖取締ニ付而者、聊たり共密々積登候儀共屹与無之様、猶亦無御抜取締可被申渡候、此旨可申越旨差図ニ而候、以上

卯

二月五日

北條織部

琉球在番奉行

町田平殿

以上

道光十一年辛卯四月

評定所足筆者

玉城里子親雲上

同筆者

親田里子親雲上

同筆者主取

野里親雲上

御鎖之側

玉城親雲上

御物奉行

喜舎場親方

## 「雨乞日記」第 475 号について

山里 純一

【年代】道光 12 年壬辰（1832）

【書誌及び関連情報】

本日記は、『球陽』巻 20 の尚\*水+景頁\* 29 年条に見える 8 月 6 日～8 日の雨乞記事に対応するものである。表題の「雨乞日記 五冊」は、評定所のものが 4 冊と、保管先は記されていないが下庫理と見られる 1 冊からなり、その五冊の中では本日記が最も年代が古い。なお本日記の文中に「於前之御庭御規式之次第下庫理構ニ而、同所日記ニ委ク相見得候事」、「円覚寺・護国寺并社家中より勤之次第、寺社座江右同断」「聞得大君御殿・三平等・那覇・泊・久米村勤之次第、各日記ニ右同断」と見え、下庫理と寺社座にもそれぞれ日記が存在したことがわかる。尚家文書中の同治 2 年と同治 12 年の「雨乞御結願日記」（第 479 号・第 478 号）には、「久米村雨乞御双紙」「久米村雨乞日記」の名称も見えることから、おそらく関係部署ではそれぞれ雨乞に関する独自の日記類が作成されていたと思われる。

【内容】

『球陽』にはこの時の雨乞について比較的詳しく書かれているが、「雨乞日記」によれば、それは主に「言上」部分を抜き出したものであることがわかる。「雨乞日記」には、『球陽』には見えない雨乞に関わる多くの情報が記されている。

例えば雨乞実施までの手続きがわかる。「総役・長史方」に属し暦法のことを掌る通書方で雨乞を実施する日時の日選びが行われ、四つの日選びの結果を、摂政三司官が王の御前に参上し伺いを立てる。王は伺いの通り実施せよと、日選の候補のうちの一つに印（御星）を付けることにより、雨乞の日時が決定されることになっていた。

雨乞では、いわゆる類感呪術（模倣呪術）と言われる、人に水を掛ける儀式があるが、本日記によれば、それがいい加減になされているため、律義に行うよう通達している。

雨乞儀礼の初日を啓建（啓健）、第二日目を中日、そして最終日を満散と称したが、主に啓建と満散における具体的な儀式の様子が記されている。

しかしこの時の雨乞は効験が現れず雨は降らなかったため、15 日から 17 日までさらに禪家（臨済宗）・聖家（真言宗）または社家（神職）による祈念が行われた。その結果、18 日から小雨が降り出し、19 日の九ツ（午前 0 時）から雨が降り続いたという。本日記にはそうした結末まで書かれている

但し、『球陽』には禪家・聖家または社家による祈念のことは見えず、「然れども尚雨ふらず。九月初三日に于て旧に照らして再び雫す。此の日未時（午後 1 時～3 時）雨沢大いに降り、其の雫を廃止す」とある。ということは、本日記の末尾に書かれているように 19 日九ツから降り続いたという雨は早魃の解消にはならない少雨だったのであろうか。

「史料本文」



七月廿九日

一去月以來早魃、諸物作時節を失可申与奉存候間、先例之通雨乞被仰付度旨、日撰書取添、座喜味親方御前參上伺候處、伺之通被仰付候旨奉承知、來月六日御星被下候付、早速言上仕、向々江茂申渡させ候事

附攝政三司官

御前參上奉伺先例候得共、豊見城王子上国、与那原親方・宜野灣親方ニ者阿蘭陀船漂着、那覇江相詰候付、座喜味親方より奉伺候也

覚

一來月六日庚辰巳之時

一同九日癸未巳之時

一同十日甲申巳之時

一同十二日丙戌巳之時

右雨乞御日撰如斯御座候、以上

辰

七月

通書役 仲本通事親雲上

右之通承届申候、以上

辰

七月

長史足 我喜屋通事親雲上  
金城里之子親雲上

謹言上

一來月六日より八日迄、御城御火鉢御前并嶽々御たかへ仕、親方部頭ニシテ三七人ニ而御拜仕、於前之御庭雨乞可有御座事。

一右同聞得大君御殿御火鉢前御たかへ有之、濟而親方部頭ニシテ三七人ニ而御拜仕、且亦於三平等御たかへ仕、親方部頭ニシテ一七人ニ而雨乞之事。

一右同於円覺寺、禪家ニ而為雨乞大盤若御祈念之事。

一右同於護国寺、聖家ニ而雨乞御祈念之事。

一右同於龍王堂・天尊堂、久米村人数大夫頭ニシテ一七人ニ而三日物籠雨乞之事

附啓建満散之時、三司官一人・申口一人・座敷一人・当一人・勢頭一人・里之子一人・筑登之一人ノ七人罷下、久米村・那覇勤人数一所ニ御拜之事

一雨乞初日、久米村爬龍舟龍王致請乘、那覇・久米村役人一人宛諸官親方部頭ニシテ二手ニ差分ケ、一手者豊見城、一手者三司官頭ニシテ天尊堂江參、雨乞之事

一右三日泊并祝部・諸間切雨乞可有之事

一紫八卷者黄八卷、赤八卷者朝衣計

一首里・那覇・泊・久米村・諸間切、雨乞中殺生禁断之事

以上

辰

七月廿九日

右之通、言上相濟候間、諸間切其外首尾係江茂申渡、諸事如例可被相勤候、以上

辰

七月廿九日

仲田親雲上

天願親雲上

小祿親雲上

御物奉行

右之通、言上相濟候間、諸事如例可被相勤候、以上

辰

七月廿九日

上同

御書院

御近習座

下庫理当

同勢頭

寺社座

申口

普請奉行

瓦奉行

聞得大君御殿

大親

豊見城間切

惣地頭

右之通言上相濟候間、首里中・那覇中・久米村中・泊中、不洩申渡、諸事如例可被相勤候、以上

辰

七月廿九日

上同

平等之側

惣役 長史

里主 御物城

泊頭取

一右言上写聞得大君御殿江者写百田紙横折ニ相調、下庫理勢頭ニ而上させ、摂政・三司官江者棉紙半切ニ書付公事拜を以届上させ候事

附三平等大あむしられ江者勢頭方より通達有之候事

来月六日より八日迄雨乞御規式巳之時より相始候間、此段致問合候、以上

辰

七月廿九日

上同

御書院

御近習座

御物奉行

申口  
下庫理当  
同勢頭  
寺社座  
平等之側  
普請奉行  
瓦奉行  
聞得大君御殿  
大親  
豊見城間切  
惣地頭  
惣役 長史  
里主 御物城  
泊頭取

来月六日より八日迄雨乞付、円覚寺并三平等江多人数相集終日勤有之候間、例之通筑佐  
事相詰致下知候様可被申渡候、以上

辰  
七月廿九日 上同  
平等之側

来月六日より八日迄雨乞付、円覚寺・三平等・泊・那覇・久米村多人数相集終日勤有之  
候間、例之通横目相詰致下知候様可被申渡候、以上

辰  
七月廿九日 上同  
寺社座

雨乞之儀大切之御祈願故随分致祈念律儀ニ可相勤之处、先年雨乞之節者水掛候砌戲事之  
様物笑などニ而争共為有之由不敬の仕形、別而如何之儀候間、屹与相慎御祈念相勤候様、  
首里中・久米村中・那覇中・泊中不洩可被申渡旨御差図ニ而候、以上

辰  
七月廿九日 上同  
平等之側  
惣役 長史  
里主 御物城  
泊頭取

下知方可致旨、横目中江堅可被申渡旨御差図ニ而候、以上

辰  
七月廿九日 上同

寺社座

右之通被仰渡候間、可被得其意候、以上

辰

七月廿九日

上同

下庫理当

同勢頭

八月三日

口上言上

来六日より八日迄雨乞付、下庫理出仕御免被仰付被下度旨御書院当御取次達  
上聞相濟候事

辰

八月三日

来六日より八日迄雨乞付、下庫理出仕御免被仰付被下度旨被達  
上聞相濟候間、此段致問合候、以上

辰

八月三日

天願親雲上

下庫理当

同勢頭

御近習座

覚

一来六日啓建之時

与那原親方

一同八日満散之時

宜野湾親方

一同六日啓建并八日満散之時

津嘉山親雲上

右雨乞之時御勤賦如斯御座候間致御問合候、以上

八月三日

御評定所筆者

屋嘉部里之子親雲上

下庫理当

同勢頭

同五日

口上言上

系図座中取 野原親雲上

大与座中取 富村親雲上

国学中取 津嘉山里之子親雲上

同 国頭里之子親雲上

右明六日より八日迄雨乞付、下庫理当人数不足有之候間、足被仰付被下度旨御書院当取次達

上聞相濟候事

辰

八月五日

口上言上

花当 安良城子

同 仲松子

仮花当 本永子

右明六日より八日迄雨乞付、下庫理里之子人数不足有之候間、足被仰付被下度旨御書院当取次達

上聞相濟候事

辰

八月五日

同六日

一啓建ニ付、三司官与那原親方・御双紙庫理津嘉山親雲上以下、座敷・当・勢頭・里之子・筑登之迄一七人、朝衣冠ニ而、五ツ時分罷下、上之天后宮江控居、那覇・久米村役人より暇乞人数書、津嘉山親雲上取次差出候付見届、物籠人数江読経之勤相始めさせ候案内同断有之、右勤相濟、長史より御拝座江着候様右同断案内有之、いつ連茂龍王堂江差越、三司官、手水遣真正面龍王江立御拝ニ而着座、諸官堂内より庭江順々致着候得者、当・秀才より御香・御酒捧参候付、三司官頂之、同人江渡御銘々御前江上させ、諸官一同五ツ御拝仕、親雲上一人罷出、龍王江疏文読上、相濟、いつ連茂乍立三百三拾三拜、又立居之九拜仕、三司官正面庭ニ向候得者、当・秀才、紙炉正面ニ直シ、打紙焼上、疏文捧参候付、三司官請取直ニ焚上、又御銘々江上置候御酒、右当より一盞ニ混入捧参、是又三司官ニ而焼紙之上御祭、いつ連茂五ツ御拝仕、三司官、東表江着候得者、堂内着座之人数、御五水頂、御飾之御菓子馳走有之候事

附 三百三拾三拜之砌、当・秀才より竹之葉ニ而水三度掛、立居之九拜茂右同断

一右相濟、龍王豊見城江請越之御規式段々相濟、いつ連茂天尊堂江差越勤之次第、龍王堂同断、相濟、八ツ過時分登 城、下庫理当御取次首尾言上仕候事

附 三司官以下勤人数朝衣冠、里之子以下朝衣計

三司官以下勤人数、前日下庫理より通達有之候也

勤之次第、久米村雨乞御双紙ニ委ク相見得候也

評定所月番筆者一人、三司官江相附罷下候也

同八日

一満散ニ付、三司官宜野湾親方・御双紙庫理津嘉山親雲上以下筑登之迄一七人、龍王堂・

天尊堂江差越勤之次第、又者首尾言上等、都而啓建同断  
附

一満散二者龍王豊見城江請越之御規式無之候也

一満散二者疏文読上、又者右焚上ハ勤無之候也

一御城御火鉢御前并嶽々江親方部頭ニシテ三七人ニ而御拜相濟、於前之御庭御規式之次第  
下庫理構ニ而、同所日記ニ委ク相見得候事

一円覚寺・護国寺并社家中より勤之次第、寺社座江右同断

一聞得大君御殿・三平等・那覇・泊・久米村勤之次第、各日記ニ右同断

一雨乞中、日帳主取天願親雲上登 城、西之御殿江詰居諸事御用承候事

一於御城雨乞相勤候首尾、三日共勤之親方より下庫理当御取次言上仕候事

一聞得大君御殿并於三平等相勤候首尾、各勤之親方三人登 城、右同断

一中日二者、龍王堂・天尊堂雨乞相勤候首尾、長史一人登 城、下庫理当御取次、右同断

一於円覚寺・護国寺雨乞相勤候首尾、三日共、寺社中取登 城、右同断

一泊中雨乞相勤候首尾、三日共、頭取登城、右同断

同十三日

此間雨乞被仰付候得共、雨降不申候付、明後十五日より十七日迄禪家・聖家又者社家中  
自分ニ而雨乞御祈念仕度旨各書付を以願出候付、願之通被仰付被下度旨、御書院当足喜  
納親雲上御取次達

上聞相濟候事

辰

八月十三日

此間雨乞被仰付候得共、雨降不申候付、明後十五日より十七日迄、禪家・聖家又者社家  
中自分造作ニ而雨乞御祈念仕度旨各書付を以願出候付、願通被仰付被下度旨被達

上聞相濟候間、此段致通達候、以上

辰

八月十三日

田場里之子親雲上

寺社座

同十九日

一禪家・聖家・社家中雨乞御祈念相勤候首尾、寺社中取より申出候事

一一昨日より間々小雨降、今日九ツ時分より雨降続候事

以上

道光十二年壬辰八月

評定所筆者相附 屋嘉部里之子親雲上

日帳主取 天願親雲上

御鎖之側 小祿親雲上

## 「雨乞日記」第476号について

山里 純一

【年代】咸豊拾年（1860）

【書誌及び関連情報】

表題には「雨乞日記 五冊」とあり、年代が二番目に古い雨乞日記である。咸豊10年（1860）11月3日～5日の雨乞の際の評定所の記録である。内題の「雨乞日記」の下に「前以雨降御取止相成候事」朱書きされているように、実施日を待たずに大雨が降ったため、この時の雨乞は中止された。したがって当然のことながら『球陽』その他の資料にもこの時期の雨乞についての記録はない。

【内容】

書かれている内容は、途中までは道光12年の日記とほとんど同じであるが、摂政・三司官の国王御前参上の箇所に、間切で雨乞を行ったが全く雨が降らないため、田地奉行より「公儀雨乞」の申し出があったという文言は道光12年の日記には見えない。

本日記でしか知られない情報もある。すなわち下庫理当・同勢頭への通達文に、先年雨乞の際には、三平等の百姓を一家内より一人の割合で参加させていたが、あまりに人数が多く、争いごとが起きたり、ふざけあうようなことがあったりしたため、道光12年9月の雨乞から、村々の男女年長の者から三七人（21人）を割り当て、男は色衣冠、女も装束を着て儀式に参加させることにしたことが見える。道光12年9月の雨乞とは、『球陽』巻20に「九月初三日に于て旧に照して再び霽す」とある二度目の雨乞いを指す。この時の雨乞は初日の末時に大雨が降ったため、結局は中止されたが、三平等百姓の勤め人数に関する変更のことは『球陽』の記録にもなく、本日記によって初めて知られる。

事前に雨が降り、雨乞は中止されたため、日記も途中で打ち切り、後半は中止に至った結末が書かれている。

「史料本文」

咸豊拾年 庚申

十月廿三日

一此程然々雨降不申、諸物作り時節を後可申与奉存候間、先例之通雨乞被仰付度旨、日撰書取添、譜久山親方・池城親方・与那原親方御前参上伺候処、伺之通被仰付候旨奉承知、来月三日御星被下候付、左之通言上仕、向々江茂申渡候事

但

一摂政三司官

御前参上之筈候得共、大里王子御不快ニ付本文通

一諸間切ニ茂雨乞仕候得共、然々降不申候間、公儀雨乞被仰付度旨田地奉行より茂申出有之候也

覚

一来月三日壬辰午之時

一同四日癸未巳午之時

一同十二日辛丑巳之時

一同十三日壬寅巳之時

右雨乞御日撰如斯御座候、以上

申十月

通書役 上原里之子親雲上

右之通承届申候、以上

申十月

楚南親雲上

名城親雲上

謹言上

一來月三日より五日迄、御城御火鉢御前并嶽々御たかへ仕、親方部頭ニシテ三七人ニ而御  
拜仕、於前之御庭雨乞可有御座事

一右同聞得大君御殿御火鉢前おたかへ有之、濟而親方部頭ニシテ三七人ニ而御拜仕、且亦  
於三平等御たかへ仕、親方部頭ニシテ一七人ニ而雨乞之事

一右同於円覚寺、禪家ニ而為雨乞大盤若御祈念之事

一右同於護国寺、聖家ニ而雨乞御祈念之事

一右同於龍王堂・天尊堂、久米村人数大夫頭ニシテ一七人ニ而三日物籠雨乞之事

附啓建満散之時、三司官一人・申口一人・座敷一人・当一人・勢頭一人・里之子一人・

筑登之一人々七人罷下、久米村・那覇勤人数一所ニ御拜之事

一雨乞初日、久米村爬龍舟龍王致請乗、那覇・久米村役人一人宛諸官親方部頭ニシテ、二  
手ニ差分、一手者豊見城、一手者三司官頭ニシテ天尊堂江参、雨乞之事

一右三日泊并祝部・諸間切雨乞可有之事

一紫八卷者黄八卷、赤八卷者朝衣計

一首里・那覇・泊・久米村・諸間切、雨乞中殺生禁断之事

以上

申

十月廿三日

右之通言上相濟候間、諸間切其外首尾係江茂申渡、諸事如例可被相勤候、以上

申

十月廿三日

大村里之子親雲上

安室親雲上

浦添親雲上

御物奉行

右之通、言上相濟候間、諸事如例可被相勤候、以上

申

十月廿三日

上同

御書院

御近習座

下庫理当



同勢頭  
寺社座  
申口  
普請奉行  
瓦奉行  
聞得大君御殿  
大親  
豊見城間切  
両惣地頭

右之通言上相濟候間、首里中・那覇中・久米村中・泊中、不洩申渡、諸事如例可被相勤候、以上

申

十月廿三日

上同

平等之側

惣役 長史

里主 御物城

泊頭取

一右言上写聞得大君御殿江者百田紙横折ニ相調、下庫理勢頭ニ而上させ、摂政・三司官江者棉紙半切ニ書付公事拜を以届上させ候事

附三平等大あむしられ江者勢頭方より通達有之候也

来月三日より五日迄雨乞御規式午之時より相始候間、此段致問合候、以上

申

十月

上同

御書院

御近習座

御物奉行

申口

下庫理当

同勢頭

寺社座

平等之側

普請奉行

瓦奉行

聞得大君御殿

大親

豊見城間切

惣地頭

惣役 長史  
里主 御物城  
泊頭取

来月三日より五日迄雨乞付、円覚寺并三平等江多人数相集、終日勤有之候間、例之通筑  
佐事相詰下知候様可被申渡候、以上

申

十月廿三日

上同

平等之側

来月三日より五日迄雨乞付、円覚寺・三平等・泊・那覇・久米村多人数相集、終日勤有  
之候間、例之通横目相詰致下知候様可被申渡候、以上

申

十月廿三日

上同

寺社座

来月三日より五日迄雨乞被仰付候段者、別段被仰渡通候間、随分誠敬を尽御祈願可相勤  
候、此以前雨乞之節者水掛候砌物笑杯ニ而戲事之様有之、且道中通行人江水掛龜抹為有  
之由、甚不可然事候条、右様之仕形曾而無之、所々ニおひて雨乞勤人数江水掛候儀茂佐  
法迄ニ而随分律儀相勤候様首里中・那覇中・久米村中・泊中訳ケ而可被申渡旨御差図ニ  
而候、以上

申

十月廿三日

上同

平等之側

惣役 長史

里主 御物城

泊頭取

下知可致旨、横目中江堅可被申渡旨御差図ニ而候、以上

申

十月廿三日

上同

寺社座

右之通被仰渡候間、可被得其意候、以上

申

十月廿三日

上同

下庫理当

同勢頭

先年雨乞之節者三平等共百姓一家内より一人宛罷出相勤、多人数相集候所より争等出

来、戲事之様為有之由候付、道光拾貳年辰九月雨乞之節より、村々男女年長の方ヨリ三七人、男者色衣冠、女茂装束結構ニ仕相勤させ候様、被仰付置候間、此節茂右例之通、向々無間違相勤候様可被相達候、以上

申

十月廿三日

上同

下庫理当

同勢頭

来月三日より五日迄雨乞付、首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内江、惣横目中取相詰、諸事致下知候様申渡置候間、三平等殿内江茂可被相達候、以上

申

十月廿三日

上同

下庫理当

同勢頭

来月三日より五日迄雨乞被仰付候段者、別段被仰渡通ニ候、右ニ付而者、御願御携候面々、三日前ヨリ斎戒沐浴いたし候模ニ而候間、其慎を以、随分丹誠を尽御祈願相勤候様。可被申渡候、此旨御差図ニ而候、以上

申

十月廿三日

上同

御物奉行

下庫理当

同勢頭

平等之側

豊見城間切

両惣地頭

惣役 長史

里主 御物城

泊頭取

○可被相達候、以上

申

十月廿三日

御近習座

同廿三日

一 酉頭時分より間々小雨降候事

同廿四日

一 日中間々小雨入相時分より夜中大雨降候事

同廿五日

一 朝より四ツ時分迄大雨降候事

口上言上

来月三日より雨乞被仰付候様言上仕置候処、雨降申候間雨乞被召留候様被仰付被下度旨  
御書院当伊志嶺里之子親雲上御取次達  
上聞相濟候付、向々江茂申渡させ候事  
申

十月廿五日

以上

咸豊拾年庚申 十月廿五日

評定所加増筆者相附 平敷里之子親雲上

日帳主取 安室親雲上

御鎖之側 浦添親雲上

## 「雨乞日記」第477号について

山里 純一

【年代】同治12年(1873)

【書誌及び関連情報】

表題には、他の四冊の「雨乞日記」に見える保管(作成)先を示す記事は抜け落ちているが、末尾の署名の肩書きから下庫理と推定できる。

『球陽』には、「此の年、七月十八日より二十日まで、十月の十八日より二十日に至るまで、十一月の八日より十日に至るまで、天に告げ雨を禱る」とあるが、本日記はそのうちの七月雨乞に対応する。なお表題の「雨乞日記 五冊」の中では最も年代の新しいものである。

【内容】

内容は、御城、聞得大君御殿、首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内、龍王堂・天尊堂における雨乞い規式について、「前日之公事」と、雨乞当日の「御城二而啓健より満散まで三日共御規式之次第」「聞得大君御殿、首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内二而啓健より満散まで三日共御規式之次第」「龍王堂・天尊堂御勤之次第」が書かれている。全体的な構成は道光二十年「雨乞御代参公事」と似ている。

「前日之公事」では、事前に行うべき事柄について書かれている。例えば、御庭お飾り用の大桶の調達と配置、大桶への水の汲み入れ、水掛け用竹の葉の用意、また首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内における啓健・中日・満散ごとの担当村の振り分けと鼓・大桶の用意、天尊堂と龍王堂へ行く乗用馬の手配、供え物(餅上白米・焼酎)や、日記ならびに諸遣用小文筆と百田紙・芭蕉紙の調達、諸道具(台付き御盃一ツ酒・御玉貫・巢小飯耐かい等)や御願所に敷く御拝筵(ふくる・あだん葉)の準備などである。

「御城二而啓健より満散まで三日共御規式之次第」では、御内原御火鉢の御前での三平等の大あむしられ達によるオタカベ、御庭での御拝、西殿北西の当蔵での大あむしられによるオタカベと御拝、城内の十嶽・そのひやふ御嶽・国中城の御前での御拝というように、王城内の雨乞儀礼の一連の流れがわかる。神歌が謡われる間、勢頭が雨乞歌を謡いながら御拝人数に竹の葉で水掛けをしたことが見える。また雨乞歌も掲げる。

「聞得大君御殿・首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内二而、啓健より満散迄三日共、御規式之次第」では、聞得大君御殿での三平等の大あむしられ達によるオタカベ、御庭での御拝、年配親方による「御すじ之御前」と「御火鉢之御前」の御焼香のことが見える。ここでも雨乞歌を謡い、竹の葉で御拝人数への水掛けが行われる。

なおこの項には「御庭御座配の儀は聞得大君御殿之御願公事に委しく見える」という記事があるが、伊波普猷『古琉球の政治』には、現在所在不明となっている『聞得大君御殿之御願公事帳』より書き写した「御庭御飾の図」が掲載されている。

「龍王堂・天尊堂御勤之次第」では、啓健と満散の日、三司官一行は五ツ時(午前八時)前に上の天后宮に到着し、巳之時(九時～十一時)に龍王の御前へ行き儀礼を行う。その後天尊堂でも同じく儀礼を行い、八つ頭時分(午後二時)に登城、事の始終を言上して退城、という一日のタイムスケジュールがわかる。中日は、三司官の下向はないため、長史が登城し雨乞勤の一部始終を言上することになっている。

なお天后宮へ行く時、下綾門の外で勢頭・筑登上・平等所筆者は騎馬し、上の天后宮門の外の大道で下馬す。龍王堂での御拝が済むと、天尊堂へ行く時、さきほど下馬した所で騎馬し、天尊堂以前の小堀の側で下馬す。天尊堂での御拝が済み、御帰の時は、先ほど下馬した所で騎馬、下綾門の外で下馬するとあり、龍王堂・天尊堂への行き来に際し、馬の乗り降り場所まで書かれている。

「史料本文」

同治拾貳年癸酉七月十八日より廿日迄、御城并聞得大君御殿・首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内・龍王堂・天尊堂ニ而雨乞ニ付、前日之公事

一雨乞之言上写百田紙半折ニ而相調、評定所筆者より勢頭方江被相渡候付、当方御調文箱ニおうけ、勢頭、聞得大君御殿江捧参り、大親御取次差上候事

言上写

一来月十八日より廿日迄、御城御火鉢御前并嶽々御たかへ仕、親方部頭ニシテ三七人ニ而御拝仕、於前之御庭雨乞可有御座事。

一右同聞得大君御殿御火鉢前おたかへ有之、済而親方部頭ニシテ三七人ニ而御拝仕、且亦於三平等御たかへ仕、親方部頭ニシテ一七人ニ而雨乞之事

一右同於円覚寺、禪家ニ而為雨乞大盤若御祈念之事

一右同於護国寺、聖家ニ而雨乞御祈念之事

一右同於龍王堂・天尊堂、久米村人数大夫頭ニシテ一七人ニ而三日物籠雨乞之事

附

啓建満散之時、三司官一人・申口一人・座敷一人・当一人・勢頭一人・里之子一人・筑登之一人々七人罷下、久米村・那覇勤人数一所ニ御拝之事

一雨乞初日、久米村爬龍舟龍王致請乗、那覇・久米村役人一人宛諸官親方部頭ニシテ、二手ニ差分ケ、一手者豊見城、一手者三司官頭ニシテ天尊堂江参、雨乞之事

一右三日共泊并祝部・諸間切雨乞可有之事

一紫八卷者黄八卷、赤八卷者朝衣計

一首里・那覇・泊・久米村・諸間切、雨乞中殺生禁断之事

以上

酉

七月十一日

右之通言上相済候間、諸事如例可被相勤候、以上

酉

七月十一日

宜野湾里之子親雲上

喜屋武親雲上

幸地親雲上

下庫理

一雨乞之言上相済候付、当・勢頭・里之子・筑登之た・仮花当迄出勤諸事手組仕候事

一先年雨乞之節者三平等共百姓一家内より一人宛罷出相勤、多人数相集候所より争等出来、戲事之様為有之由候付、道光拾貳年辰九月雨乞之節より村々男女年長の方ヨリ三七人、男者色衣冠、女茂装束結構仕相勤させ候様被仰付置候間、此節茂右例之通、向々無間違相勤候様可被相達候、以上

酉

七月十一日

喜屋武親雲上

下庫理

右通、被仰渡候間、三平等江可被申渡候、以上

酉

七月十一日

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

平等所

覚

一首里殿内、啓健之日赤田村・当蔵村、中日鳥小堀村・大中村、満散之日崎山村・桃原村。  
一儀輔殿内、啓健之日汀志良次村、中日赤平村・久場川村、満散之日上儀保村・下儀保村。  
一眞壁殿内、啓健之日山川村・大鈍川村・与那覇堂村、中日眞和志村・町端村・立岸村、満散之日寒水川村・金城村・内金城村

右来十八日より廿日迄雨乞被仰付候付、村々百姓男女年長の方より三七人、男者色衣冠、女茂装束結構ニ仕させ、各村地頭宰領ニ而彼ノ殿内々江参り、大桶貳ツ水汲入させ、雨乞相勤候様可被申渡候、以上

附 鼓并大桶貳ツ、賦之村より差出、尤水汲入方茂可被申付候

酉

七月十一日

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

平等所

一来月十八日より廿日迄雨乞被仰付候段者、別段被仰渡通候間、随分誠敬を尽し御祈願可相勤候、此以前雨乞之節者水掛候砌物笑杯ニ而戲事之様有之、且道中通行人江水懸龜抹為有之由甚不可然事候条、右様之仕形曾而無之、随分律儀ニ相勤候様首里中・那覇中・久米村中・泊中・横目中不洩可被申渡旨御差図ニ而候、以上

酉

七月十一日

平等之側 惣役 長史 里主

御物城 泊頭取 寺社座

右之通被仰渡候間、可得其意候、以上

酉

七月十一日

喜屋武親雲上

下庫理当 同勢頭

親方部御三人完三日共五ツ頭時分御登城、同御三人完三日共四ツ時分聞得大君御殿江御出勤被成候様、御触頭江触上候事

言上写

一來月十八日より廿日迄御城御火鉢御前并嶽々御たかへ仕、親方部頭ニシテ三七人ニ而御拝仕、於前之御庭雨乞可有御座事

一右同聞得大君御殿御火鉢御前御たかへ有之、濟而親方部頭ニシテ三七人ニ而御拝仕、且又於三平等御たかへ仕、親方部頭ニシテ一七人ニ而雨乞之事

一同十八日より廿日迄雨乞御規式已之時より相始候事

以上

酉

七月十一日

右通相濟候間、三日共五ツ頭時分登城、御勤可被成候、以上

酉

七月十一日

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

首里殿内 眞壁殿内 儀輔殿内

一雨乞ニ付、御庭御飾之水大桶式ツ様子次第、無遲滯水汲入候様、普請奉行江印紙を以申渡候事

一雨乞付、水大桶式ツ高三尺差渡三尺完御庭御飾用御座候間、結調、前々日此方江寄借有之候様、砂糖座江印紙を以て申渡候事

覚 印/印

来十八日

同廿日

一乗馬式匹形共

一同式匹形共

右雨乞付、三司官天尊堂并龍王堂江御越被成候付、御供之勢頭・筑登之乗用御座候間、馬具結構ニ相備、肩書日限之通卯之時限ニ久慶門江牽參、此方引合有之候様取納座江被仰付可被下候、以上

酉

七月十一日

下庫理

渡久平筑登之



同

上江洲里之子親雲上

御供物左ニ記

- 一 餅上白米壹升八合者                    一 焼酎六合者  
但式行、聞得大君御殿式御前、老日分
- 一 餅上白米貳升七合者                    一 焼酎九合者  
但式行、首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内、老日分
- 一 餅上白米壹斗貳升六合者                一 焼酎四升貳合者  
但式行、御城御火鉢・御当蔵・嶽々・そのひやふ御嶽・国中城御嶽拾四御前、  
老日分

右来十八日より廿日迄雨乞ニ付、御供物用御座候間、役人宰領ニ而御願所御願所江寄候様、大台所江被仰付可被下候、以上

一雨乞付、神歌親雲上四人同勢頭部四人、三日共御賄貳度完印紙を以大台所より請取相渡候事

一小文筆壹本                    一百田紙壹帖貳拾八枚

一はせを紙三帖貳拾枚

右来十八日より廿日迄雨乞付、日記調并諸遣用とシテ御用物座より被下、彼ノ帳面払出申様被仰付可被下候、以上

一神歌親雲上四人同勢頭部四人、三日共五ツ頭前罷登、相勤候様、兼而触渡候事

一來十八日より廿日迄雨乞被仰付候間、そのひやふ御嶽并国中城御嶽御払除結構ニ有之候様構之者江可被申渡候、以上

酉

七月十一日

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

平等所

一御城中御嶽々御払除仕候様、払除下代江申渡候事

一來十八日より廿日迄雨乞ニ付、下庫理出仕御免被仰付被下度旨被達上聞相濟候間、此段致通達候、以上

酉

七月十一日

喜屋武親雲上

右通被仰付候間、此段致御通達候、以上

酉

七月十一日

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

親方部申口座

御触頭

此通御評定所江書出候事

覚

謝花里之子親雲上 上江洲里之子親雲上 花城里之子

渡久平筑登之

右、雨乞方当、面付書如斯御座候、以上

酉

七月十一日

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

騎馬二而袖結

引鞭持袖結

筆者老人

筑佐事二人

来十八日より廿日迄雨乞付、啓健満散兩日共三司官龍王堂・天尊堂江御越被成候間、兩日共御賦之殿内江五ツ頭朝衣冠ニ而罷出御供仕候様、平等所江申達候、以上

覚 印

一 御盃一ツ酒台共

一 御玉貫壺双

一 巢小飯酌かい壺荷捧共

右来十八日より雨乞ニ付入用御座候間、当日早朝大台所江寄候様、御道具当江被仰付可被下候、以上

酉

七月

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

一来十八日より廿日迄雨乞被仰付候段者別段被仰渡通ニ候、右ニ付而者御願御携候面々、三日前ヨリ齋戒沐浴いたし候模ニ而候間、其慎を以随分丹誠を尽御祈願相勤候様可被申渡候、此旨御差函ニ而候、以上

酉

七月

下庫理当 同勢頭

右通被仰渡候間、此段御通達仕候、以上

酉

七月

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

親方部

御触頭

首里殿内 真壁殿内 儀輔殿内

御願携候

諸座諸御蔵

覚

一 御玉貫老対 一 提子老ツ 一 ちゃく式ツ

来十八日より廿日迄雨乞被仰付候付、勤人数江御酒被下用候間、当日早朝寄借可被致候、以上

酉

七月

下庫理

渡久平筑登之

同

花城里之子

御道具当

一来十八日より廿日迄雨乞、首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内江惣横目中取相詰、諸事致下知候様申渡置候間、三平等殿内江茂可被相達候、以上

酉

七月

下庫理当 同勢頭

右通被仰渡候間、此段御通達仕候、以上

酉

七月十一日

下庫理

渡久平筑登之

同

上江洲里之子親雲上

首里殿内 真壁殿内 儀輔殿内

一雨乞中、御願所へ（御願所）之御拝筵、ふくみ筵壹枚、あたん葉筵四枚内壹枚御たかへ所敷用として非番之あさな三人完出勤候様、申渡候事

一雨乞言上相済候日より雨乞中、非番之御轎夫・あさな・中門三人完相詰候様申渡候事

一下庫理詰人数者色衣冠、里之子達以下者色衣計之事

覚

蘇鉄奉行  
兼浜親雲上  
座検者  
牧志親雲上  
蘇鉄奉行足  
波平里之子親雲上  
大与中取  
城間里之子親雲上

蘇鉄奉行  
平安座親雲上  
国学中取  
浦添里之子親雲上  
座検者足  
松島里之子親雲上

一来十八日より廿日迄雨乞被仰付候付、下庫理当人数不足御座候間、三日共足被仰付可被下候、以上

酉

七月十三日

下庫理当

謝花里之子親雲上

下庫理当

奥間里之子親雲上

覚

仮山奉行  
祝嶺親雲上  
再学  
喜舎場親雲上

御系凶座加増仮中取  
松川親雲上  
摩文仁親雲上

右明後十八日より二十日迄雨乞被仰付候付、下庫理当人数不足御座候間、三日共足被仰付可被下候、以上

酉

七月十六日

下庫理当

祢覇里之子親雲上

同

謝花里之子親雲上

覚

普請奉行  
伊良波親雲上  
鳥小堀村嫡子  
桑江筑登之親雲上

御番頭  
屋宜里之子親雲上  
聞得大君御殿座敷大親  
知念筑登之親雲上

右来十八日より廿日迄雨乞被仰付候付、下庫理当人数不足御座候間、三日共足被仰付可下候、以上

酉

七月十六日

下庫理当

祢覇里之子親雲上

謝花里之子親雲上

右通、表御方江差出相濟候段、被仰渡候付、面々江申達候事

一座敷衆之儀、諸奉行より相勤候様、印紙を以相触候事

覚

花当

新垣子 徳田子 安森子

金城子 屋嘉比子

仮花当

比嘉子 座間味子 久田子

仲本子

右来十八日より廿日迄雨乞被仰付候付、下庫理里之子た人数不足御座候間、三日共足被仰付可被下候、以上

酉

七月十三日

下庫理当

謝花里之子親雲上

同

奥間里之子親雲上

右通、表御方江差出相濟候段被仰渡候付、面々江申達候事

一里之子た人数不足二付、足之儀、表御方御案内之上、花当・仮花当より筋目無構申付候事

一啓健之日、龍王豊見城江御越候付、備用として下庫理御物御傘一本、酒庫理老人、しらはせを衣装・大帯着二而、同日五ツ時分、龍王堂江持下、久米村筆者引合相勤候様、印紙相届候付、酒庫理江可被申渡旨、当方江相達候事

附 庫理式度御賄印紙を以大台所より請取候事

焼酎二升三合五夕

右雨乞二付、勤人数并神歌親雲上・同勢頭部江被下用として、印紙を以大台所より請取候事

一雨乞二付三日共、小赤頭四人、御宮仕用として、四ツ頭前出勤有之候様申触候事

一勢頭筑登之人数不足二付、足并親雲上之儀、諸座諸御蔵より相勤候様、印紙を以相触候事

一水大桶式ツ、石ていし四番目之敷瓦浮道涯左右ニ居、前日水汲入させ、葉にか竹式結、長四尺完、壺結ニ三筋ツゝわら小縄ニ而三所完結調、左右桶之上ニ置候事

但、竹之葉結調方之儀、御用拝江申付候也

御城ニ而啓健より満散迄三日共御規式之次第

- 一啓健之日五ツ時成候得者、雨乞中、覆輪御盃式ツ、錫台共錫足御盃四ツ可被下旨当より御近習御取次言上仕被下候得者、里之子た花当請取候事
- 一雨乞勤人数御拝筵、石ていしより五番め敷瓦之上ふくみ筵壹枚完、六番目より八番目迄あたん葉筵壹枚完浮道より壹間程間を置、左右ニ敷させ候様、当番之筑登之た江申渡候事
- 一神歌親雲上・同勢頭部之座、真正面浮道石ていしより拾壹番目、敷瓦之通よりあたん葉筵三ツ折ニして式段敷させ候儀、右同断
- 一大通之時、黄冠以下之座、石ていし左右あたん葉筵式枚完敷させ候儀、右同断
- 一雨乞勤人数相揃候段当より御近習御取次言上仕候事
- 一四ツ時成御内原御火鉢之御前、三平等之大あむしられた御たかへ為相濟段、御近習より詰之当江被申渡候得者御拝人数御庭江被差出、御拝筵江立御拝壹ツ仕着候而四ツ御拝壹度・三拾三拝壹度、又四ツ御拝壹度、三拾三拝壹度、立居之九拝壹度仕候而下庫理江控候事

附 御拝相濟候ハ、筑登之た御中門江詰居、大あむしられた御内原より被差出候ハ、御拝人数相達候也

- 一三平等大あむしられた御内原より被差出候ハ、御拝人数者跡より御当蔵江参り、大あむしられた御たかへ相濟候得者四ツ御拝・三拾三拝、立居之九拝仕、夫より右之次第ニ而御城内拾御前并そのひやふ御嶽・国中城、拾四御前御拝相濟、大あむしられた者直ク聞得大君御殿江参上、御拝人数者登 城、親方部以下勢頭座迄下庫理御座江着、黄冠以下筑登之座敷迄者石ていし江着、神歌親雲上四人南表、同勢頭部四人者北表、左右当之座後五はい一並御座ニ向居、親方部以下着座人数江小赤頭宮仕ニ而御酒被下、相濟、詰之勢頭兩人左右より五はい江伺公、石ていし人数江錫足盃ニ而大通被下、相濟、勢頭本座江着仕、親方部以下御茶被下候事

附 御座頭之親方江御酒被下時分、神歌始ル

- 一右御規式相濟、親方部以下御庭左右御拝筵江立御拝壹ツ仕着、神歌人数浮道ニ敷付置候筵之上ニ親雲上前並、勢頭部後並二居候得者親方部以下四ツ御拝仕、相濟候得者追付神歌始ル、則、勢頭兩人左右より罷出水桶之本参り候得者御拝人数茂同筵之上ニ備立、同勢頭兩人ニ而雨乞歌始、御拝人数江竹之葉ニ而水懸候、御拝人数茂一同ニ歌仕候事

附 神歌仕候間者、雨乞歌并水掛候儀、無絶間相勤候也

雨乞歌左ニ記

一龍王かなし雨たはふれ 雨降て五穀やしなやうれ 雨たはふれ龍王かなし

一龍王かなし雨たはふれ 雨降てふさつやしなやうれ

かみしも揃とて 願やへむ

右相濟、座頭之親方より詰之当御取次首尾言上仕、退城之事

附 三日共本文同断、当御番之三司官江者勢頭参上、首尾申上候也

- 一神歌親雲上・同勢頭部江御酒被下候段、当より勢頭江被申渡候得者勢頭より筑登之た江申渡、神歌親雲上者於南之詰座、花当酌ニ而被下、同勢頭部者同廊下ニ而家来・赤頭酌

## ニ而提子之御酒被下候事

聞得大君御殿・首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内ニ而、啓健より満散迄三日共、御規式之次第

一御拝人数、親方・座敷・当・勢頭・親雲上た・里之子た・筑登之た各三人完ニ而三七人朝衣冠ニ而聞得大君御殿江参上被致候ハ、御拝人数被相揃候段、勢頭より御物大親江相達候得者、御物大親ニ而あくしたれ御取次達 尊聞候事

附 三日共同断

一三平等大あむしられ、掟・佐事あむしられ、御城中御嶽々并そのひやふ御嶽・国中城迄御たかへ相濟、聞得大君御殿江被参次第、惣御人数相揃候段、大親ニ而あむしたれ御取次申上候事

一御たかへ相濟、御庭御拝からめき申様、あこしたれより通達有之候得者、其段御物大親より勢頭江相達候、則御拝人数御庭江被差出、立御拝ニ而各位階次第、左右ニ着座被致候得者、御取次親雲上より御すじ之御前江御焼香御拝可被相勤様申達候、左候得者、歳兄之親方御焼香台之前江立寄、御香五本灯上ヶ本之座江着、惣人数四ツ御拝・三拾三拝・立居之九拝被相勤候、又御取次親雲上より御火鉢之御前江御焼香可被相勤様相達候得者、如最前、歳兄之親方御香五本灯上ヶ四ツ御拝・三拾三拝・立居之九拝相勤被控居候、頓而こゑな終、大あむしられ、掟・佐事あむしられ真正面之階より御庭江被罷出、首里・真壁・儀輔あむしられハ西表、真壁殿内大あむしられ者東表、水桶本、浮道ニ向被立備候、此時御拝人数茂一同立備、掟あむしられより鼓壺ツ勢頭江相渡、左右大あむしられ竹之葉ニ而御拝人数江水三篇かけ退候得者、勢頭壺人御中門前浮道ニ立、鼓壺ツ拍子ニ而打、一人完、左右水桶本ニ参り、御拝人数江水かけなから雨乞歌根取仕候得者、いつ連も請次之雨乞歌三篇仕相終、御拝人数退出、引次大あむしられ、掟・佐事あむしられ退出、御番取上座ニ而差替被帰候事

附 三日共同断

一雨乞歌御城同断

一御庭御座配之儀、聞得大君御殿御願公事ニ委ク相見得候事

一右御規式相濟、御拝人数親方部頭ニシテ一七人完差分ヶ、首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内江参り、各あむしられ御たかへ被仕候得者、四ツ御拝・三拾三拝・立居之九拝仕、相濟、右之御首尾、親方部三人登 城、当御取次言上仕、退城之事

附 三日共本文同断、当・御番之三司官江者勢頭参上申上候也

龍王堂・天尊堂御勤之次第

一啓健之日、三司官・申口・座敷・当・勢頭・里之子・筑登之メ一七人、五ツ時前、上之天后宮江御差越、巳之時成候ニ付、龍王御前江三司官御頭ニシテ那覇・久米村諸官人御一同、五ツ御拝仕、久米村人、疏文読上、相濟候得者、三司官御始御拝人数、三百三拾三拝・立居之九拝仕、三司官より御祭被成、いつ連も又五ツ御拝被成、御規式段々相濟、如天尊堂、三司官御始諸官御差越、御規式之次第、龍王堂同断、相濟、八ツ頭時分、三司官登 城、当御取次首尾言上仕、退城之事

附 啓健之日、五ツ頭前、勢頭・筑登之・平等所筆者・筑佐事式人、御使之三司官殿

内江参り、右人数相揃候ハ、与力引合仕、銘々袖結五ツ時前、如上之天后宮御差越之時、下綾門外ニ而勢頭・筑登上・平等所筆者騎馬、上之天后宮門外大道ニ而下馬、龍王堂御拝相濟、如天尊堂御越之時、最前下馬之所ニ而騎馬、天尊堂之前小堀之側ニ而下馬、天尊堂御拝、相濟、御帰之時、最前下馬之所ニ而騎馬、下綾門外ニ而下馬仕候也

一満散之日、龍王堂・天尊堂三司官御始一七人御差越御勤之次第、又者御首尾言上、啓健同断

一三司官御備者、筑佐事式人左右引鞭持、其次平等所筆者老人、其次筑登之た老人、其次勢頭老人、其次三司官安駄、同かけ、与力式人、小姓五人、八卷家持老人、草り取老人、鍵持老人、雨具持老人

一中日ニ者三司官御下無之ニ付、長史罷登雨乞相勤候御首尾当御取次言上仕候事

一於円覚寺・護国寺雨乞御祈念并祝部雨乞相勤候御首尾三日共寺社中取登 城、右同断

一泊中雨乞相勤候御首尾三日共頭取登 城、右同断

右、雨乞日記如斯御座候、以上

酉

七月

下庫理筑登之

渡久平筑登之

同里之子

花城里之子

同勢頭

上江洲里之子親雲上

同当

謝花里之子親雲上



## 「雨乞日記」第 478 号について

山里 純一

【年代】同治 12 年癸酉（1873）

【書誌及び関連情報】

表題には「雨乞日記 五冊」とあるが、厳密に言えば、内題にあるように「御結願日記」である。

本日記は、同治 12 年 2 月 3 日～5 日、同年 2 月 25 日～27 日の二度の雨乞に対する結願における評定所の記録である。『球陽』尚泰 26 年条に、「本年二月、天に告げ雨を禱ること已に兩次に及ぶ。其の閏六月に至り、一共に願を還す」とある記事に対応する。

【内容】

内容は同治 2 年の「御結願日記」とほぼ同じである。

なお言上の項目のうち「勤人数朝衣冠之事」について上端に〔是文咸豊四年□□位階之冠相加ふり候様被仰〕、また「御願所御供物之儀、此中之通可被仰付事」の左脇に〔向々首尾方之砌□□□□御供物之儀同治三年之例通〕と、それぞれ後筆が見られる。

「史料本文」

閏六月九日

当二月兩度雨乞御立願被仰付置候付、御結願日撰書久米村方より差出候付、十九日ニ被仰付候筋言上相済、左之通、向々江為致通達候事

附 日撰書三司官迄承届候也

覚

一今月十九日乙未巳之時

一同廿日丙申午之時

一同廿三日己亥午之時

右雨乞御結願御日撰如斯御座候、以上

酉

閏六月

通書役 屋宜里之子親雲上

右之通承届申候、以上

酉

閏六月

長史足 山口通事親雲上

宮城親雲上

謹言上

一当二月兩度雨乞御立願被仰付置候付、今月十九日左之通、御結願可被仰付事

一御城御火鉢御前并嶽々御たかへ仕、親方部頭ニシテ三七人ニ而御拝之事

一聞得大君御殿御火鉢御前おたかへ有之、済而親方部頭ニシテ三七人ニ而御拝仕、且亦、於三平等御たかへ仕、親方部頭ニシテ一七人ニ而御拝之事

一於円覚寺・護国寺、禪家・聖家二而御結願之事  
 一於龍王殿・天尊堂、久米村人数大夫頭ニシテ一七人ニ而、右同断之事  
     附三司官一人・申口一人・座敷一人・当一人・勢頭一人・里之子一人・筑登之一人  
     七人罷下、久米村・那覇勤人数一所御拜之事  
 一泊并祝部・諸間切、右同断之事  
 一勤人数朝衣冠之事                    [是文咸豊四年□□位階之冠相加ふり候様被仰]  
 一御願所御供物之儀、此中之通可被仰付事  
 以上                                    [向々首尾方之砌□□□□  
     酉                                    御供物之儀同治三年之例通]  
     閏六月九日

右之通言上相濟候間、諸間切其外首尾係江茂申渡、諸事無間違可被相勤候、以上  
     酉  
     閏六月九日                            喜屋武親雲上  
 御物奉行

右之通言上相濟候間、諸事無間違可被相勤候、以上  
     酉  
     閏六月九日  
 御書院  
 御近習座  
 下庫理当  
 同勢頭  
 寺社座  
 申口  
 普請奉行  
 瓦奉行  
 聞得大君御殿  
 大親

右之通言上相濟候間、首里中・那覇中・久米村中・泊中、不洩申渡、勤ニ携候面々ニ茂  
 諸事無間違相勤候様、可被申渡旨、御差図ニ而候、以上  
     酉  
     閏六月九日  
 平等之側  
 惣役  
 長史  
 里主  
 御物城  
 泊頭取

右言上写聞得大君御殿江者百田紙横折ニ相調、下庫理勢頭ニ而上させ、摂政・三司官衆江者棉紙切紙書付公事触を以届上させ候事

附 三平等大あむしられ江者勢頭方より通達有之候也

来十九日雨乞御結願午之時より相始候間、此段致問合候、以上

戊

六月廿四日

御書院

御近習座

御物奉行

申口

下庫理当

同勢頭

寺社座

平等之側

普請奉行

瓦奉行

聞得大君御殿

大親

惣役

長史

里主

御物城

泊頭取

来月十九日雨乞御結願被仰付候段者、別段被仰渡置通候、右ニ付而者、御願御携候面々、三日前より神戒沐浴いたし候模ニ而候間、此段勤人数江可被申渡候、此旨御差図ニ而候、以上

酉

閏六月九日

御物奉行

下庫理当

同勢頭

平等之側

惣役

長史

里主

御物城

泊頭取

可被相達候、以上

酉

戌六月廿四日  
御近習座

戌七月十七日御双紙庫理吟味、宜野湾里之子親雲上二而遂披露御座印押渡ル

覚

蘇鉄奉行  
平安名親雲上  
兼浜親雲上  
国学中取  
国頭里之子親雲上  
大与中取  
城間里之子親雲上

右来十九日雨乞御結願付、当勤有之候処、人数不足御座候間、足被仰付可被下候、以上  
酉

閏六月

下庫理当  
謝花里之子親雲上  
翁長里之子親雲上

本文右同断

覚

仮花当  
比嘉子  
同  
崎原子  
同  
仲本子  
同  
座間味子  
同  
久田子

右来十九日雨乞御結願付、里之子勤有之候処、人数不足御座候間、足被仰付可被下候、以上  
酉

閏六月

下庫理当  
謝花里之子親雲上  
翁長里之子親雲上

本文酉閏六月十八日宜野湾里之子親雲上二而遂披露御座印押渡ル

覚

天王寺 得元長老

右来十九日雨乞御結願付、円覚寺住持了道長老勤有之候処、腹痛ニ付勤難成事御座候間、勤足被仰付可被下候、以上

酉

閏六月

寺社足中取

具志頭里之子親雲上

同中取

大村里之子親雲上

国頭里之子親雲上

同奉行

嘉味田親雲上

護得久按司

同十九日

一雨乞御結願付、三司官川平親方・平等之側東風平親雲上・座敷・当・勢頭・里之子・筑登之迄一七人、朝衣冠ニ而五ツ頭時分、龍王堂江差越、長史より御供物奉備候段案内有之、三司官手水遣みはい座江着、御香御酒頂キ龍王堂当江相渡、御銘々御前江上させ五ツ御拝仕、祝文読上相済候得者、乍立三拾三拝・立居之九拝仕、打紙并祝文爐内ニあふり上置候、御酒爐内ニ納候得者、五ツ御拝仕候、委細久米村雨乞御双紙又者同日記ニ相見得候事

附

一御立願之時、堂内着座之人数、御五水御菓子馳走有之候得共、此節者御五水計ニ而候也

一那覇・久米村勤人数之内、暇乞有之節者、三司官見届候也

一右相済、天尊堂江差越、勤之次第

龍王堂同断、相済八ツ頭時分登

城、下庫理当御取次、首尾言上仕候事

附 評定所月番筆者一人三司官江相附差越候也

以上、

同治十二年癸酉 閏六月

評定所筆者相附足

嵩嶋里之子親雲上

日帳主取

喜屋武親雲上

御鎖之側

幸地親雲上

## 「雨乞日記」第479号について

山里 純一

【年代】同治2年癸亥（1863）

【書誌及び関連情報】

表題には「雨乞日記 五冊」とあるが、雨乞を祈願した神仏に対する願ほどきである「御結願」の日記である。内題に「戊七月同八月雨乞御結願日記」とあるように、本日記は、前年の同治元年7月と8月の二度の雨乞に対する御結願の時のものである。『球陽』に「本年、例に照らして官に命じて、恭しく去年七八両月の祈雨の願を還す」とある記事に対応している。

【内容】

「結願日記」の記載形式は「雨乞日記」とほとんど同じであるが、三司官が日選書を持って国王の元へ参上し決定してもらう手続きは省略し、三司官が決定し国王に言上した後、関係部署へ通達している。

通達先も「雨乞日記」とほぼほとんど変わらない。ただ「豊見城間切両惣地頭」の右に「豊見城間切両惣地頭、雨乞御結願之時者勤無之由候間、以後御結願之時都而之触可取止候、為心得朱入いたし置候也」との傍書が見える。

本日記には結願の際、龍王堂・天尊堂へは誰が参詣するかという議論が見える。概略を記すと、去年の雨乞における龍王堂・天尊堂勤めに際しては、三司官が異国人逗留の対応のため代理を立てたが、この度の結願では、もはや異国人は帰国しているので三司官が勤めるのが筋である。しかし『大清会典』や「礼部則例」では原祈官を遣わしているので代理（立願者）でもかまわないのではないかという申し出に対して、代理では軽すぎるので、仏神尊敬の念を込めて三司官が勤めるべきであるという結論を下したものである。

結願の時の龍王堂と天尊堂での儀礼についても書かれているが、雨乞の時とは違って那覇・久米村諸官人の御拝はなく、三司官は手水遣御拝座に着き御香と御酒を御前へ上げる。また堂内でのご馳走は、立願の時にあったお菓子はなく、御五水のみである。

「史料本文」

六月六日

去年七月同八月雨乞御立願被仰付置候付、御結願日撰書久米村方より差出候付、十八日ニ被仰付筋言上相済、左之通、向々江為致通達候事

附 日撰書三司官迄承届候也

覚

一来月九日甲申巳之時

一来月十日乙酉午之時

一来月十六日辛卯午之時

一来月十八日癸巳午之時

右雨乞御結願御日撰如斯御座候、以上

亥

五月

通書役 神山里之子親雲上

右之通承届申候、以上

亥

五月

安慶名親雲上

松本親雲上

謹言上

- 一去年七月同八月雨乞御立願被仰付置候付、今月十八日左之通御結願可被仰付事
- 一御城御火鉢御前并嶽々御たかへ仕、親方部頭ニシテ三七人ニ而御拝之事
- 一聞得大君御殿御火鉢御前おたかへ有之、濟而親方部頭ニシテ三七人ニ而御拝仕、且亦、於三平等御たかへ仕、親方部頭ニシテ一七人ニ而御拝之事
- 一於円覚寺護国寺、禪家聖家ニ而御結願之事
- 一於龍王殿・天尊堂、久米村人数大夫頭ニシテ一七人ニ而、右同断之事  
附三司官一人・申口一人・座敷一人・当一人・勢頭一人・里之子一人・筑登之一人  
七人罷下、久米村那覇勤人数一所御拝之事
- 一泊并祝部・諸間切、右同断之事
- 一勤人数朝衣冠之事 [本文咸豊四年より位階之冠相かふり候様被仰付]
- 一御願所御供物之儀、御立願之御品練蕉布一端宛可被召重事

附

一龍王堂・天尊堂御供物者、此中之通、可被仰付事

一諸間切江者御立願御供物ニ参錢相重可申事

以上

亥

六月六日

右之通言上相濟候間、諸間切其外首尾係江茂申渡、諸事無間違可被相勤候、以上

亥

六月六日

桑江親雲上

御物奉行

右之通言上相濟候間、諸事無間違可被相勤候、以上

亥

六月六日

御書院

御近習座

下庫理当

同勢頭

寺社座

申口

普請奉行

瓦奉行

聞得大君御殿

大親

[豊見城間切両惣地頭、雨乞御結願之時者勤無之由候間、以後御結願之時都而之触可取止候、為心得朱入いたし置候也]

豊見城間切

両惣地頭

右之通言上相濟候間、首里中・那覇中・久米村中・泊中、不洩申渡、勤ニ携候面々ニ茂諸事無間違相勤候様、可被申渡旨、御差図ニ而候、以上

亥

六月六日

平等之側

惣役

長史

里主

御物城

泊頭取

右言上写聞得大君御殿江者百田紙横折相調、下庫理勢頭ニ而上させ、摂政・三司官衆江者棉紙切紙書付公事触を以届上させ候事

附 三平等大あむしられ江者勢頭方より通達有之候也

来十八日雨乞御結願午之時より相始候間、此段致問合候、以上

亥

六月六日

御書院

御近習座

御物奉行

申口

下庫理当

同勢頭

寺社座

普請奉行

瓦奉行

聞得大君御殿

大親

豊見城間切



兩惣地頭  
惣役  
長史  
里主  
御物城  
泊頭取

一來月十八日雨乞御結願被仰付候段者、別段被仰渡置通候、右ニ付而者、御願御携候面々、三日前より齋戒沐浴いたし候模ニ而候間、此段勤人数江可被申渡候、此旨御差図ニ而候、以上

亥

六月六日

御物奉行  
下庫理当  
同勢頭  
平等之側  
豊見城間切  
兩惣地頭  
惣役  
長史  
里主  
御物城  
泊頭取

可被相違候、以上

亥

六月六日

御近習座

去年雨乞之時、於龍王堂・天尊堂、三司官勤之儀、異国人逗留ニ付、識名親方江足被仰付置候處、此節御結願者異国人引取候付、三司官より可相勤候得共、大清会典ニ原祈官を遣て報祀る口有之、久米村方より茂諸書相糺、猶又、識名江足被仰付可宜哉段、別紙之通、吟味を以申出候付而者、識名被相勤候方ニ茂相見得候得共、右御立願之儀、三司官より可相勤之處、異国人逗留付無是非、足勤被仰付置事ニ而、最早引取候付而者、三司官より相勤候方、仏神御尊敬筋相計可申、尤右会典ニ原祈官を遣与之御趣意茂、御結願之時、足勤等ニ而輕相成候而者、不相濟所より、右通、可有之哉、旁以、此節茂足勤被仰付候而者如何敷事ニ而、三司官より相勤候事

去年於龍王堂・天尊廟、雨乞御立願之時御勤之三司官衆、異国人逗留付、識名親方足被相勤候處、最早異国人引取相成候付而者、此節御結願者、御座より御勤可被成候得共、大清

会典ニ雨を祈て雨足る後、原祈官を遣て報祀る相見得候由、就而者、識名被相勤候方可然哉、諸書相糺、何分吟味を以可申出与被仰渡、諸書繰合申談候処、大清会典大清則例も被仰口通相見得、礼部則例ニも嘉慶拾年六月、儀親王・成親王・慶郡王を遣て雨乞被仰付候筋言上相濟、未御礼式不被召行内、雨降候付、右親王御三人を遣て御結願被仰付、道光拾老年五月ニも惇親王を遣て雨乞被仰付、既ニ雨降候後者、是又右惇親王を遣て御結願被仰付置候段相見得申候間、此節御結願之儀、識名親方被御勤候方可宜哉与吟味仕、此段申上候、以上

亥 六月

安慶名親雲上

松本親雲上

天願親方

口上言上

国学中取

真玉橋親雲上

同

国頭里之子親雲上

大中村嫡子

普天間里之子親雲上

右明後十八日雨乞御結願付、下庫理当人数不足有之候間、足被仰付被下度旨、御書院当大宜見里之子親雲上御取次達

上聞相勤候事

亥

六月十二日

口上言上

花当

山川子

同

松本子

同

名嘉原子

仮花当

比嘉子

同

松川子

右明後十八日雨乞御結願付、下庫理里之子人数不足有之候間、足被仰付被下度旨、右同人御取次達

上聞相濟候事

亥

六月十二日

同十八日

一雨乞御結願付、三司官与那原親方・申口美里親雲上・座敷・当・勢頭・里之子・筑登之迄一七人、朝衣冠ニ而四ツ頭時分、龍王堂江差越、長史より御供物奉備候段案内有之、三司官手水遣みはい座江着、御香御酒頂キ龍王堂当江相渡、御銘々御前江上させ五ツ御拝仕、祝文読上相濟候得者、乍立三拾三拜・立居之九拝仕、打紙并祝文爐内ニあふり上置候、御酒爐内ニ納候得者、五ツ御拝仕候、委細久米村雨乞御双紙又者同日記ニ相見得候事

附

一御立願之時、堂内着座之人数、御五水御菓子馳走有之候得共、此節者御五水計ニ而候也

一那覇・久米村勤人数之内、暇乞有之節者、三司官見届候也

一右相濟、天尊堂江差越勤之次第

龍王堂同断、相濟七ツ頭時分登

城、下庫理当御取次、首尾言上仕候事

附 評定所月番筆者一人三司官江相附差越候也

以上、

同治貳年癸亥 六月

評定所寄筆者

真栄平筑登之親雲上

日帳主取

桑江親雲上

御鎖之側

玉城親雲上

## 「雨乞御代参日記」第480号について

山里 純一

【年代】道光20年(1840)

【書誌及び関連情報】

「雨乞日記 五冊」とは別立てになっており、表題の「雨乞御代参日記 一冊」と内題の「雨乞御代参公事 下庫理」が若干異なる。また末尾には「右御双紙之儀云々」とあることから、御双紙とも呼ばれていた。ちなみに同治2年と同治12年の「雨乞御結願日記」(第479・478号)には「久米村雨乞御双紙又者同日記」という記載が見え、雨乞の記録として「御双紙」と「日記」の両方があった可能性もある。「雨乞日記」と別立てにしたのは本文書が本来「下庫理雨乞御双紙」(仮称)だったためであろうか。

『球陽』巻21、尚育5年(道光20年(1840))条によれば、「是の年、旱魃虐を為し、雨沢降らず。二月十五日より十七日に至るまで、弁嶽・雫嶽に於て、官を遣わし代禱せしむ。又園比屋武嶽に於て、其の祝女をして朝夕念呪せしむ。更に親方を遣はし、官僚共に十七人を率同して情を合わせて拝謁し、訖りて竜潭に到り、竜舟に坐駕して、爬龍し、雨を禱らしむ。其の余の各嶽は、例に照らして禱告す」とある。

本日記は、上記の『球陽』の記事に対応するものである。

【内容】

内容は、大きく「弁之御嶽・雨乞之御嶽参詣御名代并御城・聞得大君御殿・そのひやふ・首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内・龍王堂・天尊堂ニ而雨乞付、前日之公事」と「当日之公事」に分かれるが、「龍王堂・天尊堂御勤次第」は別途まとめられている。

「前日之公事」に「御城」の語も見えるが、この時の雨乞は数度の雨乞でもなお効験が現れない時の緊急事態のものであり、通常雨乞の際に首里城内で行われる儀礼と異なる。「当日之公事」で注目されるのは、「魚小堀」すなわち龍潭における爬龍舟競争である。『球陽』の記事から、この時の雨乞では龍潭で舟に乗って雨を禱ったことが知られるが、本日記にはその様子が具体的に書かれている。すなわち、啓健・中日には朝晩、満散には朝一度、そのひやふ御嶽で御たかべをし、親方部を頭にして一七人(7人)が四ツ御拝、三十三拝、立居の九拝を行い、魚小堀(龍潭)に於いて爬龍舟に乗るとあり、また魚小堀に於いて泊爬龍舟漕の時、雨乞歌を謡いかねを打つとある。

とりわけ特徴的なのが、他の「雨乞日記」には見られない図(「雨乞之御嶽御座構之図」)が描かれている点である。その図によれば、雨乞御嶽の当日の設営状況、御拝人数および御名代をはじめ王子衆・按司衆・三司官、勤め人数の着座の位置関係および敷かれる畳・蓆の種類がわかる。これまで伊波普猷『古琉球の政治』および鎌倉芳太郎ノートに紹介されている、『聞得大君御殿之御願公事帳』の「雨乞御願の御庭御飾の図」は知られていたが、本文書の図は、王城外の雨乞場面をイメージできる貴重な資料である。

「史料本文」

弁之御嶽・雨乞之御嶽参詣御名代并御城・聞得大君御殿・そのひやふ・首里殿内・真

- 壁殿内・儀輔殿内・龍王堂・天尊堂ニ而雨乞付、前日之公事
- 一雨乞之言上写百田紙半折ニ相調、評定所筆者より勢頭方江相届候付、御調文箱ニ入勢頭  
 参上、聞得大君御殿者大親、御名代者与力御取次差上候事
- 一雨乞之言上相済候付、当以下仮花当迄登 城、諸事手組仕候事
- 一御盃式ツ 一御玉貫式双
- 一巢小飯耐かい式荷捧共
- 右、来十五日より十七日迄雨乞付、入用として、当日早朝寄候様、御道具当江印紙を以  
 相達候事
- 一丹後壺ツ
- 但、高九寸、差渡八寸、雑板調ニ而くさし箒
- 右、雨乞付、雨乞御嶽江御飾用として結調、前々日此方江寄借有之候様、砂糖座江印紙  
 を以相達候事
- 一御玉貫式双 一提子壺ツ 一ちよく式ツ
- 右、来十五日より十七日迄雨乞付、勤人数江御酒被下用として当日早朝寄候様、御道具  
 当江印紙を以相達候事
- 一御畳四拾五枚内 壺枚御拜御座敷用
- 右、御棧敷敷用として、御書院御物より印紙を以御用借仕候事
- 一雨乞之御嶽御茶湯構并御茶湯用、花当式人、酒庫理式人、相賦入用之御道具前日取揃せ  
 置、当日早朝持越候御道具左ニ記
- 一御風呂釜壺通柄杓共、御書院より借請取候也
- 一上茶四拾目、印紙を以納殿より請取候也
- 一炭拾斤、雨乞御嶽江寄払、印紙を以大台所より請取候也
- 一焼耐五済、於雨乞御嶽勤人数江被下用として寄払、印紙を以右同断
- 一煎茶之碗三束、下こおり御物
- 一丹後壺荷、右同
- 一連台七枚、右同
- 一秀才屋貫壺ツ、右同
- 一茶巾壺切、右同
- 一御玉貫三对、当日早朝寄候様、御道具当江問合仕置寄請取候也
- 一当・里之子た人数不足付、足被仰付候事
- 一雨乞方、当・勢頭・里之子た、筑登之た式人完相賦、面付書御双紙庫理江差出候事
- 一焼耐式済三合五夕
- 右、雨乞付、於下こおり勤人数并神歌人数江被下用として寄払、大台所より寄請取候  
 事
- 一笙家来赤頭式人内（割書き：一人当番）、御名代之供奉相勤候様、前日申渡候事
- 一弁之御嶽・雨乞之嶽并嶽々御供物、都而勢頭方より相調候事

#### 当日之公事

- 一於雨乞御嶽、御酒被下用、且雨乞中、勤人数江御酒被下用、覆輪御盃四ツ、錫台共錫足

御盃四ツ、三日共可被下旨、御近習御取次、言上仕被下候得者、右御嶽江相越候事  
一御参詣御名代、五ツ時、弁之嶽拜殿江御着被成候得者、大嶽・小嶽・さやは表迄、三平等大あむしられたニ而御たかへ仕、相濟候段、勢頭承、同人ニ而御名代并御召附之親方江御拜之御案内仕、大嶽・小嶽・さやは表迄、四ツ御拜・三拾三拜・立居之九拜仕、相濟候得者、勢頭ニ而雨乞之御嶽之様、御打立之御時分申上候事

附

一大嶽・小嶽・さやは表、三平等大あむしられ御たかへ并御名代御拜之時、神歌有之候也

一御座構并御備者、正五九月御参詣、御代参之時、同断

一御名代を始、御備人数親雲上迄者黄八卷、赤八卷之方者朝衣計

一弁之御嶽より雨乞之御嶽江御道筋、継世門前より崎山之御嶽前御通路之事

一御名代、雨乞之御嶽御着被成候砌、王子衆・按司衆・三司官・三司官座敷・親方部・御物奉行・申口・申口座・吟味役・座敷当・当座以下筑登之座敷迄、御嶽之前ニ而御迎、御一礼有之候事

附 王子衆以下親雲上迄者黄八卷、赤八卷之方者朝衣計

一御名代御棧敷御着被成候得者、何れ茂御一礼着座仕候事

一三平等大あむしられ御たかへ相濟候段、勢頭承同人ニ而御拜之御案内申上、御名代を始悉皆御拜相濟、大あむしられたニ而丹後之水、竹之葉ニ而掛上、相濟、何れ茂御退座被成候事

附

一御拜之次第、弁之御嶽、同断

一三平等大あむしられ御たかへ之砌より、御名代を始何れ茂御拜并水掛上候時まで神歌有之候也

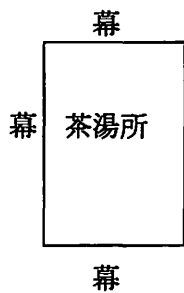
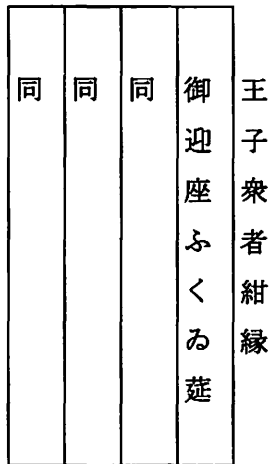
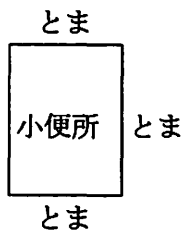
一右相濟、御名代を始吟味役迄、御棧敷江御着被成候得者御酒御茶被下、座敷以下者大通被下候事

附

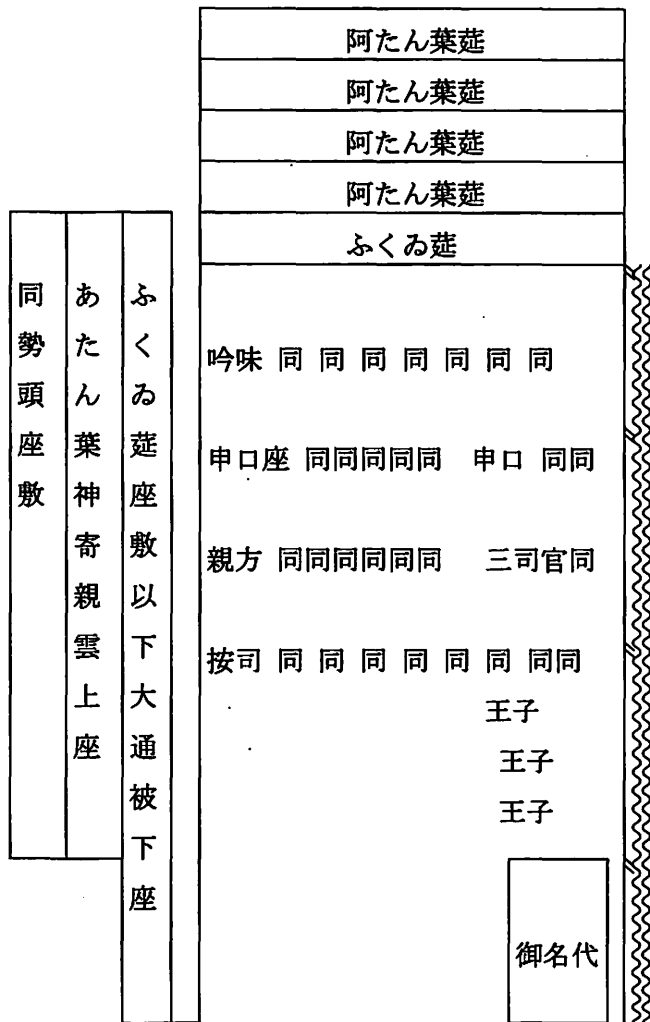
一御酒御茶被下候時、神歌仕候也

一王子衆・按司衆江御酒御茶、当・三司官以下吟味役迄御酒、里之子た御茶、小赤頭座敷以下勢頭座迄大通（覆輪御盃）、黄冠以下大通（錫足御盃）、里之子た宮仕

【雨乞之御嶽御座構之図】



東





ふく  
る  
筵

同 勢 頭 部 座	同 神 寄 座	あ た ん は 大 阿 む し ら れ
-----------------------	------------------	--

○ た ん こ	同	同	ふ く る 筵
		上 水 色 紗 綾 縁	下 疊

王子衆御座ハ紺へり 按司衆ハ ふくゐ  
 三司官・同座敷・親方部 ふくゐ  
 申口・申口座・吟味役・御書院当 あたんは  
 座敷衆当座 あたんは  
 勢頭座以下黄冠 あたんは  
 里之子筑登之 あたんは  
 同



一御名代御帰之砌、王子衆以下最前之通、御礼儀有之候事

附 御城・そのひやふ・聞得大君御殿勤人数之外者直ニ被帰候也

一右相済、御名代御帰之砌者継世門より美福門江御通路、於下庫理当御取次首尾言上仕候事

附 引鞭并羽御鑓者美福門外迄御帰仕、勢頭・筑登之た者廊下前迄、御先通相勤候也  
一雨乞之御嶽御規式相済候得者、親方部頭にして三七人者御城、三七人者聞得大君御殿、老七人者そのひやふ御嶽江罷出候事

一そのひやふ御嶽、啓健・中日二者朝晩、満散二者朝一度御たかへ有之、親方部頭にして一七人ニ而四ツ御拝・三拾三拝、立居之九拝仕、則於魚小堀爬龍舟ニ乗候事

一右啓健・中日二者晩之勤相済次第、親方登 城、当御取次首尾言上仕候事

附 満散二者朝之勤相済次第、本文同断

一於魚小堀泊爬龍舟漕候砌、雨乞歌并かね打候、尤漕手親雲上・里之子・筑登之座敷朝衣計着候事

一啓健より満散迄、そのひやふ御嶽御たかへ仕、相済、三平等大あむしられた直ニ登 城、御内原御火鉢之御前御たかへ仕、相済候段、御近習より詰之当江相達候得者、御拝人数御庭江罷出、御拝筵ニ立御拝老ツ仕着、四ツ御拝一度・三拾三拝一度、又四ツ御拝一度・三拾三拝一度、立居之九拝一度仕、相済、下庫理江控居候事

附 筑登之た者人、御中門江詰居、大あむしられた御たかへ相済、御内原より被差出候ハ、御拝人数江相達候也

一三平等大あむしられた御内原より被差出候ハ、御拝人数者、跡より御当蔵江参り、大あむしられた御たかへ相済候得者、四ツ御拝・三拾三拝、立居之九拝仕、夫より御城内嶽々・國中城御嶽迄、朝一度御たかへ仕、親方部頭にして三七人ニ而四ツ御拝・三拾三拝・立居之九拝仕、三平等あむしられた者國中城御嶽より直ニ聞得大君御殿江参上、御拝人数者登 城、親方部以下勢頭座迄下庫理江着、御酒御茶被下、黄冠以下筑登之座敷迄者石ていし江控させ、五はいニ而大通被下候事

附 御座頭之親方江御酒被下候時分、神歌始ル

一右御規式相済、親方部以下、御庭左右御拝筵ニ立御拝老ツ仕着、神歌人数、浮道筵ニ親雲上前並、勢頭部後並ニ居候得者、親方部以下四ツ御拝仕、追付、神歌始、勢頭式人、左右より罷出、水桶之本江参り候得者、御拝人数立備、勢頭ニ而雨乞歌始、御拝人数江、竹之葉ニ而水掛候、尤御拝人数茂一同雨乞歌仕候事

一右相済、座頭之親方より、詰之当御取次、首尾言上仕、退城之事

附 三日共本文同断、当御番之三司官江者、勢頭参上、首尾申上候也

一啓健・中日二者、晩ニ茂爬龍舟漕候時分、下庫理并御庭ニ而神歌仕候事

一神歌親雲上・同勢頭部江御酒被下候段、当より勢頭江申渡候得者、勢頭より筑登之た江申渡、親雲上者於南風之詰座花当酌、勢頭部者同廊下ニ而家来赤頭酌ニ而、提子之御酒被下候事

一大あむしられた者、三平等御たかへ相済次第、そのひやふ御嶽江罷出、晩之御たかへ仕候事

一聞得大君御殿御拝人数相揃候ハ、三日共其段、勢頭より御物大親御取次達

尊聞、御たかへ相済、御庭御拝からめき申様、右大親より勢頭江相達候ハ、則御拝人

数御庭江罷出、各位階次第、左右御拝筵ニ立御拝ニ而着候得者、御取次親雲上より御香五本灯、御すし之御前、御焼香御拝可被相勤段様子有之候得者、西表座上之親方御焼香台之前江差寄、御焼香相濟、本座江着、何れ茂四ツ御拝・三拾三拝・立居之九拝仕、又御取次親雲上より御火鉢之御前江御焼香可被相勤段様子有之候得者、最前之通相勤、頓而こゑな終り、大あむしられ、掟・佐事あむしられ真正面之階より御庭江被罷出、首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内あむしられ者西表、真壁殿内大あむしられ者東表、水桶之本、浮道ニ向被立備、此時御拝人数茂一同立備、掟あむしられより鼓壺ツ勢頭江相渡、左右大あむしられた竹之葉ニ而御拝人数江水三篇かけ退候得者、勢頭一人御中門前浮道ニ立、鼓一ツ拍子ニ而打、勢頭一人完、左右水桶之本ニ参り、御拝人数江水掛なから雨乞歌根取仕候得者、御拝人数何れ茂請次之雨乞歌三篇仕、相濟退去候事

附 三日共同断

一右御規式相濟、御拝人数親方頭ニシテ一七人完差分ケ、首里殿内・真壁殿内・儀輔殿内江参り、各あむしられ御たかへ被仕候得者、四ツ御拝・三拾三拝・立居之九拝仕、相濟、親方部三人登 城、当御取次首尾言上仕、退城之事

附 三日共本文同断、当御番之三司官江者勢頭参上首尾申上候也

#### 龍王堂・天尊堂御勤之次第

一啓健満散之日、三司官・申口・座敷・当・勢頭・里之子・筑登之壺七人、五ツ時分、上之天后宮江御差越、巳之時成候付、龍王御前江三司官頭にして那覇久米村諸官人一同、五ツ御拝仕、久米村人、疏文読上相濟候得者、三司官始御拝人数、三百三拾三拝・立居之九拝仕、三司官御祭被成、何れ茂又五ツ御拝仕、御規式段々相濟、如天尊堂、三司官始諸官差越、御規式之次第、龍王堂同断、相濟、三司官登 城、当御取次首尾言上仕候事

附啓健満散之日、五ツ頭時分、勢頭・筑登之・平等所筆者・筑佐事式人、御使之三司官宅江参り、与力引合仕、銘々袖結、五ツ時分、上之天后宮江差越候、尤下綾門外ニ而勢頭・筑登上・平等所筆者騎馬、上之天后宮門外ニ大道ニ而下馬、龍王堂御拝相濟、如天尊堂被差越候時、最前下馬之所ニ而騎馬、天尊堂之前小堀之側ニ而下馬、天尊堂御拝相濟、御帰之時、最前下馬之所ニ而騎馬、下綾門外ニ而下馬仕候也

一中日ニ者三司官御下無之付、長史罷登雨乞相勤候首尾、当御取次言上仕候事

一於円覚寺・護国寺雨乞御祈念并祝部雨乞相勤候首尾、三日共寺社中取登 城、右同断

一泊中雨乞相勤候首尾、三日共頭取登 城、右同断

道光貳拾年庚子

右御双紙之儀落冊付、此節御評定所公事記杯見合組立、得御差図、御印添申候間、後年ニ至り違同出来候ハ、則々御差図之上可被相直候、以上

下庫理当

奥武里之子親雲上

同

今婦仁里之子親雲上

同

源河里之子親雲上  
御双紙庫理吟味役  
喜名親雲上  
御双紙庫理  
奥武親雲上

下庫理当